

キリストに従う

ゲイル・アーウィン
GAYLE D. ERWIN

関根一夫（共訳）為本雅之



キリストに従う

ゲイル・アーウィン

〈共訳〉

関根一夫
為本雅之

罪赦された私の心

朝日に光る雪のよう

キリスト・イエスがすまわれる

私の心に主の栄光が

あらわれる。

目次

| 目次 | |
|----------------------|----|
| イエス・キリストーYes! | 8 |
| さかさまの王国 | 11 |
| イエスさまのアプローチ | 15 |
| 馬小屋での誕生 | 15 |
| 彼の家系の危険な過去 | 20 |
| 彼の到着の方法 | 23 |
| 彼の姿 | 25 |
| ナザレからどんな良いものがでるだろうか？ | 27 |
| 彼の雑多な一団 | 31 |

| | |
|-----------------|----|
| イエスキリストの死に方 | 34 |
| 選択のチャンス | 37 |
| 初めの愛し方 | 40 |
| 私のための神さま | 43 |
| 神さまのための私 | 47 |
| 手の届くところに | 58 |
| あなたの自由にまかせて | 61 |
| ドアマットでつまづかないように | 63 |
| 力のピラミッド | 71 |
| 私がこの責任者です | 73 |
| コインのうらおもて | 78 |
| 甘やかさないこと | 82 |
| 説教を見せてください | 85 |

| | |
|----------------------|-----|
| 生涯を通じた教育 | 89 |
| おごることなく卑下することなく | 94 |
| 光の中を | 99 |
| 自分を偽ることの代償 | 101 |
| 幼な子のように | 111 |
| おさがりのもの | 118 |
| しんがりをつとめる | 121 |
| 兄弟同士の争い | 123 |
| 家畜小屋の中で | 130 |
| 宿屋が満室のときは…… | 134 |
| 力による支配でなく | 137 |
| 自分のために手段を選ばなくていいのですか | 142 |
| 勝者の使う方法 | 143 |

| | |
|--------------|-----|
| 先生はね | 147 |
| 富について | 153 |
| 大きな納屋を建てる | 158 |
| ありのままの姿で | 163 |
| 重庄から解放されて生きる | 165 |
| 触れ合いについて | 168 |
| 父のように、子のように | 171 |
| 不思議なキャッチフレーズ | 176 |
| 神さまはどちらの味方？ | 179 |
| 羊のために命を捨てる | 190 |
| ようやくわかった！ | 192 |
| 力の仲介者 | 195 |
| 甘くて苦いもの | 203 |

目 次

| | |
|-------------|-----|
| 足首と足の関係 | 204 |
| 歴史の囚人 | 208 |
| 一致 | 220 |
| スモール・グループ | 223 |
| 本当の自分を伝える | 226 |
| 光の中を歩もう | 227 |
| 交わりがもたらす恵み | 230 |
| 痛みを分かち合う | 234 |
| 聖書の一貫性について | 237 |
| イエスさまといつも共に | 239 |

イエス・キリストーYes!

六〇年代にプロテストのデモをしている人が持っていたいろいろなプラカードに書かれていたもののうちのひとつの言葉が私の心をとらえました。

それにはこう記してありました。

「イエス・キリスト——賛成!

キリスト教——反対!」

私は思いめぐらしました。「なぜ、こんなに長い期間にわたってイエス・キリストの現実は不思議にも魅力的なままで保たれ、一方私たちの彼についての説明や注釈は人々の心をとらえなくなってきたしまったのだろうか。」

私たちは彼のすがたをありのままに理解することがどこかうまくできていないのです。しかし、それは何なのだろう。私たちがまだ未発達、未開発のために、イエスさまの本当の姿が見えていないだけなのでしょうか？ それを解く鍵があるのでしょうか？ その探求をあなたと

分かち合いたいと思います。

すべての歴史、時代をこえて、すべての研究はイエス・キリストの人生についてであったと言えます。(私の偏見は明らかです。)そうです。この本はイエス・キリストの全能性、普遍性、全知性などについてのものではありません。また予定説、神の予知性などについてのものでもありません。

これらの特徴は、組織神学で学ぶことができませんが、私にとっては、それらの取り扱い方によつてはイエスさまが私のとどかないところに置かれてしまったような気がしています。———そういえばヨハネが黙示録一章の中に書いたキリストの視覚的權威のすさまじさを読めばわかります。

圧倒するような權威を伴う、神学的な終わることのないうずまきのような議論ではなく、私は、イエスさまの受肉を語りたいと思っています。私は、稲妻のような彼の方を彼の肉体に押し込み、それをあなたの手で触れさせその感触と暖かさを味わい、まさに神御自身を味わうことができたと思います。

ベツレヘムの馬小屋で聞かれた最初の泣き声とともにマリヤ・ヨセフの愛のケアのもとでしわだらけの血にまみれていた赤ちゃんが誕生した。まさにその時、全宇宙は折り返し点に到

達したのです。

今までは、聞くことのみが許されていた創造主なる神を初めて見たり触れたりできるようなったのです。

神さまがあのままで、人間の身体を用いられ近づくこと、提供すること、傷をうけることが可能な存在として来て下さったのです。

しかし、人類は、目に見えない、距離を感じる神が好きです。私たちは、肉体をもって生きておられる神は苦手です。私たちは、原理、教理やアイデアなどを相手に頭を悩ますほうが、人格を持ったお方が私たちに呼びかけを与え、その応答を求められるより好きなのです。

しかし、神さまは私たちの考えとは異なる方法を選びました。イエスさまは、歴史を二分する重要な時代に、触れることができ、私たちが神さまに触れられるようにして下さいました。記録によればイエスさまはいろいろな所で人々に触れておられます。その時代まで決して触れられなかった人々にまで手を伸ばしておられますが、これは折にかなっているのです。

皮肉なことに、イエスさまに触れられた人々の多くはそのお方が誰なのか理解していません。彼の最も身近にいた仲間たちさえ、それについてはっきりしていませんでした。

さかさまの王国

バプテスマのヨハネ、彼はイエスさまのいところで、その不確実さの一例でした。彼は働きの初期の頃、イエスさまについて「この方こそ！」と言っています、後になって疑いを持ち「あなたですか？」と問いかけています。一体、その間に何があったのでしょうか？ イエスさまが本当はどういう方なのかということに、なぜ彼は混乱を感じたのでしょうか。この答の鍵となるようなことをヨハネ自身が提示しています。ヨハネは、もし聖霊が下り、私のうちに宿らなかつたらイエスさまのことは知ることになつたでしょうと告白しています。言いかえると、イエスさまの容姿には、自動的に人々を驚かせるような救世的姿はなかつたということなのです。（これは画家たちの絵の中のイエスさまと違うので想像しにくいですが）また、イエスさまの行動も伝統的な救世主観から生まれた期待される行動とは違い過ぎたのです。

ヨハネは救い主の前ぶれとして道を備えるよう説教していますが、彼も彼の弟子たちもローマ帝国をくつがえし、王国を建設するのはいつですかと質問をイエスさまにしているのです。

それが伝統的な救い主像と言えるでしょう。

彼らがどれほどイエスさまに期待していようと、イエスさまはそれに同調せず、また人気があるそのメシヤ理解に動かされていません。

そこで質問は「真理と私たちの理解をどのように共存させることができるのか」ということになります。

弟子たちは繰り返し、イエスさまが教えようとされた「神の国」のことで悩まされました。

彼らは地位とか、誰が一番偉いかとか、何とか良い所にすわりたいとかいうことで言い争いました。私は正直なところ弟子たちの人間性をうれしく思っています。

私たちは今日、あまりに自分を複雑なものとして見ているので弟子たちのような鈍感なアプローチをとる自分を考えることができません。その代わりに私たちは、委員会などに出席すると自分のやりたいことをどのように人にやらせようかなどと考え出すのです。しかも、あたかもそれらの人が本当にやりたくなくなるように考えを運ばせ、結局は私のところに最大の評価が集まるような方法で。

または、教会の集会などで陰に隠れながら政治的な力で人を用いるような立場を求め自分の本当の動機が隠されたまま事を起こすようなことを求めたり……。

イエスキスは明確に厳格に弟子たちの（また、私自身の）競争心をあおる討論について答えていらつしやいます。

「そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」（マルコ一〇・四二―四五）

このお方は、仕えられるためではなく、仕えるために来たと言われました。彼はある作家が言っているように「さかさまの王国を支配している」のです。

私たちがイエスキスを学ぶ時、弟子たちがそうであったように、何度も驚かされるに違いありません。

パプテスマのヨハネが「あなたがそのお方ですか？」と尋ねた時、イエスキスは、解放といやしのリストを提示しながらお答えになりました。それらの行為はメシヤに関する伝統的な期

待ほどドラマチックなものではありませんでした。

ヨハネはまだ牢にいて解放されてはいませんでした。ローマは依然として力を持っていました。イエスさまはどこで王なる支配を持っているのだろうか、全くの誤解だったのか？ イエスさまはイエスさまのリアリティ（現実）と私たちの理解の緊張を知っておられこう言われました。

「私につまずかない者は幸いです」（ルカ七・二三）

このお方こそ私が話したいイエスさまです。自らをしもべと呼んで下さるイエスさま。私はなぜか、イエスさまの本質に限りなく近いしもべとしての性質を十分に理解できません。また、表面的におおざっぱにしか取り扱えていないように思います。

ただ私が教えられていることが、それらの気づきが私には書きあらわせないほどの力を生活の中にもたらすであろうということです。そこにみなさんをお招きできたらと願っています。それらの特質を次の章から見ていきましょう。

イエスさまのアプローチ

こんな推測をしてみてください。もしあなたが神さまだとして、あなた自身を完全にこの世界に啓示することを望んでいるとします。そして、地上の人間たちとあなたとの間には、はっきり知れない差異があります。そのような中で、一体何が最初の行為でしょうか？

神さまが実際にとった行動は皮肉なくらいあなたの考えていた行動と違っているはずです。イエスさまがこの世界に來られた時に起こった逆説的な内容を見ていきましょう。

馬小屋での誕生

王さまが生まれる場所としては何と他愛ない場所でしょうか。妊娠九カ月目の女性が困難な

旅を続け、馬小屋だけが彼女の優しい夫の捜し出した落ち着き場。クリスマス近くになるとにぎやかに飾りつけがなされるその風景は決して正確なものではありません。どれもニオイがまぎや違います。家畜の忘れ物を避けながら歩くその家畜小屋とそういう状況に生まれたばかりの赤ちゃんの非衛生的状況を私たちは充分理解することはできません。そういう場所に生まれたばかりの赤ちゃんを寝かせること、出産の痛み、家畜のツバのまざった餌い葉桶など。

妻の出産をこんな状態で見守らなければならなかったヨセフの困惑についても私たちは充分理解することができません。

神の御子のもっと良い状況を受け取る資格があったはずです。

私の四人の子供たちはそれぞれ、とても衛生的な状況の中で生まれました。あまりに衛生的すぎて夫である私は歓迎されなかつたほどです。看護婦さんが私が見ると大急ぎで生まれたばかりの赤ちゃんを母親の部屋から移してしまうというのは父親としてはショックな出来事です。

もし、神さまが私に相談して下さったら、私は少し宣伝などの経験がありますので、私は、きつと数十階建ての豪華でモダンな病院を建てることをアドバイスし、外には大きなダイヤモンドを配し、太陽の光にまぶしく輝くそのキラメキがその地域全体に行き渡るような設定を考

えたに違いありません。

御子はもちろん、すべて特別扱いです。そうしたなら神の御子の誕生の場所として、世界中から大勢の訪問者がやってきて、息をこらして見つめられるような場所となったことでしょう。

しかし、神さまは、私と相談はなさいませんでした。そして、私の計画のかわりに馬小屋で御子を誕生させました。そこは、誰の心も踊らせるような場所ではありませんし、それによって劣等感を味わう人もいないでしょう。ほとんどの人が自らの少しはましな状況を話すことができるでしょう。でも、もしかしたら、彼が生まれた町のことには少しはほめることができるかもしれません。どうでしょう。

地域の選択についてはどうでしょう。有名な町であるなら、人々はそこで生まれた彼のことを覚え、少しは彼のイメージが良くなるかもしれません。

しかし、ベツレヘムという町はどうでしょう。そこはホテルやモーターも不十分ですし、王さまの誕生を記念するためのコンベンション・センターもありません。

ベツレヘムは神の御子の誕生には、およそふさわしくない小さすぎる町です。しかしイエスさまは、そこに生まれたのです。この誕生地のことで威圧感を味わう人はいません。

でも王族は王族としての複雑な親戚関係とかあったのでしょうか？

両親についてはどうだったのでしょうか。私たちは処女降誕を信じています。この教理は熟考されほとんどのキリスト教界の人々によって領かれています。しかし、イエスさまがお生まれになった当時は処女降誕ということの人々は知らなかったのです。イエスさまが成長するなかで「私生児」と噂され、正常な結婚生活以外の状況の中で妊娠したという焼き印を押されていたのです。

もし、有名な教会のリーダー的な優れた若い女性が急に妊娠してあらわれたらどうなるでしょう。

彼女の生活の中にそれとおぼしき噂もないし、それらしい行状もないとしたら。みんなショックを受けるでしょう。ためらいと困惑を覚えながらリーダーは、やっとの思いでおなかの子供の父親は誰なのか尋ねるでしょう。そして彼女が「聖霊です」と答えたら教会の人々は彼女を笑い、馬鹿にすることでしょう。

イエスさまの友人や近所の人たちがイエスさまになぜヨセフが父親ではないのかを尋ねなかったと思いますか？ 友だちが「聖霊が父だ」ということに対して笑ったり馬鹿にしなかったと思いますか？ パリサイ派の人たちがこの件について全く取り上げなかったと思いますか？ 聖書の書かれた当時の社会では私生児とその子孫は一〇世代にわたって主の集会には参加で

きませんでした。

私生児は両親からの世話を要求できなかつたし、正式な子供のよな訓練や規律も与えられませんでした。

もちろん、私たちは、イエスキリスマスはそうではないことは知っていますが、世の人々は別な見方でイエスキリスマを見たのです。神であると認められたいなら、そういう記録や状況を私たちは求めません。そういうことを引き合いに出して反対者はバケツいっぱい泥を親に向かって投げつけてくるのです。噂のヒソヒソキャンペーンの影響は絶大です。

しかし、世の中の様々なのしりや侮辱を受けてきた多くの人々が今こそ、彼らをおびやかさず、彼らを贖うお方を発見できることになったのです。この辛辣な世界に対して何と自らを全くさらしていることでしょうか。

処女から生まれました。これで不足しているなら彼の先祖はさらに問題の火種を提供しています。

彼の家系の危険な過去

家系は、私にとっては楽しいものではありません。そして聞くところによると、聖書を読み始めた人の多くが、誰に誰が生まれたかというところで疲れてしまっているようです。

しかし、キリストの先祖についての記録は単に名前の羅列だけではありません。私たちが自分の家系を調べてみると馬泥棒が二人くらいいたりすることがありますが、もし「神が私たちと共にいます」と言われるイエスキリストの家系の中にそういう人がいたら困惑することになるでしょう。

純粋なユダヤの血縁がモアブ人ルツとカナン人ラハブによって切られています。さらに驚いたことにラハブは娼婦です。ヤコブはその名のおり、巧みに人をだます人でした。ユダは女たらしでした。

ダビデは、キリストがその王座に座されることになるのですが、姦淫を犯し、殺人を犯し、その血にまみれた手がまさに神殿を汚したのです。バテシバとの関係から、夫のウリヤを彼は

殺したのですが、ソロモンが生まれました。ソロモンは、その知恵にもかかわらず、何百人もの妻や妾を持ち、彼の心は神さまから離れていきました。

私たちは有名な血族のつながりを誇りに思うことがあるかもしれませんが、このイエスさまの驚くべき先祖たちは、私たちを決して脅かすことはありません。懷疑論者たちでさえイエスさまのことを超優良家族の最終的な産物だなどと言うことはできないのです。

イエスさまはまためずらしい名前をつけてメシヤであることを主張するようなことはなさいませんでした。

イエスという名はそんなにありきたりな名前ではなかったし、みっともない名前ではなかったはずだと言う方がおられるかもしれませんが、名前について結論を出す前にその背景を知る必要があります。

まず、彼の名前は実際にはイエスではなくヨシユアでした。これは良い名前、「エホバは救い」という意味です。しかし、この名前はよくある名前、王様へのみふさわしいというようなものではありませんでした。ヨシユアという名前がギリシャ語でイエスと呼ばれたのです。私たちはこの名前をあまり疑うことなく使っています。こういうことはよくあることで、たとえばジェイムスという名前はスペイン語ではイアゴまたはジェイミと呼ばれます。

ヨシユアという普通の名前が他の人々から目立つことがないので彼の性質を表すヒントとしてインマヌエル―神は私たちと共にいますと呼ばれたのです。

イエスさまは御自身を一般の人々と同じところに立たせることを選ばれました。決して彼らからかけ離れたところではありませんでした。

私たちが彼にふさわしい名前を提案するとしたらどんな名前がこの王さまにふさわしいと思いますか？ なめらかに読める音を持ち、魅力的でネオンにした時、見栄え良くて、ユニークでハリウッドのステージで通用するような名前でしょうか？ しかし、ヨシユアという名前がつけられました。こんな名前の人と同じ地区に三人はいたと思います。何でまた、こういう芳しくない誕生をわざわざ告知する必要があったのでしょうか？

その告知もどちらかと言えば弱々しいものだったと考えられます。でもあなたは抗議をしないで言うでしょう。「ちょっと待ってください。私が生まれた時には天使は歌ってくれませんでしたよ。それなのになぜ弱々しい告知だなどと言うのですか？」まあ、見てみましょう。

彼の到着の方法

まず最初に、神さまが私と相談してくださいました。私は、もっと威厳を持って告知すべきだったということを提案したと思います。そして、大きなマイクを持って月の上に立ち、そこに二〇〇億ワットくらいのスピーカーをつるして、放送するのです。「こんにちはー。世界のみなさん。こちらは神です。」

または、神さまが聖歌隊を用いるのならまず、宗教議会に行き、エネルギーを上手に使って、次に市場に行き、そこでより短時間により大きな人数に連絡できたはずなのです。しかし、神さまは告知の場所については荒れ果てた野原の一箇所を選びました。もしあなたが誕生の告知を任された天使の聖歌隊のひとりだったらどう思いますか？ 二〇〇年間も練習をし、栄光に輝く告知の晴れ舞台を待っている。すべてが完全なハーモニーであり、まさに時代を越えたコンサートがはじまろうとしている。一〇〇年間にわたってこの偉大な日のために天で舞台の組み立てがなされてきた。そしてガブリエルが言います。「彼は生まれました。あなた方の出番だ。」

舞台のカーテンが上り、聴衆を見るとそこに六人の羊飼いがいる。何という幻滅。「何ということだ。」誰かが言います。「ポスターの責任者は誰だったっけ。」しかも、羊飼いたちは伝達のセンター的な役割を果たしていたというわけではありませんでした。彼らが伝達できた相手は羊たちに対してでした。また、羊飼いたちはこういう重要なニュースを持ち運ぶのに最高の人材というわけではありませんでした。

イエスさまの時代において羊飼いたちはダビデ王の時代に持っていたような人々からの尊敬をなくしていました。

羊飼いはどちらかといえば、疑問視される評価しか与えられていませんでした。他の人のものを失敬するような傾向があったようです。彼らは町の人からも歓迎されませんでした。人々は彼らの言葉もあまり信用しませんでした。

ベツレヘムの家々でなされた会話が聞こえてくるようです。羊飼いたちは馬小屋を尋ね、喜びながら帰る途中、家々の戸を叩きながら叫びます。「ヨシユアが生まれた。」「ヨシユアが生まれました。」「ああ、何ということだ、また近所にヨシユアが生まれたのか、でもいいもんだね。

ところで誰が言ってるのかな。」「この近くでうろついている親切な強盗じゃないの。」「何だっ
て?。」

私たちがこういう泥くさい誕生の告知を読む時、どんなに人がこのしもべなるイエスさまの存在によって高められているか驚かされます。しかし、私たちが彼の顔を見るまで待っていて下さい。その時には文字通り驚かされるでしょう。

彼の姿

イエスさまはハンサムではありませんでした。これは受け入れにくいことかもしれませんが、「ちょっと待ってください、いくら何でもヒドすぎます。私はイエスさまの顔が私の部屋の壁にかけてありますが、みにくいという事はないですよ。スツキリした本当にいい顔をしていますけど……」あなたはきつとおっしゃるでしょう。でもイザヤという人はイエスさまがどういう姿をしているのか書き出しています。(イザヤ五三・二)

イエスさまは普通の顔をしていたので、群衆の中にまぎれてしまうことがありました。ユダは口づけをもってどの人がそうなのか示さなければなりませんでした。その時すでに三年間も

公に姿を表わしていたにもかかわらずです。もしかしたら裏切り者の方が裏切られる方より、よい顔をしていたかも知れません。

ここにイエスさまが人に近づかれた時のヒントがあります。私は、とびぬけてハンサムな人がある所で自分がどんな感じを持つかよく知っています。

しかし、イエスさまは誰を脅かすこともないような姿で来られたのです。彼のまわりに来ると人々は安心したのです。彼は遣わされた貧しい人々、一般の人々と全く違うところがありませんでした。しかし、もし彼の顔が同じようなら、せめて彼の家は少しは違ったのでしょうか？ その点を見ていきましよう。

もし、メシヤがあなたの家庭に生まれたらあなたは何をするか考えたことがありますか？ 彼こそ歴史の中で最も輝かしい宝石です。このお方をどうなさいますか？ どんな家を買いますか？ どのような町を選びますか。そして、近所の雰囲気はどんなところを選びどんな人を彼の友人にしますか。

ある事柄はあまりにも価値がありすぎて、それをどう取り扱えばよいのかわからなくなることもあります。私たちは大きなダイヤモンドをポケットにつっこんだりネックレスにして町を歩き回ったりしませんよね。

ナザレからどんな良いものがでるだろうか？

ナザレからどんな良いものがでるだろうか？

ヨセフとマリヤは神の御子を自分たちの一員として迎えました。彼らはどう生きたのでしょうか。彼らはナザレにイエスさまを連れていきました。(エジプトに逃れて後のことです)

しかしナザレは神の御子が起こされる場所ではありませんでした。ナザレの道徳的、宗教的評判はとても悪くて、ナタナエルがイエスさまに会った時の答が「ナザレから何の良いものがでるだろう」(ヨハネ一・四七)というものでした。

ですから、イエスさまは、常に社会の最も小さい者と評価されている人たちの間を歩み、自らをそこに置いていらっしやいました。しかし、イエスさまのお父さまは何千もの丘に家畜を飼っておられる方です。

では、イエスさまがその財産を用いはじめたとき、何が起こるのか見てみましょう。

西洋の社会では、財産の有る無しは大きな問題で、ややもするとそれが人間を測る上での尺

度にさえなります。一度、旅行でハリウッドのビバリーヒルズに足を運んだことがあるのですが、そこで見かけた大邸宅、高級車、ガードマンの物々しい警戒には、実に圧倒される思いでした。その家の人がひとかどの人物であることは見て明らかです。しかし、イエスさまは、必要なもの以外は決して持とうとはしませんでした。ですから、誰もイエスさまの持ち物を見て、感心したり、自分とくらべて引け目を感じることもなかったのです。

聖書には、イエスさまが自分のことを語る場面があります。「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する所もありません。」(マタイ八・二〇)

それにしても、先立つものは富というこの世の中で寝るところさえない、イエスさまはどうやって神さまのことを知らせようとしたのでしょうか？ 彼の金持ちに対するものの見方は、私たちの見方とは違います。山上の説教でのイエスさまの言葉は、ずばり核心を突いています。

「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」(マタイ六・一九―二二)

イエスさまはお金に振り回されることはありませんでした。金銭に対する関心が無かったの

ナザレからどんな良いものがでるだろうか？

です。財産を築くだけの力が無かったということではありません。なにしろ、税金を払うのに、魚の口から銅貨を調達し、石をパンに変えてしまうことさえできないわけではありませんでした。しかし敢えて富には背を向けたわけです。人間は富には無関心でいられません。ときには、人とのつきあいにも微妙な影響を及ぼします。私の経験を申しますと、相手がお金持ちと知るとどうも態度がぎこちなくなってしまうようです。そして必要以上に愛想よくしてしまうのです。(考えてみれば、別にお金を借りようとしているわけでもないのに！)

イエスさまはこの世の財産には固執しないと決めていたので、人の心の内に潜む、嫉妬心とは無縁でいられたのです。嫉妬心は自分よりお金持ちの人、あるいはそうでない人との会話に影響を与えずにはいられません。そういう思いのないイエスさまは人々が本当に求めていることを心に留めることができたわけです。その行動のひとつひとつが愛の気持ちに裏打ちされていました。

パウロはコリント人への手紙に、こう書いています。

「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」(IIコリント八・九)

イエスさまはお金持ちの人と同じ土俵に立つことを嫌いました。自分自身を人々に惜しみな

く与え、見返りは一切求めなかつたのです。彼は物を贖うために来たのではなく、人々を贖うために来たのです。そしてそのために命さえも捨てたのです。

また、イエスさまは、とても不思議な人を先に遣わしました。もし私が牧師の職務の一環として一連のクルセードを組織して、道を備えるということで、誰かを派遣するとしたらどんな人を選ぶでしょう？ おそらく、ハンサムで服装のセンスも良く、話が上手でそれでいて私に對しては、腰の低い人に白羽の矢を立てると思います。しかし、イエスさまは、そんなことはしませんでした。およそ聖職者にふさわしくない服装をし、いなごを捕らえて食べてしまうような荒くれた者を選んだのです。そのうえ、彼は礼拝の最後に何とも野暮なことをしていました。神さまに従おうと決心した人たちを川の水に浸していたのです。

「バプテスマのヨハネが荒野に現われて、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマを説いた。……ヨハネは、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごを野蜜を食べていた。」

(マルコ一・四一六)

「それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。『まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。』」(ルカ三・七)

人は、どれくらい自分のことを言い訳せずにいられるのでしょうか？ 私が、イエスさまの

立場でしたら、ヨハネのことをいろいろと弁明していたと思います。「見かけはああですが、実はこれには深い訳がありまして……」といった具合に。私が思い描くクリスチャンとはまるで逆の人をイエスさまは選びました。実は、これは、イエスさまの生き方を象徴する出来事なのです。彼は常に私とは違った視点で人々を見ています。イエスさまが、節目、節目でどのような行動を取ったのかを見ると、人々をどのようなまなざしで見ていたのかがわかります。

彼の雑多な一団

合衆国新大統領誕生のとき、誰もが注目することといえば誰が大統領と一緒に仕事をするようになるのか、つまり彼が誰を閣僚に任命するかということです。イエスさまも世に現われて、神さまの支配を明らかにするにあたって、この世の旅路を共にする弟子たちを選びました。

私でしたらさしずめ、こう言ったと思います。「有名なセミナーに行つて、神学や教会の間

題に詳しい大学教授を、そうですな……少なくとも三人選んでください。それから、ハリウッドに行つて、聴いている人の注意を引きつけ、説得力のある話ができる、カリスマ性のある人を捕らえて来てください。それが済んだらニューヨークに飛んでウォールストリートで羽振りのいい投資家を二―三人口説き落としてくれませんか。そういう人は何かと役にたちますよ。それから最後にジムに行つて、六人ほどボディガードになりそういう人を選んでください。今、言ったことをちゃんとしてくれないと、うちの教会のリーダーは、あなたのことを十字架につけるかもしれませんよ。」しかし、イエスさまは、こんな言葉に耳をかしませんでした。かむりに町を歩き、波止場に足を運び、伝道者としては常識破りの人たちを選んだのです。イエスさまが選んだ人たちの半徑五メートル以内に近づくと、魚の臭いが漂ってきたはずで

彼はけんかつ早い愛国主義者や取税人をチームに加えました。(これは黒人革命を唱える人とクークラクスクリンのメンバーを鉢合わせにしてしまうようなものです)。話がうまいというのは、伝道者に求められることですが、彼らの中には、少し話ただけでどこ出身かわかつてしまふほど強いなまりを持った者もいました。イエスさまは常に人々から蔑まれがちな人たちの中に身を置いていたのです。暴力的な者からずる賢い者、神さまのことなどまるで関心のない者に至るまで。私でしたら、ものの一―二週間でペテロをクビにしていたと思います。ペテロは

失言癖に悩まされていました。一時の感情にかられてつい暴言を吐いてしまったため、せつかくの才能も半分ほどしか發揮できなかったのです。

しかし、イエスさまは彼を自分のうちに留め、彼に人前に立つ機会を与えます。イエスさまが私とはまるでちがった方法で人々を見て、根気強くその人の才能を引き出したからこそ、ペテロは、ついに行ったわけです。

弟子たちの行動に注意して聖書を読むと励まされる思いになることがあります。あの弟子たちと行動を共にされたのですから、私とも、共にいてくださるはずですよ。誰とでも共にいてくださるのです。イエスさまは、私たちと同じ尺度で人を見ることはありません。弱い人、重荷を負った者向けに求人広告を出しているようなものです。できのいい者をかわけり、そうでない者は首を切っていくやり方とは、およそちがいます。そしてイエスさまは今でも社会からつまはじきにされた人たちに呼びかけています。

「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし、神は知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選ばれたのです」(1コリント一・二六、二七、二八)。

イエスさまの人を測る方法、そしてその人に対する愛は、私の価値基準からすれば、不可解

なものです。しかし人々は、そのイエスさまを心から受け入れたのです。

このように、どの行動をとっても、神さまという言葉が連想させる権威とはまるで無縁のイエスさまですが、死ぬときくらいは違ったのではないのでしょうか。いや、違います。その死は、私たちが、イエスさまについて抱いている幻想を完全に打ち砕くものです。何が起こったのか見てみましょう。

イエスさまの死の方

イエスさまが、実にひどい死に方をしたのは、よく知られています。しかし、イエスさまがどんな思いで死んでいったのか、その屈辱がどれほどのものであったのか、本当にわかっているでしょうか？ 次の聖書のことばは、理解に苦しむところです。

「十字架のことばは滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です」(Ⅰコリント一・一八)

十字架が愚かだなんてとんでもない！ 至るところで目にするではないですか。教会の塔に飾られた十字架は気品を感じさせます。よく磨かれた銀の十字架、艶のある木の十字架が、教会の内装には使われています。いい値段のするネックレスも十字架のデザインのものがかかりあります。また、スーツのラベルの部分につけると粋なものです。名の知れた教会のオリジナル文具には、十字架のマークがつきものと言っているかもしれません。

十字架をテーマにした多くの歌があり、信仰告白にも出てきます。教会によっては、告解や伝道集会のたびごとにかなり大きくて重い十字架を持ち運ぶところもあるようです。至るところに十字架があふれています。一体、どこが愚かなのでしょうか？

こんなことを考えてしまうその時、私は本当に十字架を理解していないことに気づきました。まず、第一に今の時代、人々は十字架にかけられて死ぬなどということはありません。もしイエスさまが来たのが今の時代でしたら苦しみながら死んで行く残酷な刑は執行されなかったでしょう。電気イス、絞首刑、ガス室、銃殺、薬物注射といった処刑になっていたと思われま

す。しかし、イエスさまがこんな方法で殺されていたらどんなことになるか、考えてみてください。街行く人を引き止めて、こう証しすることになります。「私の最愛の友が今あなたのため

に電気椅子で死にました。このことを信じるなら、自分自身の電気椅子を負って彼について行

きなさい。そうすればあなたは救われます」

賛美歌もこんな具合に歌詞が変わります。「電気椅子で電気椅子で初めて光を見た」「ガス室にはあなたのための場所がある」「あなたの銃殺隊をつれて、私について来なさい」

こんな歌をうたっていけば、世間の人の失笑を買うことでしょう。そしていくら魅られたと言っても、私たちの「希望の星」がそんなにみつともない死に方をしたとあつては、恥ずかしい思いをするかもしれません。

十字架の死とは全く違ったイメージがあります。

試しに聖書をこんなふう言い換えてみましょう。どう響くでしょうか？「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは電気椅子にかけられた王を宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが」（『コリント一・二二一—二二二』失礼）

「なぜなら私はあなたがたの間で、イエス・キリストすなわち電気椅子で殺された方のほかは、何も知らないことに決心したからです」（『コリント二・二一』失礼）

もし自分を重ね合わせるとすれば、ありきたりの刑でこの世を去った囚人よりは、無実の罪を着せられ、誰かの身代わりに死んだ人、私たちの記憶に深く刻み込まれた人を選ぶと思いま

す。

イエスさまの受けた苦杯は、単なる死以上のものでした。屈辱に満ちた品位を汚すような刑罰、彼は、被造物全ての罪、汚れ、悪を自分の肩に担い刑を受けたのです。

イエスさまの死が持つ意味をもう一度振り返ってみましょう。

選択のチャンス

イエスさまの生い立ちについて話してくださいと言われたら、どんなことを話すでしょうか。あまり社会的地位の高くない両親のもとに馬小屋で生まれたこと。祖先には、かなり問題を起こした人もいること。イエスという当時としては、ありきたりの名前を付けられたこと。人々に何かと誤解されたこと。柄の悪い隣人の中で育ち、財産らしきものは一切持たずに、決して魅力的とは言えない人たちと行動を共にしたこと。屈辱的な死を余儀なくされたこと。こんなところでしょうか。

それにしても「世に勝った」というみことばにはおよそふさわしくない生き方に思われます。イエスさまが誰かと接するとき、威圧感を与えたり、その人の心を弄んだりするようなことはありませんでした。人生の様々な局面で人々を導いていく姿、それは見た目には弱々しく映りました。彼はこの世では何も持たず、全て神と聖霊のもとに宝を蓄えていたのです。嘘、偽りのない態度で近づかれたイエスさまは、私たちにも自分の気持ちに正直であることを求めています。彼は私たちに無理強いして、まだ本当の信仰が心の中に育っていないのに自分について来させるようなことは決してしませんでした。これに本当の愛がなければできないことです。自分のことよりも相手を第一に考え、人々のしもべであったイエスさまは、まわりの人にも纏うことなく、自分の気持ちにできる限り正直であるように願ったのです。彼は人々が自分自身で決断を下すことを望みました。

一九五六年の感謝祭の日、私が震えていたのはテネシー州メンフィスの身を切るような寒さのせいではなく（もちろんそれもありますが）、不安と興奮のせいでした。そのとき私は片手に指輪を握りしめ、アダ・ファンユ・ブラウンに私の妻になってほしいと言ったのです。幸いなことに彼女は首を縦に振ってくれました。

考えてみれば、別のプロポーズの仕方もあったわけですが。片手に指輪、もう一方の手にピス

トルを持ち、「俺と結婚しろ、お前のことを思っているんだぞ」と言う手もあったかもしれません。しかし、そんなことをしていたら、彼女が用意してくれた食事は、その都度、犬に毒味してもらわなければ口に運べないというはめになっていたでしょう。愛は、本心からの解答だけを求めるものです。私たちは、生きていく上で、打算ぬきの決断を下すことなどそうそうあることはありません。たいてい、まわりから圧力を受け、ある程度相手の要求を飲んで決断するわけです。しかし、人生でいちばん大切な選択、つまり、神さまを心の中に受け入れるかどうかという選択については、イエスさまはただ私たちが自分の気持ちに正直に決断を下すことを望んでおられます。イエスさまが決して私たちの気持ちを混乱させないような近づき方をしているのはそのためです。私たちは受け入れることを拒むこともできます。神さまは、私たちの人間性を無視して、選択の余地をなくすようなことは決してしません。愛とはこういうことです。

初めの愛し方

聖書を主観を交えずに分析し、様々な角度からできごと、登場人物に優先順位をつけるとすれば、イエスさまが中心となるのは間違いないかもしれません。彼自身、自分のことをこう言います。

「私が道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければだれひとり父のみもとに来ることはありません。あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていただはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」（ヨハネ一四・六―七）

聖霊に促され、パウロはイエスさまのことは見ることができました。彼がコロサイ人へ宛てた手紙を見てみましょう。

「御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあつて造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、

御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあつて成り立っています。また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」(コロサイ一・一五―二〇)

イエスさまは神の身であるにもかかわらず、人の姿をとって現われてくださいました。イエスさまこそ、すべての知識・知恵の源です。ですから、私たちは、無理なく、次のように言えるわけです。

神さまを知ることができるのは、自分でなくイエスさまの力があるからです。身につけた知識はイエスさまに帰せられるものです。身についた知恵は、イエスさまが授けてくださったものです。神さまがこの身の内に宿るなら、それはイエスさまが私のうちに住まれるからです。神さまのことを学ぼうとするなら、イエスさまのことを学ばなければなりません。毎日の暮らしの中で聖霊が働いています。その風に身を委ね、イエスさまの愛に触れるのが喜びです。

私たちは、心を尽くしてイエスさまの人格、生き方、教えを自分のものにする必要があります。全てにおいて彼は優れたお方です。けれども実を言うと、こう言う私自身、この世でイエスさま以外のことに気をとられているのです。世のしがらみの中でいつの間にか安定指向になつてしまつています。財産、昇進、名声といったことに思いは向けられています。おそらく、こういったものを追い求めているのは、私がイエスさまの本当の姿を正確に見ていないのが原因です。靈的な近視眼のせいで、私の視界が歪んでしまつてゐるわけです。

神さまの名のもとにすることでそれが効き目があつたり、成功したり（文化的な意味での成功です）するのは、（たびたび、断言してしまふのですが）私がイエスさまと同じやり方で行ない、彼もそれを祝福してくれるからなのです。ですから私は、この世でうまく機能しているものに関して、たいへい、批判を加えることなく、神さまが義認されたものとして受け入れることにしています。それらがイエスさまの御名のもとに、つまり彼のからだなる教会の枠組みの中でなされていることだからです。

しかし、自分の至らない点を自覚すれば、イエスさまのことを理解し、従いつつ生きることになるのかというと必ずしもそうではないわけです。いったいどうすれば視界の歪みが矯正されるのでしょうか？　そもそも、本当にイエスさまのありのままの姿を私も生きる必要がある

のでしょうか？ この疑問を解く手がかりとして、イエスさまが弟子たちに与える強調した戒めがどのようなものであったのか、見てみましょう。ここで弟子たちは、自分流の解釈を加えず、文字通りそれに従うことが求められています。

私のための神さま

イエスさまは弟子たちに、また自分に従う者全てに多くの戒めを与えました。しかし、彼が私たちに残したあの戒めに比べれば、残りは全て単なる小見出しのようなものです。

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのようにあなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」(ヨハネ二一・三四―三五)

ここでは、二つのことについて、お話ししたいと思います。まず最初に、イエスさまが本当

の意味で自分の弟子となる条件として、ただひとつ、互いに愛し合うということを挙げている点。

彼が求めたのは私の聖書に対する知識でもなければ、きちんとした身だしなみや健康な体でもありません。日曜日は欠かさず礼拝を守るということでもなく、教会の正会員であることでもありません。

髪が長かろうと、短かろうとアクセサリをジャラジャラさせていようとなかろうとそんなことは気にしていません。また、いわゆる正統派と呼ばれる教会に籍を置いていることでもない。ただ、人をひとりの人間として愛すること、これさえあれば、キリストの弟子だと言うのです。

しかし、どうも腑に落ちません。これでは、まるで弟子になる条件は、人を愛すること、それだけで、その他のもの、例えば、聖書について学んだり、清い生活を送ったり、身なりをきちんとすることはどうでもいいと言っているように聞こえます。イエスキリストはここで、聖霊の促しやそれを祈り求めることについても触れていません。悔い改め、救い、罪の清め、洗礼、聖潔、一〇分の一税。これらのことはどうでもいいのでしょうか？ こういったことは、キリストに従う者のしるしにならないのでしょうか？ そういうもので確認した方がずっと楽なはず

ずなのに、私ならそう考えます。しかし、イエスさまはそれで即、その人を信用することはしていないわけです。

愛。これは、イエスさまが、私たちが苦勞しないで神さまを知ることができるよう用意した入門用の福音なのでしょう。とんでもない！ 私は、イエス・キリストが共にいて下さり、その力がなければどうしようもなく利己的で人を愛せない人間です。（たまに気の向いたときには、少しはまともなこともするのですが）

次に私が注目したのは、「私があなたがたを愛したように」互いに愛し合いなさいという戒めです。このみことばは、以前から引っかけかかっていました。これは、私たちは皆、彼のように十字架につけられなければならない、さもないと彼が愛したようには人を愛せないと語っているのでしょうか？ もしそうだとしたら、正直なところ、御免こうむりたいところです。いったい何を考えているのでしょうか？ もし、全てのクリスチャンが自らすすんで十字架につけられてしまったら、一体誰が福音を拡めるのでしょうか。教会の礼拝のかたちも今までのものは違った、おかしなものになってしまいかもしれません。

しかし、ここで少し別の角度から考えてみましょう。イエスさまがこの注目すべき戒めを弟子に語っていたとき、彼はまだ十字架につけられていません。にもかかわらず、弟子は彼が何

を言おうとしているのか、わかっていたようです。あのペテロでさえ、「愛ってどういうことですか？」などと尋ねませんでした。ここに来るまでのイエスさまの行動を見て、どこかで弟子たちは彼の説く愛がどういうものなのか理解し、同時に愛の行ないとはどういうものかも理解していたと考えられます。私たちの社会では、相手に愛している気持ちを伝えたいと思えば、ただ単に「あなたが好きです」と言うだけです。

聖書には、イエスさまが私たちと同じように、こういう方法で気持ちを伝えたいという記述はありません。もちろん、その可能性を否定するわけではないのですが、果たして弟子たちを一列に並べ、こんなふうにしたのでしょうか？「ペテロ、あなたを愛しているよ。ヤコブ、あなたを愛しているよ。あなたも愛しているよ、ユダ……えー」

イエスさまは弟子たちのしもべとなることで、彼らへの愛を身をもって示しました。こんなにも自分を捨てて人を愛した人は誰もいませんでした。この戒めとイエスさまの示した模範は、極めて大切な意味を持っています。そのことがはつきり理解できたとき、この愛こそが、新約聖書を織りなす一本の糸であることに気づくと思います。

神さまのための私

愛という言葉ほど新約聖書の中で強調されているものではありません。イエスキリスト自身、その大切さを何度も説いています。

「そして、彼らのうちのひとりの律法の専門家が、イエスをためそうとして、尋ねた。『先生、律法の中でたいせつな戒めはどれですか。』そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者たちが、この二つの戒めにかかっているのです。』（マタイイ・二・三五―四〇）

言い換えれば「聖書はこれに尽きる」ということです。信じられないことです。これほどまで神さまを愛し、隣人を愛することに重点がおかれているとは！ 私はショックを受けました。なぜなら、そのような声明は宗派の教義信条にも載っていないければ、どんな神学者も語ってい

ない。使徒信条にもない。そして、何よりも残念なことに私たちの日常の生活に欠けているので、それから。それでもなお、イエスさまはしもべとして私たちに仕え私たちを愛して下さるのでしょうか？　そもそも何をすれば、愛したことになるのでしょうか？

使徒パウロがⅠコリント一三章で愛について触れたくだりは有名です。ここで彼は、異言や雄弁、預言や知識、信仰や慈善は全て愛がなければ何の値打ちもないと私たちに教えています。全く痛いところをついています。

巡回伝道に白羽の矢を立てられるのは、雄弁で人を感動させるような話のできる人、ときには異言を話してその場を盛り上げることのできる人と相場が決まっています。しかしパウロはこのような「ダイナミックな」話し手も彼らに愛がなければ、その働きに意味はないと言っているのです。神学校では、定期的に預言する力のある学生を伝道に遣わします。彼らの中には、神さまのときを克明に語り、耳新しい言葉を説き明かしてくれる人もいます。みことばに対し、渴きを覚えているとき、私たちは往々にして、熱狂的に彼らを歓迎することがあります。が、ここでもやはりパウロは愛がなければ、それは空しいと言っています。

私は大学で教えています。知識がものを言う世界です。知識は成績をつけたり、最終的な学位を授与する際に目安となる唯一絶対の基準と言っていていいでしょう。私のいる大学に限らず、

どこの研究室でも学位を受けるほどの知識を身につけた学生は一目置かれ、他の学生のお手本とされます。しかし、パウロは、愛を土台にして積み上げた知識でなければ意味が無いと言っているのです。

クリスチャンの集会では、信仰という言葉が、連呼され、信仰をテーマにしたセミナーが頻繁に催されています。仮に信仰治療に携わる人がやってきて、パイク山をコロラド州からネブラスカ州に移すと言い、実際やってのけたとしたらどうなるでしょうか？ テレビ・ラジオのリポーターや新聞記者は、こぞって詰めかけるでしょう。講演の依頼が殺到し、收容人員最大のホールも満杯となることと思います。実際、「信仰があればこういふことができる」と言うって常識では考えられないことを目の前で行なえば、人々は引きつけられるものです。しかし、愛による行ないでなければ、それは不信仰に等しいとパウロは言います。

博愛主義を説き、自ら実践する人は、世間では尊敬のまなざしで見られます。寛容で敢えて肩書きを捨てて、虐げられた人と行動をとるようになる人は、なおさらのことです。しかし、ここでも、それが愛に裏打ちされた行ないでなければ、意味がなくなってしまうのです。実際、生活面で便宜を図ってもらうことをあてにしたり、税制上の優遇処置を施してもらうことを狙った慈善活動もこの世にはあるわけです。

雄弁、信仰、知識、慈善。こういったものは全て私たちから見れば、素晴らしいものです。そして、人の役にも立っています。しかし、これらの要素を全て越えたところにあるのが愛です。立派な行ないも公共の益となる事業も愛によって動機づけられたものでなければ、死をもたらしものしかありません。しかし、そもそも愛とは何でしょうか？ どういった行ないが愛の行ないなのでしょう？パウロは実に生き生きとした口誦でその答を与えてくれています。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません」

しもべとして人に仕える思いがあればパウロが挙げたことを実行に移すのは何も難しいことではありません。ヨハネ第一の手紙では更に一步踏み込んで、愛について何が要求されるのか語られています。

「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者にどうして神の

愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」(1ヨハネ三・一六・一八)

神さまといい関係を築くのも、この世で何かことを成すのもお互いに愛し合うということの延長線上にある。これは私にとって実に大きな発見でした。では、お互いに愛し合うには、私たちは具体的にどのような相手と接したらよいのでしょうか？

新約聖書には、豊富な実例が示されています。

尊敬をもって互いに人を自分より勝っていると思いなさい。

互いに思いをひとつにしなさい。

平和に役立つことと互いの霊的成長に役立つことを追い求めましょう。

互いに受け入れなさい。

互いに戒めなさい。

聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。

互いに仕えなさい。互いに忍び合いなさい。

互いに赦し合いなさい。互いに従いなさい。

互いに偽りを言っではいけません。互いになぐさめ合いなさい。互いの徳を高めなさい。

互いのために祈りなさい。

互いに愛し合いなさい。

前にも述べた通り、しもべとして仕える思いがあれば、自然とこれらの戒めは実行されるのです。何年前か前、イースターの早天礼拝で、聖書は何を信じればいいのかについては、実によく語っているけれども、人々とどうつき合っていたらいいのかについてはほとんど触れていないと言った人がいました。これは、事実誤認もいいところですよ！ 今こそ私たちは聖書にふんだんに出てくる教えのひとつひとつに目を留め、人と人とのつながりを軸に据えた学びを進めていくべきだと思います。そうすることによって、神の国の一員としての豊かな人生が約束されるのです。交わりを深めることを通して、今まで見えなかった聖書の約束が見えてくるということもありうるわけです。そして、常に人の意見に耳を傾けていれば、聖書を自分流にねじ曲げて解釈することもなくなると思います。

私は「キリスト教教育入門」という名の講座を受け持っているのですが、毎年、学生に簡単でいいから、自分のこれまでの人生に最も影響を与えた先生、あなたが神学校で学ぶきっかけ

となつた先生のことを書いてくださいとリクエストします。例外なく、学生が挙げるのは、彼らに愛し、その愛を身をもつて示してくれた先生です。専門分野での知識や、教え方のうまさといったことは、この愛の力にくらべれば、二の次のようです。ところが、私の知る限り、どの教育期間も教職員の選考にあたって、人を愛する能力を基準にすることはありません。これは、神学校でも同じことです。

愛すること、イエスさまがあなただを愛したように人を愛することの必要性はこのケースを見る限り、徹底されていないような気がします。しかし、私たちが愛について抱く、すべての疑問を解く鍵を持つていての方がいます。しもべとして世に仕えた、イエスさまです。

ヨハネの福音書一七章にイエスさまご自身の祈りが記録されています。聖職に携わる人の手本となるような素晴らしい祈りですが、これを理解する前提となるのが、先に挙げた「互いに愛し合いなさい」という教えです。一三章では、私たちが互いに愛し合っていない限り、神さまとつながっているとは言えないと教えています。イエスさまは、祈りの中で、交わりと並行して語られる福音伝道についても、相手の痛みを知り、愛する力が前提になることを明らかにされています。

この素晴らしい祈りの中で四回、イエスさまは同じことを祈っています。何と四回も繰り返

しているのです。弟子たちのために彼は、彼らが一つとなるようにと祈ります。この祈りは驚くほど簡潔です。「私と天の父が一つであるようにあなたがたも一つであるように」これだけです。私は三位一体の神を信じてはいますが、どうもこれは理解できません。別々のからだをもった三人がいったいどうやって、役員会―たぶん投票にかけて二対一でイエスさまを地上に送ることにしたのでしよう―の承諾もなしに離すことのできない一つのからだになれるのでしょうか。

しかし、紛れもなく、一つになったのです。だからこそ、イエスさまは「私を見たものは私の父を見たのです」と言うことができるわけです。「私がどんなクリスチャンか知りたいて？ 教会にいる他の人を見てごらん、その人と変わらないでしょ」と言い切れるには、一体どんな一体性が必要なのでしょう？ 教会の現状を考えると思わずため息が出そうですが、とりあえず、教会内、あるいは教派を越えて、私たちがどんなかたちで愛し合っているのか、見直すところから始めてみるとよいと思います。一体性に関して、イエスさまは、また、別の言葉で祈っていますが、福音伝道について大切なことを示唆しているので、見てみましょう。

次の祈りです。「彼らが余うされて、一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るため

です。」(ヨハネ一七・二三 傍点筆者)

振り返ってみると私の伝道活動は、世間の人に何がなんでも首を縦に振ってもらおうと、あの手この手で迫っていたような気がします。そのため、人を自分のペースに引き入れようと、やり手のセールスマンの手法をまねし、聴衆を意識して、劇的なプログラム作り、演出に凝り、弁舌に磨きをかけ、テレビや新聞を使って宣伝しようとしていたわけです。

しかし、これで人々の足が教会に向かうかというと、決してそんなことはありません。結局、人々は私たちが互いに愛し合っている姿、イエスさまが求めたように一つになっている姿を見て、心が動くわけです。クリスチャンがキリストのうちに留まっていなるとすれば、それを見た世の中の人々が、どうして私たちの言うことに耳を傾けることがありましよう。私たちが一つにならないうちは、キリスト教は、所詮、数ある思想の一つに過ぎず、誰もそれを生きたり振り所にしようとは思いません。

ご存じの通り、自己中心主義はやがては分裂をもたらします。一方、自分を捨てて他者に仕えることは私たちが一つとなる上での基盤です。クリスチャンの間に本当の意味での愛が育っており、それが一目瞭然なら、何もこちらから働きかけなくても、この世の人たちは自らすすんで教会に駆けつけ、それこそ神の国の奪い合いになるでしょう。

ヨハネによる福音書一三章の戒め、及び一七章の祈りを見ればわかることですが、イエスキリストは、弟子たちが世の人によって評価されるのを別に気にする様子がありません。

「あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

「あなたがわたしを遣わされたことを、この世が知るためです。」

ここでまた、ひとこと言いたくなります。あんまりじゃないですか。私は人生の大半を、「私を裁くなんて何さまのつもりですか？ 外面しかわかっていないくせに。私の心の内をわかっているのは神さまだけですよ」と言いながら正義のかくれみのの中に身を置いてきました。確かに、それはそれで正しいのかもしれない。しかし神さまはここで私たちが救われて、主にあって成長した結果、どのような実を結んだのかということについて、この世の人に評価する権限を与えたのです。

私の家の庭には、一本の木があります。家を購入するとき、これは桃の木だと言われました。なるほど、桃の木の型をしていますし、桃の木ならではの葉も付いています。しかし、何年たっても実がならないのです。もうこれ以上大きくなって場所をとられてはかなわないので、思い切って斧を持ってその木に近づきました。そのとき、木は「僕を切り倒さないで！ みかけだけで判断するなんてあんまりじゃないですか。自分はずっと桃の木として生きてきたんです

から」と哀願するかもしれませんが。でもそんな願いが聞き入れられるわけがありません。桃は実を結ぶために造られたのであって、その心のために造られたわけではありません。

私はここでイエスさまの祈りを実現させながら生きていくかどうかたずねなければなりません。私は神の国の門の役を果たしているのか、それとも戸の錠前になっていて人を入れないようにしているのかどうかです。自分で勝手な基準を設けることによってです。ここでも、また他者を愛し、他者に仕えること、つまり愛によってキリスト者としてうなずかれ、仕えることによってより効果的な勝利を味わうことが求められるわけです。

では、具体的にはどういう生活を送ればよいのでしょうか？ あなたの証拠としての実がなると言っているでしょう。イエスさまの戒めに従って人を愛し、キリストが求めておられるようにひとつのからだとなるつもりならば、イエスさまこそが父なる神を完全に説き明かされる方であり、私たちの模範であることを知る必要があります。

聖霊に満たされたいと願うなら、聖霊がイエスさまについて語るのに耳を傾けること、イエスさまの姿にならう生き方の中で、聖霊の促しに従うことが大切なのです。

手の届くところに

いろいろな神学がありますが、私たちが実際、自分の人生にあてはめて考え、実践してみたいことには評価の対象にはなりません。イエスさまについて学ぶときも同じことです。

私たちの人生は単調ですが、ある意味では安定しています。しかし、これも意を決して私たちの師キリストのように生きようとしたときから変わります。このとき「わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。」(マタイ一〇・二三)というイエスさまの約束がもはや他人事ではないのだと実感するわけです。

それにしてもこんな約束、他ではちよつと考えられません。前にも申し上げた通り、イエスさまは、父なる神さまがどのような方で、何を求めているのかを知らせるために、この世に来たのであって、自分の生き様をそっくりそのまま真似しろと言いに来たものではありません。例えば私が問題のある両親のもとに馬小屋で生まれ、どこにでもある名前をつけられて、天使の告知を受けるなどということは考えられません。貧しい少年時代を過ごし、柄の悪い人に囲ま

れて育つたということにかけては、イエスさまに引けを取りませんが、それで誰か救われたわけでもありません。また、一癖も二癖もあるような弟子を見習えとも言っていないければ、屈辱的な死に方を選べとも言っていないわけです。

これらのことは、私たちが、イエスさまと同じ性質を持って生きていけるようにと示された指標ではありません。生き方をそのまま真似るとするのは土台、無理な話です。しかし、一神の国でいちばん偉い者」について触れた教えとピリピ人への手紙二章五節から一一節に見られるイエスさまの姿は、身近なこととして、私たちにも実行できるものです。

神の国でいちばん偉い者は誰でしょうか？

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で、人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。」

「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また偉い人たちは、彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありませぬ。」

「それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがた

もまた互いに足を洗い合うべきです。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもする
ように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。まことに、まことに、あなたがたに告げ
ます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさるものではありません。」
「だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。」

「子どもたちを、わたしのところに來させなさい。止めてはいけません。神の国は、このよう
な者たちのものです。」

「あなたがたの間で一番偉い人は、一番年の若い者のようになりなさい。また、治める人は仕
える人のようでありなさい。」

「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなの新がりととなり、みなに仕える者となりなさ
い。」

「あなたがたすべての中で一番小さい者が一番偉いのです。」

マルコ一〇・四二―四四、ヨハネ一三・一四―一六、マタイ一八・四、マルコ一〇・一四、ル
カ二二・二六、マルコ九・三五、ルカ九・四八

あなたの自由にまかせて

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」

イエスさまが神の国で一番偉いとはどういうことかを弟子たちに教え始めたとき、彼は、何を隠そう、自分のことを話していたのです。というのは、彼こそ、昔も今も神の国で一番偉い人だったからです。

イエスさまが神と人々に仕える姿を目のあたりにして来た弟子たちは、その言わんとすることを理解していました。

つまり、いちばん偉い者は、みなに仕える者、しもべとなる必要があるということです。何と私の理解の仕方と違うことでしょう。キリスト教の聖潔の教えに従っていけば、神さまは恵み深い方だから経済的にも備えて下さり、実社会でも出世を約束して下さる。課長、いやもしかしたら社長になれるかも……。実際、多くのクリスチャンがそう教えられて育ちます。

ところが、イエスキサの性質には、私のような野心的な思いのかけらもみられません。これは考えてみれば不思議なことです。もし私が家に帰って私は奴隷に選ばれたと自慢したら、家族はどんな反応を示すでしょうか？ 「それはよくなったね」とは、いかないでしょう。実際私も吹聴して歩きたいとは思いません。イエスキサの姿、それにならって生きる私の人生というのは、およそ宣伝しなければならぬものとはちがうのです。

しもべとしての仕事を少しでも楽なものにする方法として、ひとつには喜んで仕えることができる、人当たりのいいご主人をこちらの方から選ぶという手があります。しかし聖書はそういった逃げ道を認めません。イエスキサは「みなに仕える者」と言ったのです。

しもべの仕事は、人々がよりよい生活を送れるように、あらゆる手だてを尽くすこと、つまり、彼らに夢があり、それを実現する可能性がある場合、邪魔をせずに喜んで手を貸してあげることです。

しもべの関心は自分ではなく、他人に向けられます。誤解を避けるために付け加えておきますが、私は奴隷状態のことを言っているわけではありません。しもべとなることは、素晴らしい選択です。他人に仕えるために愛をもってその道を選ぶ生き方です。

人から強制されたり、あるいは、言葉巧みにそそのかされてなるのではしもべとは呼ばませ

ん。

ドアマットでつまずかないように

家に入る前に靴に付いた泥を落とすドアマットを思い浮かべて下さい。これと同じ役割を自分も担いたいと思うでしょうか？ おそらく思わないでしょう。たとえ「イエスさまのためにドアマットになってくれよ」と言われても考えてしまうとと思います。

クリスチャンの交わりでも甘いことばに乗せられて、気がついたときには、いいように利用されていた。つまり、誰かのドアマットになっていたということがよくあります。実際、そういう腹黒い人もいるわけです。これは、イエスさまがよしとすることではありません。人間関係には、かけひきがつきものなのです。ときには、甘いことばをささやき、ときには語気を荒らげながら、自分の思い通りに相手を動かそうとするわけです。そしてそれが、うまくいったとしても、「こんなに簡単に引っかけりやがって。馬鹿みたいな奴だ。」と軽蔑しさえすれ、

感謝することは、まずありません。

では、逆に相手が話に乗ってこないときはどうでしょうか？ 「君のことを思っ言ってるんだよ」などともっともらしいことを言いながら、相手に、自分からそうしたいと思わせるわけです。

私はよく頼まれごとをします。引き受けるのが本人のためにならないと思うときは、できるだけやんわりと断わるのですが、たいていこう言われるので、どうもやり切れません。

「だってアーウィンさんはクリスチャンでしょ。クリスチャンが人の頼みを断っていいの？」
相手は、クリスチャンの罪を見つけたくもりでいい気になっているわけです。本当はやりたくないのに、やらないと、気まずい思いをしないように、あるいは偉い人の面子をつぶさないようにといった理由です。ことがあります。また、単にそれをやらないと、後で何を言われるかわからないということでもあります。そんなとき、私は、相手の思うつぼにはまっています。

相手にいいように利用されることほど、嫌な思いをすることはありません。また、やられたと気づくたびに、自尊心がいつそう傷つけられます。「クリスチャンなら一度でいいから俺のために何かしてくれよ。そうしたら俺もクリスチャンになることを考えてもいいんだぞ」とほ

のめかしてくる人がいます。私の場合、おそらく、これが一番こたえる誘惑ということになりましょうか。もちろん、ことと次第によつてはそうすることがよいときもあるわけですが。

人は、往々にして、相手の関心を買うため、または、お金を稼ぐために、自分が意としないことを仕方なくすることがあります。

親はよく、子どもが言うことを聞くまで病気のふりをします。こういった例を挙げたらきりがありません。

聖書にはイエスさまをかつごうとする人の話が出てきます。パリサイ人やヘロデ王の側近が彼の言葉じりを捕らえて、やり込めようとします。

「彼らはイエスのところに来て、言った。『先生、私たちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは人の顔色を見ず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、カイザルに税金を納めることは律法にかなっていることでしょうか、かなっていないことでしょうか。納めるべきでしょうか、納めるべきでないでしょうか。』
イエスは、彼らの擬装を見抜いて言われた。『なぜ、わたしをためすのか。……』』（マルコ二・一四―一五）

相手にだまされないためには、まず、謙遜であること、すなわち自分の本当の姿を知り、そ

れと向い合うことです。イエスさまは、自分を知り平常心でいたので、人々におだてられても、心を動かされることはありませんでした。これが私でしたら「やっとな俺がすごいってことがわかったか。よし、これからはもつとすごい説教をするぞ」と舞い上がっていたことでしょう。

肯定的に評価されるのが悪いといっているのではありません。それが本当なら何の問題もない。ただ、謙遜な心を持っていれば、相手が自分に媚を売っているときは、それと気づくでしょうし、その裏に隠された狙いもわかると思うのです。

イエスさまは、人々の策略に真向から対抗しました。先ほど引用した話の前にもこんなことがありました。

「パリサイ人たちがやって来て、イエスに議論をしかけ、天からのしるしを求めた。イエスのためそうとしたのである。イエスは心の中で深く嘆息して、こう言われた。『なぜ、今の時代はしるしを求めるのか。まことに、あなたがたに告げます。今の時代には、しるしは絶対に与えられません。』イエスは彼らを離れて、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。」(マルコ八・一一―一二)

イエスさまは、パリサイ人がそこに来たのは、自分を快く思っていないからで、決して自分から何かを学ぼうというのではないとわかっていました。えてしてそのような敵対意識は隠そ

うとしてもわかかってしまうものです。

謙遜さ（ありのままの自分を受け入れ、自分はそれ以上でも以下でもないと思うこと）を備えたイエスさまは、そのとき怒りをあらわにしました。そしてこれ以上言い合っても無駄だと知ると、その場から身を引いたのです。

相手のはかりごとに対抗する第二の方法は、身を引くことです。イエスさまはしばしば、相手から身を引きます。一そこで、イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行くこととして知っているのを知って、ただひとり、また山に退かれた。」（ヨハネ六・一五）

策略の特徴は、それが私たちのものごとを選択する力を損なわせることです。そしてなすべもなく、相手の思うつぼにはまってしまうわけです。イエスさまをやり込めようと手の込んだ質問を投げかけた人には誰ひとりとして、期待していたような答が返ってきませんでした。イエスさまはただ心に感じたことを率直に語っただけです。

状況によっては、その場を立ち去りました。相手と同じ士俵に、立たないことで、自分の分別を保ったわけです。

無理強いされて仕えることと、自ら選んで仕えることには、明らかな違いがあります。イエスさまは、「私はいのちを捨てます。誰も私からそれを奪うことはできません。」と言いました。

愛とはこういうものです。愛はいつも正しいことを行い、人々の益となることをします。しかし、これはあくまで自分が選択してすることです。その選択があつて初めて人を愛せるわけです。

本当の愛は、これみよがしに宣言して実行したり、誰かに無理強いされてすることではありません。有無を言わず、人に愛することを強要するのは、人権侵害もいところで、それこそ愛の無い行ないです。

自由な選択が許されそうもないと感じたとき、結局自分は人から本当の意味で愛されていないのだな、と思うものです。これで何人教会を去つて行つたことでしょうか。

謙遜な心があれば、例えばこんなふうに言うことができます。

「気のせいかもしれませんが、何か強制されているような感じがして、いまひとつ納得できないんです。こんなふうに感じているうちは、決断もつきませんし、あなたとい関係も築けないとおもいます。ですから自分が納得して行動しようという気になるまで少し考えさせて下さい。」

また、頼まれごとの中に相手の策略が見え隠れしている場合、はっきりとノーを言うことは、間違ひではないと思います。誰かを罠にかける際、逐一、できない理由を尋ねるのは、よくあ

る手口です。落ち着いて相手の策略をかわすため、ときには、ノーコメントに徹することも必要です。しかし、そのときもその人を憎むのでなく、あくまでその人のためを思っている行動であることを認識することです。

また、何が何でも自分の思い通りにしようとして説得にかかっている人は、ノーと言われると逆上することがよくあります。

嫌な思いをするでしょうが、これも誠実に生きていこうとする上で払わなければならない代価と割り切ることです。言い返さずに黙っていれば、相手の怒りも収まるものです。

人をだまそうという気持は一種の病気と言っていていいと思います。もし、相手に好きなようにさせていけば、その病気を一層悪化させることになるわけです。策略に対抗することは、決してやさしいことではありません。相手が癩癩を起こすこともあるでしょう。しかし、その行為を通して相手の心がいやされ、自分自身も救われるのです。

「イエスさまに従って生きます！」と張り切って人前で公言する人が陥りやすい罠は、自分勝手な思い込みです。「人々が何に飢え渴いているかわかった。この人たちには私の力が必要だ……」

でも実際自分の力でできることなどほとんどないのです。そんなときもじつとしていられま

せん。相手の要求全てにそのまま応えようと懸命になり、しまいには、精魂尽き果て、ぼろぼろになって「もう二度とイエス・キリストのように生きるものか」と言うはめになってしまうわけです。

前にも申し上げた通り、こういう問題を解決する鍵は謙遜さです。私たちは神さまとは違います。ですから、この世に起こる問題をはじめから全て解決することなどできません。自分の力の限界を感じ、あきらめたとしても、ある意味では当然なのです。自分を冷静に振り返ると、歳と共に気力、体力が衰えていることに気づくと思います。そんなときは、いくばくかの休息をとるのが賢い方法ではないでしょうか。

イエスさまは、よく弟子に十分な休息をとらせました。また、イエスさまは神でありながら、人間としてありのままの姿で生きました。

いつも愛の選択ができるよう、心を整えていたのです。その愛の選択は、私たちにも求められています。人に仕える者になるため、必要な選択です。

力のピラミッド

「異邦人の支配者と認められた者たちは、彼らを支配し……しかしあなたがたの間ではそうではありません。」

この戒めの持つ意味を考えると、教会が現在、組織上の問題をめぐって、次々に分裂しているのは実に皮肉なことに思えます。それでもなお、懲りずに、多くの人が自分の教会こそ聖書的で神さまのみどころにかなったものと主張してやみません。

規則で人を縛り、目上の人への服従を重んじる組織にとって、みなに仕えなさいというこの戒めほどショッキングなものはないでしょう。多くの教会の組織は大企業の人事機構をそのまままねたようなもので、ピラミッド型の管理システムが当たり前のこととして取り入れられているようです。

ところが、神の王国では、この力のピラミッドが上下逆転しています。なぜかという、権威ある者は上ではなく底にくると神さまが約束しているからです。イエスさまは、服従につい

ての教えをだれに向かつて話しているのでしょうか？ 実はこの世でリーダーと呼ばれる人、つまり、神の国で一番偉くなりたいたいと思っている人に向けてなのです。彼らは常に自分より上の者でなく下の者に仕えなさいと命じられます。例えば、マタイによる福音書二〇章二六節で、イエスさまははっきりと「あなたがたのうちで偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。」と言っています。

イエスさまが人々をどう見ていたか考えてみると、このように教えたのは、ごく自然な成り行きと思われれます。彼は人々にそれだけの価値があることを知っていたからこそしもべとして仕えていたわけです。人間が人に仕えるどころか、逆に支配しようとするのは、相手の価値を認めず、イエスさまと同じような態度でその人のことを見ていないからです。

神の王国でリーダーとなる人たちは、クリスチャンひとりひとりがそれぞれに違った方法で直接、教会の頭なるキリストに結びついていなければならないことを知るのが大切です。

人を管理、あるいは支配することを目的とするこの世のシステムとは違って、神の国のリーダーは、人々に奉仕し、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致へと導き、心に平安をもたらすために、人々が成熟する手助けをするために選ばれた器です。(エペソ四・一一 一六参照)

イエスさまはその時代の霊的指導者たちに対し、最も厳しい言葉を備えていました。一方で、

羊飼いからはぐれた羊のような、大衆を慈しみながら行動を共にしました。自分が心を留めた羊を呼んで、教会のリーダーに従えと言ったのでしょうか？ いいえ、逆にリーダーに対し、羊に従いなさいと命じたのです。

私がここの責任者です

教会のリーダーが「私の教会では、皆、本当にいい人ばかりなんです。リーダーの言うことをよく聴いて、決して口答えしないし、何かにつけ、助けてくれるんです。」と自慢げに言うのをよく耳にします。

しかし、その教会の人たちは、選択の余地を与えられて、自分の意志でリーダーに従っているのでしょうか？ もしそうでないとすれば、それはリーダーの責任です。まず、イエスさまが、そうであったように、リーダーは、しもべとして、率先して、自分の日常を包み隠さず明かさなければなりません。しかし、残念なことに、信徒に自分のことを知ってもらっている

牧師やリーダーは、ほとんどいないのが現状です。神学校で受けた訓練、あるいは読んだ本のせいでしょうか？ 多くの聖職者が、自分は立場、信徒とは、距離を置いてつき合わなければならぬと考えているようです。結果として、上から人を見る姿勢ができてしまっているわけですね。これは古くから取り沙汰されている、厄介な問題です。自分で自分を權威のピラミッドの頂に置いてしまった人は、気づいたときには回りから取り残され、周囲の事情にうとくなっているものです。下にいる人たちは、もはや本当の気持ちを打ち明けてくれません。

頂上にいる人が、下にいる人から知らされることがあるとすれば、当たり障りのないことだけでしょう。本音を知りたいと思つたら、まず、自分の役職のことは忘れて、しもべとして相手の懐に飛び込むことです。あくまでも自分の意志ですることが大切です。人から促されて試みても意味はありません。

自分から行動を起したとき、道は開けます。イエスさまの喜ぶことを喜び、イエスさまの悲しむことを悲しむ。その気持ちがあれば、人に仕えることに抵抗はなくなるはずですね。いや、それしなでできないのではないのでしょうか。「教会で従順とは何かを学んだ。」と言う人の経験談を読んだことがあります。その人が従つたリーダーは、この世に仕えるとはどういうことか教えるために、自分の家の庭の芝刈りをさせたと言うのです。これなど、イエス・キリストのス

タイトルの取り違えもいいところです。自分の家の芝を刈らせるのではなく、人の家の芝を自分で刈ることによって、人に仕えるとはどういうことかわかるのです。

イエスさまに倣って、リーダーシップを取ろうという人なら、強制的に人に何かさせたり、自分の役職をかさに着ることはないはずで。

人を導こうとしてリーダーになるではありません。自分が人に仕えることで、結果としてリーダーになるのです。なぜなら、その姿勢の中にイエスさまの生き方を見た人たちが、彼に従うからです。

リーダーシップは、十人十色ですが、リーダーに従う人は、往々にして自分もそのリーダーのようになるものです。彼らが、良くなるか、悪くなるかは、リーダー次第ということ。

役職を利用して私腹を肥やし、信徒の非難を浴びたあるリーダーがいます。その人はあなたが同じ立場にいたならやらないことは私だってしなかったと言って弁解しました。別の言葉に置き換えると、「目こぼしを受けられる保証があれば、あなただって同じことをしたでしょう。」と言っているわけです。このような発言は、自分の教会に対する冒瀆以外の何もものでもなく、教会の成長の芽を摘むに等しいことです。

リーダーシップをとる上で陥りやすい、このような落とし穴を避ける一番の方法は、立派な役

員室のドアにでも「しもべ」と書いたプレートを下けておいて、それにそぐわないものはすべて取り去ってしまうことです。権力は、いつかは腐敗します。大きな権力ほど、腐敗の度合いも著しいものです。

しもべは、人の上に立つような肩書きを与えられることはありません。ステータス・シンボルと言えるものがあるとすれば、肉体労働でついた擦り傷くらいです。しもべが主人よりも足の便のよいところに駐車場を持つなんて想像もできないでしょう。他の人よりも大きなオフィスを与えられたり、自分の地位を誇示するために装飾品をまとったりすることはありません。相手に引け目を感じさせるような服を身につけるなどもつてのほかです。自分の地位を利用することがあるとすれば、主人の能力を引き立たせるためだけです。

また、奴隷の中では自分が一番だなどと主張したりもしません。世の中の管理機構は、イエスキリストの生きざまと対極のかたちを取っていますが、それを教会が何の疑いも持たずに取り入れているケースが実に多いのです。ある意味で、これは危険なことです。なぜなら、聖書の教えよりもリーダーの立居振舞の方が、目に見える分、信徒に対するインパクトが強いからです。教会は、どの宗派が異端に属するかということとは実に熱心に説いてきました。しかし、今こそ、行動面の異端にも目を留めるべきときだと思います。

「でも、彼らは自分ではしゃべることのできない羊のようなものですよ。だから私たちの方できっかけを与えてやる必要があるんです。」そんな声を何度か聞きました。これは、この世の側に立った意見です。私たちの組織が教会ではなく、イエス・キリストとも何のかかわりがない、そのようなものでもかまわないのなら、いくらでも好きなように相手を動かすことができます。しかし、私たち自身キリストのしもべでありたいと望むなら、まず、相手を受し、その自発的な応答を待つべきではないでしょうか。名の知れた伝道者が吹聴してまわっているような、迅速で、思わず、頷きたくなるような反応を期待する必要はないのです。

この世の制度を盾にとつて、聖霊を通したイエス・キリストの働きを終わらせてしまふなど、あつてはならないことです。

もし私たちが皆、イエスキースさまと同じように生き、お互い交わりを持つなら、そしてリーダーが率先して人々のしもべとなるなら、キリストのからだである教会に何が起こるでしょうか？ その可能性は無限です。自分の信仰が絶対ではありません。他のかたちもあつてしかるべきです。ひとりひとり神さまにそれぞれの場所で救われるのです。このことを皆が理解した教会は、何かが変わるはずで

コインのうらおもて

あなたがクリスチャンとしての生活を送る上で、今述べた力のピラミッドを逆さまにしようとしたとします。そこでまず、問題となるのは、家庭です。私たちの生活の最も基本的組織である家庭は、様々な問題をかかえています。中でも結婚生活については、様々な宗派が様々な角度から解釈を加えており、中にはとんでもない見解もあります。

イエス・キリストは、結婚生活についてのどのようなことを示唆しているのでしょうか。まず最初に論調から見ましょう。

「すべての戒めの頂点に男性がいる」

どうも女性は軽視される傾向があるようです。男性が認めないかぎり、女性は、神に近づくことが禁じられていることが多いのです。最近では、結婚による男女の結びつきを論じるにあたって、特にこのことを強調するきらいがあります。この教えを信奉する人が引き合いに出すのがエペソ人への手紙です。ここでパウロは「夫がキリストに従うように、妻も夫に従うべきで

す。」と言っています。

女性を書いた女性のための聖書入門書があり、一度目を通したことがあるのですが、ここでもまた、夫への服従という戒めについて否定こそしないものの、自分に都合のいいよう、ねじまげて解釈しているようです。女性は自分の願望を男性にかなえてもらうことができる。これは女性の特権だ。服従とは、男性に望みを託すことというのがその言い分です。これはある種の退化です。が、少なくともこの勝負、綿密な論を展開したという点で女性の方に軍配が上がるのかもしれない。

結局、男性は、神さまと同じ役割を担わされるのですが、現実には荷が重すぎて、青色吐息です。一方、女性の方は、男性を補佐し、既き従う役割ですが、本心では、面白くないと思っているわけです。

服従というテーマをめぐって、夫婦の関係がこんなにももつれてしまうのは、二人ともイエスさまの生きざまを見ていないからです。

エペソ人への手紙に書いてあることをよく見てみましょう。ただし、今、述べたような考え方に固執する人が、好んで引用する箇所を、少し前の方から始めてみます。

「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。妻たちよ。あなたがたは主に従うように自分の

夫に従いなさい。なぜなら、キリストは教会のかしらであつて、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのごことにおいて、夫に従うべきです。夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたも、自分の妻を愛しなさい。」(エペソ五・二一—二五)

互いに従いなさい。これが第一の戒めです。それで初めて、一つのからだとして働くのです。次にくる戒めは、これの延長線上にあるわけです。結婚生活での服従とはどういうことか、もうおわかりいただけたと思います。妻はキリストに接するように夫に接すること。夫は、キリストが教会を愛したように妻を愛することです。

妻の役割にくらべ、夫の役割の方は、意外と見過ごされがちです。

そもそも、キリストはどのように教会を愛したのでしょうか？ イエスさまはしもべとして教会に來ました。支配者としてではありません。彼は人々の模範であり、慎み深く、子供のように純真でした。何も持たず、若々しく振る舞い、自分のことはいつも最後に考えていました。権威を振りかざすことなく、名声も求めませんでした。死に至るまで、この姿勢を変えなかつたのです。

自分の妻にこんな方法で接すれば、服従という言葉をめぐる論議を戦わすことなどあるで

しょうか。そもそも無理強いされてする服従は、服従とは言えません。しもべとしての役割を率先して引き受ける。前にも申し上げた通り、リーダーが率先してしもべの役割を果たさなければならぬのです。ですから、家庭のリーダーである夫にも当然、しもべとしての態度が求められるわけです。謙遜な気持ちがあれば、意見が食い違っても歩み寄ることができます。

相手につっかかるのではなく、冷静に自分の、そして相手の気持ちを考えることができます。神さまと共に生きるなら、私たちはこの世の家族である前にまず神の家族の一員であることを知っておくことです。私の妻もゲイル・アーウインの妻である前に、キリストの姉妹なのです。ですから、神さまの子どもとして彼女に接し、自分の子どもが受けてしかるべきだと思う以上の世話をすることが求められているわけです。神さまの子どもという認識があれば、威張ったり、自分の思い通りにしようとするともなくなるはずで

甘やかさないこと

自分の子どもに対してしもべとなり、なおかつ甘やかさないためにはどのようなしたらよいでしょうか？ 実際子どもが精神的な面で成長していくためには、親のしもべとしての態度は望ましいものです。

まず、自分の子どもが神さまの子どもであることを思い出すことです。そうすればキリストのしもべとして、また、子どものしもべとして、神さまに代わって、育てるのだという自覚が生まれます。そして子どもたちの中にある父なる神さまの聖霊の実を豊かにみらせるためにしもべの心で訓練し、育てることができるとです。

しもべの心は、私たちを子どものそばにいさせます。そして、要求にこたえ、神さまから離れないように気を配らなければなりません。ときには、厳しい態度も必要になってきます。

長い目で見て子どもの益となるような選択をしてあげて、いつも心の隅に置いておくこと。親が子どもに仕えるとは、こういうことです。子どものためにならないならば、ダメと言って

あげることも必要です。

「父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によつて育てなさい。」（エペソ六・四）とパウロも言っています。

イエスさまに倣つて子どもを育てようとするならば、やみくもに叱るのではなく、まずは自分には親に愛されているという気持ちに子どもをさせてあげることです。しもべの務めとして、子どもをひとり立ちさせて、その子のもうひとりの父親であるキリストに返してやらなければなりません。甘過ぎてても厳し過ぎててもいけません。慎重なバランス感覚が必要です。

しもべが、神の子どもの教育を任せられるのですから、大責任のある仕事と言えます。しかし、どんな状況であれ、神さまはしもべとして子どもに仕える親の愛情を喜ばれるものです。

私が六歳のとき、父は飛行機事故で瀕死の重傷を負いました。半身不随となり、脳にも損傷を受けたのです。代わつて私の母親が家族全員を養うことになりました。

母親は働いているので家を開けることが多く、一方父親も、精神的、肉体的な面での優をいやすのが先決で、私の相手どころではなく、ある意味では、いなにも巨匠でした。世間でお決まりの家庭崩壊の舞台は整っていたわけです。しかし私たちの家族は崩れませんでした！ 苦難の中にあつて両親は神さまに忠実であり、そして私たちに忠実だったので。私たちの生活

の中心にあったのは祈りであり、信仰であり、へこたれまいとする意気でした。お金や立派な家は念頭になかったのです。

父が亡くなったとき、私は二人の弟と共に、棺の前に立ち、葬式に参列してくれた方を前にして、こう言いました。

「父は、私たちに財産を残しませんでした。普通の父親が子どものためにしてやるようなことを彼はできなかったのです。しかし父は確かに自分が持っているものを私たちに残していきました。それは、神さまを愛すること、聖書を愛すること、人を慈しむこと、礼拝を大切なことと理解し、人を許すことです。父が残したものは、これだけですが、これらのものはいつまでも残るものであり、私たちはこの教えをこの先、忘れることはないと思います。父の息子であったことを誇りに思います。私たち家族は、これから父と共に歩んだイエス・キリストに仕えるつもりです。」

しもべの心を持った親は、神さまが家庭の中に備えてくれた賜物の重さを知っています。そして、人生という、神さまの創造された庭を丹念に手入れする選ばれし者の特権と責任を誰よりもよく理解できるのです。こういう親に育てられた子どもは、多少のことでは、へこたれないタフな性格の人間になるものです。

イエスさまは、社会的に見てかなり問題のある人たちに囲まれて育ちました。これこそ、しもべとしての務めを果たすには、何も理想的な家庭や環境が必ずしも必要でないことを物語っています。経済的に豊かであることもまた必要ではありません。必要なものがあるとするれば、それはただひとつしもべとしてこの世に仕えたイエスさまに従うこと。それだけです。

説教を見せてください

あなたがつまづかないように模範を示します。

私が講師役を勤める教会のキャンプに、家族が途中参加することになり、彼らは車で家を出ました。距離にして片道六〇〇キロメートルはあるので、ちょっとした大旅行です。最初、大きな街に入ったのですが、かなり入り組んでいたため、道に迷ってしまいました。

妻は二時間もの間、何とかしてその街から抜け出そうと必死で車を走らせました。警察官やその街の住人とおぼしき人に道を聞いて、そのたびに言われたとおりに車を走らせたのですが、

結局もと来たところに戻ってしまい、次第にいらいらしてきました。

「もうだめだわ。でもその前にもう一度だけ道を聞いてみましょう。それでだめなら仕方がないわ」そう言つて彼女はあるガソリンスタンドに車を止めました。ひと通り説明を聴いてから、興奮気味にこう言いました。「何度もその通りにしたのです。でもどうしてもこの街から抜けられないんです。」すると、この会話を聞いていた人が、「あそこに止めてある赤い車が私のです。先導してあげるから、ついてきなさい。」と言つてくれたのです。

迷路のように入り組んだ街並でしたが、先導してもらつたおかげで、気がついたときには、一〇キロメートルほど街を後にしていました。あとは高速道路に乗るだけというところまで来ると、その人は車を止め、「さあ、もう大丈夫。あとはこの道をまっすぐ行つて下さい。」と言いました。

私の家族に言わせると、その人はイエスさまのように見えたとのこと。彼がクリスチャンだったのかどうか、私にはわかりません。しかし、その人が、多くのクリスチャンよりよほど、イエスさまのみことろになつたリーダーシップをとっていたことは、紛れもない事実です。

クリスチャンがリーダーシップをとる上で、最も効果的な方法は、言葉でなく、行動で示す

ことです。イエスさまは、「私の言う通りにすればいいんです。何も真似をすることはありません。」などと決して言わなかったと思います。むしろこういふ言い方をしたのでです。

「そのとき、イエスは群衆と弟子たちに話をして、こう言われた。「律法学者、パリサイ人たちは、モーセの座を占めています。ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行ない、守りなさい。けれども、彼らの行ないをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。また、彼らは重い荷をくくって、人の肩に載せ、自分はそれに指一本さわろうとはしません。彼らのしていることはみな、人に見せるためです。経札の幅を広くしたり、衣のふさを長くしたりするのもそうです。また、宴会の上座や会堂の上席が大好きで、広場であいさつされたり、人から先生と呼ばれたりすることが好きです。しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただひとりしかなく、あなたがたはみな兄弟だからです。あなたがたは地上のだれかを、われらの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただひとり、すなわち天にいます父だけだからです。また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただひとり、キリストだからです。あなたがたのうちの一番偉大な者は、あなたがたに仕える人でなければなりません。」(マタイ二三・一―二)

神さまの軍では、將軍は、自分だけ安全なところに身を置いて、指示役に徹するようなこと

はありません。むしろ前線に立って、チャンスとあらば、率先して敵と相対し、戦いはこうやって勝つものだと身をもって示す。これが役目です。

私はかつてある神学部の学生が「大学にはクリスチャン専用の寮がありません。これでは、神さまのために重荷を負っていない人から悪い影響を受けてしまいます。」と言うのを聞いて悲しい気持ちになりました。

神さまを信じない人は自分とはまるで別の人種、といった優越感があるのが、明らかです。今、至るところで、クリスチャンは自分たちだけで固まろうとしています。光は外で輝く前に、教会の会衆席の下で遮られてしまっているようです。私たちは、罪人が自分ではどうすることもできずに滅びへ向かっているのを知りながら、それに深入りすまいとして、小さな声で「そんなことやめた方がいいよ」と言っているだけではないでしょうか。

しかし、イエスさまはインマヌエルなる方、私たちと共におられる方です。同時に私たちに神さまと共にいなさい。罪人と共にいなさいと命じておられます。彼は弟子たちを「支配」しませんでした。一度として、自分が身をもって示していないようなことを高飛車な態度で命じたことはありません。イエスさまが愛したように人を愛そうと思うなら、まず、イエスさまと同じように行動で愛を示すことです。そうすれば、自然に相手に溶け込むことができます。

生涯を通じた教育

私は、一時期クリスマスチャンカレッジで教えていたのですが、祈りというテーマに関しては、いくら講義で教えたり、確認の意味で小テストをしてみたところでどうにかなるものではないことに気づきました。そんなことをしても学生は、どう祈ったらいいかわかっていなかったのです。

結局彼らが身につけたことと言えば、ノートをとることと、テストで正しい答えを書くことだけでした。私が共に祈らないことには学生は本当の意味での祈りが理解できません。

ある有名な神学校の指導教官がいみじくも語りました。

「神学校が育てているのは、牧師でなく、将来の神学校の教官だ。学生もそう考えて当たり前前の雰囲気は神学校には満ちあふれている。」

イエス・キリストは、将来、弟子たちにどういう教え方をすればいいのか、肌で感じてもら

うために、教室での授業よりも体験学習を選びました。こんな考え方があつた、こういうやり方もあると教えられたところで、実際、だれかが行いで証明してくれなければ、本当にわかつたという気分になれないものです。私自身の経験として、自動車教習所の教官が、身をもつて運転の仕方を教えてくれたこと、親のやさしい手が、私の手に触れて、くつひもの結び方を教えてくれたことを本当にありがたく思います。

「できる人は、不言実行、できない人が教える。」

この言い古された教訓が、本当だとすれば、教える人などいなくなるでしょう。何故なら、行動を伴わない教えは見下されてしまうからです。自分が先にやってみせることで初めて他人を評価できるというわけです。生徒が何か新しい課題に直面して、自分が先陣を切つてすることに不安をいだいているときは、先生が、その損な役まわりを引き受けるべきです。まるで昔、王さまが、日新しいものを初めて口にするとき、家臣が毒見してみせた場面を思い浮かべるかもしれません。こうすることで、先生は生徒に、人々のしもべになるとはどういうことか身をもつて示すことができます。

教育とは、知識やものの価値を伝授し、人格をかたち造る課程と言つてよいでしょう。ところが、クリスチャンにとって教育はそれ以外にもう一つ大切な意味を持っています。それは命

を伝えるということです。命を生み出すことができるのは命だけです。

長い間、教会は、この世の教育方針を何の疑いもなしに受け入れ、イエス・キリストから学ぼうとしました。彼はこう言っています。「弟子は、師以上には出られません。しかし、十分訓練を受けたものはみな、自分の師ぐらいにはなるのです。」(ルカ六・四〇) 私たち大人は、イエス・キリストの命のうちにある子どもを教室の中に閉じ込めてしまつたようです。イエスは自分の弟子を教室でなく、命の息吹が感じられる場につれてきました。私たちは教育を教室の中の一―二時間に限定しているのに対し、イエスさまは自分の全生涯を弟子たちの教育に捧げたのです。学校の教室よりもはるかに開かれた場で、命の息吹きを感じながら教えられること、これは大きな恵みです。イエスは十二弟子を「共にいる」者として選びました。

私たちは教師を、あえて腹を割って生徒と話す必要のない、ただ教えていればこと足りるという役割に閉じ込めてしまつたのではないのでしょうか。イエスさまは、隠し立てせず、自分を弟子たちにさらけ出しました。

私たちは、どんなハートを持っているのかわからない、いわば「顔のない人」に子どもたちを預け、教育を任せっきりにしてはいないでしょうか。聖書は、子どもの教育については、まず親が責任を負うべきだと教えています。

これを読んでいるみなさんの中には、教職に就いている方もいると思います。魅力あるクラス作り懸命に取り組んでいる方、子どもを教える際、様々な制約が課せられるのに悩んでいる方は、これから書くことを読んで、決して悪く思わないで下さい。むしろ頑張っているみなさんへの私からの励ましと受け取って下されば幸いです。

イエスさまの生き方に倣った教育を実践しようとするなら、まず、生徒とともに生き、自分の生活や悩みを分かちあうこと、すなわちイエスさまのしもべの生き方に倣うことです。そして生徒は自分自身のために生きていたのであって、先生や保護者のために生きているのではないということをしつかりと認識することです。子どもは自分の目的に応じて行動様式を身につけていくものなのです。イエスさまの生き方にそった教育では、まず生徒が神の国の一員となるために訓練します。アメリカ国民や他の国の国民であることは、その次に来る問題です。

教師、あるいは他の働きをする奉仕者は、各々が与えられた場で、この神の国をモデルにして生徒を教えることとなります。また、この教育では、家庭を霊的訓練の最も重要な場として位置づけます。この教育では神の国に働く愛の力と、この世の伝統や文化の力をはっきりと区別します。神の国のことを教えるのと同じ要領でこの世の文化や伝統を教えることはありません。

ひとりの先生がひとりひとりの生徒と親密にコミュニケーションを図るには、ひとクラス何人が限界か、ということについて、常に意識されています。そして、生徒の自尊心を粉々に砕くような評価の仕方は決してしません。

また、生徒との心の通い合った関係に裏打ちされていないような訓練のプログラムは、採られません。

成績をつけるにあたっては、その生徒の資質は全て、イエスさまがよしとされて備えたもの、という視点に立ちます。

他の人が期待するような型の中に生徒を押し込めるようなことはしません。

また、その子が卒業してから後の長い人生のことを考え、長期的視点にたつて自分の教え方がどういふ影響をもたらすのか、常に意識します。教育制度を整えるための教育でなく、生徒のための教育を実践します。その意味で、時代の風潮におもねって、多勢の人に絶賛されている教育プログラムに飛びついたりはしません。

イエスさまの生き方に倣った教育が、人生の目標として据えるのは愛です。知識のための知識には価値を置きません。

まず、イエスさまの愛を知り、その上で知識を蓄えていくなら、自然とイエスさまが愛した

ように人を愛し、イエスさまが歩んだように歩むことになるはずですよ。

おごることなく卑下することなく

「この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。」

私は長いこと謙遜という言葉を誤って理解していました。劣等感のようなものを考えていたのです。人の目を意識しながらいかにも哀れみを誘う表情を顔に浮かべ、私はダメな男だ。歌を歌えないし、説教は下手だし、ピアノは弾けない。かといって他の楽器が何かできるわけでもない。おまけに歩く姿すらさまにならない……。私自身、実際こんな具合に卑下しました。

するとそれを聞いていた人は、予想通りというか、私の密かな期待に答えて、こう言ってくれます。「またまた。そんな謙遜なさって。」この安っぽい「謙遜さ」に、どっぶり身を浸し、私は自分が注目されたことで、密かにほくそえんだものです。

こういう態度は謙遜ではなく、単なる病気だと気がついたのは後のことです。謙遜は、人生

に對し、いつもおどおどとした態度をとることはありません。自分自身をありのままに見つめ、自分はそれ以上でもそれ以下でもないと認識すること。これが謙遜です。自分自身を偽らない、率直であるということですよ。

素顔の自分を知り、それを受け入れて生きていくこと、自分の心の中の醜い部分から目をそむけないことです。その意味で、偽善を排して生きることと云ってよいかと思えます。

荒野でモーセは、柴の中の炎を通して神と出会います。そこで彼は、エジプトに戻って、イスラエルの子らを救い出しなさいという神の命令を受け入れはしたものの、だれか自分のことをかっついていっているのではという疑念を拭いきれず、荒野に響く声に向かって「その名は何とこのですか」とたずねます。「ところで、どこの社の方ですか」とビジネスマンが聞いているようなものです。

神は答えます。「わたしはあつてある者」

神さまは調和のとれた方です。あつてある者、つまりそのままの方ということです。イエスさまも自分を称してこう言います。「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」

「アブラハムより前に、わたしはありました」

謙遜とはこの「あつてある者」という状態にほかなりません。

私が人のためにできる最善のことといえば、相手が疑心暗鬼にならずにすむように、自分自身に対して正直（謙遜）であるということです。イエス・キリストが朝、あいさつする度に弟子たちは、「今日、あの人は本当は何を企んでいるのだろう？」などと考え込まなければならなかった。そんな場面が想像できますか？ イエスさまが「昨日も今日も、いつまでも」同じであることは、感情の起伏がほとんどないということではありません。いつも変わらず弟子たちに対して誠実であり続けた、つまり、「ありである者」だったということと考えられます。イエスさまは、人々にひとりの友だちとして接してもらうことを望んでいました。

「彼らは言った。『ラビ（訳して言えば、先生）、今どこにお泊まりですか。』イエスは彼らに言われた。『来なさい。そうすればわかります。』」（ヨハネ一・三八―三九）

ここで特に注意する必要があるのは、イエスさまが、ありのままの自分を見せたのは、集会で強制捜査の対象に指定されたためではないということです。自らの意志ですんで、心を開いたのです。「どうせ話してもわからないだろうから、黙っておこう。」などという態度はとりませんでした。

イエス・キリストは「自分と共にいる」というようにと弟子を選びました。つまり、いちいち隠し立てしては生きていけないような、家族のような状況に、自分と弟子を置いたということ

です。

私たちは、何か起きたとき、その場に居合せることで、社会的には美しいと思われているものの背後にある厳しい現実を知るので、私は独身時代、今の妻とつき合っていたときは、何を着るか、髪型をどうするか、どうやって体臭を消すかといったことに気をつかったものです。妻は結婚して初めて、実は私が、身だしなみなど気にしない粗野な男であることを知りました。そこで私の下心が、ばれたというわけです。長い時間をかけて、ひとつひとつの出来事に立ち会っていけば、全てのこと明らかになるものです。

イエス・キリストは、弟子たちに隠すことなく、自分はこういう者か明らかにしました。彼は「別れの説教」の中で、弟子たちに向かつてこう語ります。「わたしは、あなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことはみな、あなたがたに知らせたからです。」(ヨハネ一五・一五) 本当の自分を明かさないとところに友情は生まれません。

実に多勢の人々が、包み隠さず自分のことを知らせながら、交わりを深めるイエスさまの教えに触れて慰めを得ました。しかし、彼の弟子たちには、もっと深い恵みが用意されていました。

父なる神さまについて教えることが、イエスさまにとって一番大切なことでした。これにつ

いては、今までと違った特別の舞台をイエスさまは用意しています。

これまで以上に強固な信頼関係を築いておかなければ、父なる神について十分な証しはできないからです。お互いの信頼関係を無視して神について語るのは、それこそ「豚の前に、真珠を投げる」ようなものです。イエス・キリストは単なるもの珍しさから自分に近づいて来る者を慎重に見極めます。彼らの思い通りにはなりません。その代わり、心から彼に近づきたいと望んだ者は、満ち足りたのです。

私たちの社会では（教会でも、教会の外でもそうですが）肩書きが立派になればなるほど、他の人との接触は困難になります。私生活はますますペールに包まれてしまいます。ところが、イエスさまの場合、救いの業が完成に近づけば近づくほど、いよいよ自分の心の奥底まで、彼を知る人に明らかにしていききました。

光の中を

私たちは偽らずありのままの自分をさらけ出して生きるということに余りにも不慣れです。ですから、次に挙げる聖書の言葉は、私たちの最も痛いところをついたものと言ってよいのではないのでしょうか。

「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことです。おおいかぶさされているもので、現わされないものではなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家のなかでささやいたことが、屋上で言い広められます。」(ルカ二一・二一―三)

「光の中を歩む」謙遜を言い表す表現としては、これほどびつたりくるものはありません。謙遜とは真実を尊び、何も隠さず、ありのままの自分を人に見てもらうことです。ヨハネ第一の手紙一章七節のことは論理的で説得力があります。

「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互

いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」

私たちの生活態度や価値観が聖書の生きた教えに基づいてかたち造られるのは、稀れといっているでしょう。ですから、光の中を歩むことから生まれる力とは無縁に生きているわけです。私たちは、実はその力を恐れているのではないのでしょうか。自分の弱みを握られているような気がしているのかもしれませんが。その力に砕かれて、自分が慣れ親しんだ行動パターンを変えざるを得ないかもしれないと思っただけでも、とてつもなく不安になるのです。

しかし、心配する必要はありません。人々に自分の弱みを知られるのがそれほど重大なことなのでしょう。弱みがあつてこそその人間です。私たちは許され、その中で成長していく、ここに喜びがあるのだと思います。

私たちは皆、罪人と言えます。「より大それた罪人」という言葉が適切かどうかよくわかりませんが、そういう人がいるとすれば、その人の罪が他の人の罪にくらべ、世間の耳目を引いたというだけのことでしょう。外側の罪は、覆い隠せても、依然として心の中にある悪は、そのままです。

イエスさまは、多く赦された者は多く愛すると言いました。これは、自分の内側の罪も外側の罪も充分悔い改めた者は、心の眼が開かれるということです。弟子たちは、神さまから罪赦

された者という自覚がありました。だからこそ、心を尽くして人を愛することができたわけです。しかし、パリサイ人の場合、彼らの外面は白く塗った墓のようで、心の内に隠された罪を悔い改めることはありませんでした。その分、人を愛するということに関して彼らは決定的な負い目を持つことになりました。

自分を偽ることの代償

心理学者によれば、秘密をもつと、それが良いものにせよ、悪いものにせよ、罪を犯したときと同じような罪悪感に捉えられるとのことです。ほとぼるような激しい感情を相手にわかつてもらおうとせず、自分の心の中のためにためておくのは、たとえそれが素晴らしいものであったとしても、決して精神衛生上良いことはありません。

人間はもともと隠しごとには向かないように創られているのです。人類がこの世に現れると同時に、この隠すことへの情熱も始まりました。これは、この世の人間の生き方を象徴するも

のと言ってよいかもしれません。しかし、人間として成長していくことを考えた場合、知られたくないことを隠していると大きなつけを払うことになります。

何でもいいのですが、一つ隠しごとをすれば、必然的に、いつもそれがばれないように行動しなければなりません。言い換えれば、態度が何となくぎこちなく（自分らしくなく）不自然になります。現実にもぐわぬこのような態度はイエスさまの生き方と対極にあるものです。彼は、ありのままの姿を人々に表した神さまだからです。イエスさまが、精力を傾けたのは、自分の生活をべールで覆うことではありません。その生涯に、人に見えない闇の部分は全くなかったのです。

「イエスは泣かれた」この痛烈な記述をしたのは、ヨハネです。イエスさまが公の場でも自分の感情を隠そうとはしなかったことがわかります。しかるべきときには、怒りをあらわしています。心を動かされ、人を哀れみ、共に喜び、共に悲しみ……。そのときどきの喜怒哀楽の表現は、福音書の著者が充分見て、書き記すことのできるくらい、はっきりとしたものだったと考えられます。

こうした激しい感情を自らコントロールする際に必要なのが、謙遜です。「憎むなら罪を憎みなさい。あなたがたは、怒りのうちに日が暮れることがあつてはならない。」と聖書は言い

ます。

これは、頭にくることがあっても、取り乱してはいけないという意味に解釈されています。怒り狂ってはいけません。笑ってこらえることです。などと理解してしまうのです。

怒りをぐっと飲み込んで感情を抑えたままではいいのですが、その反動からか、せっかくの自制をだいなしにしてしまうような行動を、人間は時としてとります。暴力です。また、直壊、相手に殴りかからないまでも、いろいろなと知恵をめぐらせて、相手に仕返しをすることもあるわけです。復讐という一種の暴力と言っていいでしょう。

力に訴えるのはもちろんのこと、もっともらしいかたちで相手にやり返すのも怒りをコントロールする上で、健全な方法とは言えません。謙遜であれば、自分は今どういう気持ちでいるのかを冷静に見つめることができます。毒々しい感情を抱いた自分を素直に認めることができます。わけです。

そういう状態であれば、「頭にきたぞ」ぐらいのせりふを吐いても大丈夫でしょう。自分の感情をしっかりと把握できていれば心配ありません。しかし、それと同時に、自分の怒りをかうことを相手が望んでいるのかどうか、つまり、相手にしてみれば、悪気はなく、親しみを込めてとった行動だったのではないかと自問することもできるのです。そして相手への対応が適

当でないとかわかったときには、ではどうしたらいいのですかとイエスさまに聞けばいいわけ
です。

謙遜を土台にした感情表現が大切なことは、神さまとの関係においても同じことです。

私たちはよく、自分の要求が満たされなかったり、頭にくるようなことがあったとき、本当
は自分自身の問題なのに、神さまを引き合いに出して相手に怒りをぶつけることがあります。
まるであなたのやっていることは、神さまの怒りを買うことで、自分はそれを警告してやっ
ているのだと言わんばかりに。しかし神さまを前にして怒りをあらわにしたままにしておく方が、
よほど危険なことではないでしょうか。それとも、小手先の技で神がだまされるとでも思っ
ているのでしょうか？

私たちの祈りは往々にして神さまが治めているこの世の惨憺たる現状を嘆くことに終始しが
ちです。それで神さまについて抱いている気持ちこそ素直に言い表したり、神さまとの関係にお
いて失望したことがあれば、それをぶついたりすることが、いつのまにかできなくなっている
のかもしれない。

親密な交わりのよいところは、自分の感情をぶつけても関係がぎくしゃくしないということ
はもとより、それによってお互いが成長するということにあるのです。

「お父さん」と呼べる神さまと私たちとの関係は、そういう信頼の絆が築けないほど、弱いものなのでしょうか？ それとも神さまの恵みを書き記した人から馴れ馴れしいと怒りを買うことを恐れているのでしょうか。あのイエス・キリストでさえ、失意の時には「どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と言っていることを思い出す必要があると思います。

これは文化的な影響もあるのですが、私たちは自分の感情を人に見せないように訓練されていくようです。これは驚くべきことではないでしょうか？

悲しいことですが、教会によっては、失意に打ちひしがれているときも微笑を絶やしてはいけなさと教えられているところがあるようです。彼らは、そのような苦しみが存在することさえ認めようとはしません。クリスマスチャンはいつも前向きで喜びに満ち、にこにこしていなければならぬと考えているふしがあります。

いったい何組のカップルが途中、けんかをしながらニコリともせず、会話の途切れたままで教会にやって来て、教会の入口にさしかかった途端、「ほほえみ」を顔に浮かべるのでしょうか。受付で、「元気ですか？」と訊ねられると、相も変わらぬ笑顔をつくり、「ええ、おかげさまで」と答える。毎週がこの繰り返しです。

罪をかかえたままでやって来て、自分のどろどろとした感情を打ち明け、助けといやしを得

る場所。教会とは本来、そういうところですよ。ところが、自分の本当の気持は極力、人に見せずに胸にしまい込んで、いつもにこにこしていることに価値を置こうとする、最近この傾向に拍車がかかっている気がします。

お互いがよく機能し合い、親密な交わりを深めている小グループでは、特にそうですが、キリストこそ、この世で最も偉大ないやし主です。しかし私たちはキリストをいやしの力を備えた方として見ていないのではないのでしょうか。

キリストによっていやしを受けるのと同じ要領で、医者に自分の病状を説明することはなさらないと思います。「例のあの病気にかかってしまったんです。」などと医者に向かって言うのでしょうか？ 考えられないことです。しかし私たちは日常、キリストのいやしに寄り頼むとき、往々にして「例のあの件ですが……」と言って切り出すものです。

自分はどこも悪くないとか、通常考えられるのとは別の場所に傷があるなどと言って、医者をだまそうとするのでしょうか？ もちろん答はノーです。また、「友だちの代わりで、来ました。私を診てください。彼を診察したことになりますから」などと言うのでしょうか。これも考えられません。

にもかかわらず、ひとたび教会に入ると、不信と恐れのかたまりになってしまふのはどうい

うわけでしょうか？ 私たちは、自分の本当の姿を相手に見せまいとします。教会は赦された者の集まりというよりは、完璧な人たちの集まりという印象を与えようと躍起になっているようです。

体裁を保とうとするこういつた試みは本来、人と人とか隠し立てすることなしに、心から交われる場としての教会を危機に陥れています。そこでは、現実は一桁上げにされ、見栄えのいい教会を築くことが第一の目標とされ、そのための課題は数限りなく、それに取り組む姿はまるで次から次へと送られてくるファックスを処理しているようです。

その一方で、本当の姿は知らないままできてほしい、よそ行きの顔をした自分を受け入れてほしいと願っているわけです。

キリストの名を口にしながら、私たちは罪や失敗を人に知られないように隠します。また、自分の不正を指摘され、それが、暴露されるかもしれないと知るや、キリストの名をだしにして自分を責めた相手を葬り去ろうとします。

スコットランドの詩人、サー・ウォルター・スコットは、謙遜さについてこう語っています。「ああ人を欺こうと思ったその瞬間、何と複雑な蜘蛛の巣を織ってしまったことか」つじつまの合わないままに、曖昧模糊とした態度をとってしまうと、相手からもそれなりにピントのは

ずれた反応が返ってくるものです。すると、ただでさえ、場違いの応答に対し、これまた、誤った受け答えをする。こういったことが繰り返されるうちに、しまいには、戦争が起るのです。そのときには、誰も何でこういうことになったのか覚えていません。

教会の中では、開かれた交わりが大切なことをパウロは強調しています。ピリピの教会に宛てて、彼はこう書いています。

「あなたがたが私から……見たことを実行しなさい。」（ピリピ四・九）テサロニケの教会にはこう書いています。「このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思つたのです。」（Ⅰテサロニケ二・八）コリントの教会に宛てた手紙を見てください。パウロの思案は、時を経て、更に深まつているのがわかります。

「そして、モーセが、消えうせるものの最後をイスラエルの人々に見せないように、顔におおいを掛けたようなことはしません……主は御霊です。そして主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（Ⅱコリント三・一三、一七、一八）

かつて私は、自由を告げ知らせるのみことばをことあることに引き合いに出したので、カリスマ的な教会においては、世間一般の人の美意識を逆なでするような傾向がありますが、ここに出てくる御霊という言葉で、それを正当化していたのです。

聖霊の力によって私は自由に自分の覆いを取り除くことができる。それは私が完璧な人間だからではなく、今や主の栄光を反映し、自分の内面が変えられているから、つまり休むことなく成長しているからだ。このことに気づいたのは、後のことです。

モーセは自分の弱さを隠すために顔に覆いを掛けました。自らすすんでそういう態度をとったのです。本来、そんなことをする必要のないことは明らかです。しかし、規律を重んじる社会の中で、行動しようとすれば、どうしても、人間の弱さからか（おそらく霊的経験がからむ局面ではとりわけ）、できるだけ良い印象を与えようとして、見栄を張り、自分のきたない部分は隠してしまふものです。

恵みは、律法が成就される場面場面に応じて異なったものが与えられます。

ヨハネは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したと述べています。（ヨハネ一・一七）

律法は正義を要求しますが、その正義を備えてくれるのは恵みです。律法を求められるもの

とすれば、恵みは与えられるものです。律法がもたらすものが重圧とすれば、恵みのもたらすものは安心です。律法によって囚れの身となった後、恵みによって解放されるのです。恵みとまこととは、光の中にあつて鮮やかに引き立ちます。

このような恵みを前にして、今更何を隠そうというのでしょうか？

「しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが、神にあつてなされたことが明らかにされるためである。」(ヨハネ三・二一)

覆いをしたままで生きていては御霊の提供する自由を味わうことはできません。御霊によって私たちは、赦され、覆いを取り払う勇気が与えられ、主の栄光を反映することができるのです。思いのままにそうすることができます。これは、決して私たちが完璧な人間に近づいてひとつとして責められることがなくなつたからではありません。そうではなく、私たちはモーセと違って「消えうせる」ことなく、神の似姿のうちに、いよいよ増し加えられ、成長しているからです。

神さまの計画の中で、考えられ、預言され、行われたことは全てその意味が明らかになります。ですから、自分を隠して生きようとする人にとっては、つらいことになると思います。心を開いて成長していくこと。それは主の贖いの足跡をしるしていくということです。

幼な子のように

「子どもたちを赦してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのような者たちの国なのです。」

イエスさまは、子どもについて、特別な心を持っていたようです。子どもについて触れながら、本当に大切なことを弟子たちに教えました。

「さて、イエスにさわっていたかどうかとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしなかった。イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。

『子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、はいることはできません。』そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。」（マルコ一〇・二三―一六）

子どもは人に危害を与えません。暗い裏通りに入り込んだときも、子どもに出会ふのなら心配することはありません。イエスさまが歩んだ道を歩み、イエスさまが生きたように生きるなら、世の中の人は、子どもよりもよほど危害がないと私たちのことを認めてくれるはずです。「わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。」(マタイ一〇・一六)

昔のことになりますが、私はイリノイ州で副牧師の職にありました。そこで木曜の朝、祈り会があり、女性の信者が集まります。あくまでも婦人の祈り会ということで、私は招かれませんでした。そこで私はその時間、託児所に行つて、子どもたちの相手をすることにしました。最初の日のことを私はいまだに忘れることができせん。託児所のドアを半開きにして顔を見せ、身をかがめながら「こんにちは、アーウィン牧師だよ。一緒に遊ぼうか。」と声を掛けました。

子どもたちの中のひとは明らかに怯えた表情を浮かべ、別の部屋へと一目散に逃げていきました。他の子どもたちはと言えば、それまでしていたことを続けているだけです。そうか、私が誰なのかよくわかつていないんだなと思つて、部屋に入り、子どもたちの集まりの輪の輪の輪まで歩いていき、もう一度「こんにちは、一緒に遊ぼう。」と声を掛けました。また、ひとり、

隣りの部屋へ逃げ出しました。明らかに怯えているようです。残った子どもたちはまるで「何か変な音がしたな。」とでも言っているかのように、自分のしたことを続けます。

ここまでくると、すこし腹が立ってきました。託児所の付添人は、何やら面白そうににやにや笑いながらこちらを見えています。私は、誰でもいいからひとり手をつかんで、肩を揺すりながら、「おじさんと一緒に遊びたいだろ？」 楽しいもんね。聞こえているよね。」と叫びたい衝動に駆られました。しかし、そのとき、御霊が私に働いてくれたおかげでハタと気づいたので、自分がこの子と同じくらいの年齢の頃、大人はどんな風に目に映ったのか、と。間違いないりません。大人は、おっかない巨人でした。

当時の私の全世界は大人のひざがしらのところまでしかなかったのです。一度として、会話がはずんだことはありません。何を話せたというのでしょうか。政治のことなど何も知らない。経済にしてもしかり。ただ大きいと言うだけで、ニッケル硬貨の方が、ダイム銀貨より価値があると思っていた。大人は私の行動には逐一注意を払っていたけれども、私の言うことには耳を傾けていなかったわけです。

そういったことを思い出しながら、私は床に寝転がって、「さあ遊ぼう。」と声を掛けてみました。すると、子どもたちは皆、歓声をあげながら私の上に乗っかってきました。ネクタイは

引っぱられるわ、髪はつかまれるわで、もう大変です。プライドなどどこかに飛んでいってしまいました。この日を境にして、大人の顔をして子どもと接することはなくなりました。部屋へ入ると、腹ばいになって床をバンバン叩き、子どもの仲間になりました。私はもはやおつかない巨人ではなくなつたのです。

子どものような純真さを持ったイエス・キリスト。彼を恐れる者は、誰もいませんでした。敵味方関係なく、自由に彼に近づいたのです。もしイエスさまが天国の栄光をひけらかし、いかにも御国の王らしい、堂々としているが、反面、人間味の感じられない声色で話したとすれば、パリサイ人やサドカイ人は、ここぞとばかり彼をやり込めたと思われれます。子どもたちはイエスさまにとてもよく懐いていました。イエスさま自身子どものような純粋さがあつたからです。ときの最高議会が計略をめぐらせて、彼を捕らえたものの、すぐさま刑を執行しませんでした。これは、彼らがイエスさま本人を恐れたからではありません。むしろ、イエスさまの人となりを知る群衆の反発を恐れたからと考えられます。

子どもは人をだます術を知りません。幼な子のようでありなさいとは、謙遜で、ありのままでないなさいということです。小さな子どもを見ていけば、彼らがどんなときに笑い、どんなときに泣くのか、すぐわかります。何が恐れているときには、その気持に応じた行動をとります。

ご存じの通り、子ども二人で遊んでいれば笑う、叫ぶ、走る、怒る、泣くといった動作を、めまぐるしく繰り返します。

黙って見ていれば、子どもは自分の遊び相手にさんざん怒りをぶつけた後、五分とたたぬ間に、何事もなかったかのようにまた一緒に遊んでいます。

私の子どもが五つくらいのことです。彼はおもちゃを自分の部屋から持ち出して遊ぶうとしました。持ち運んでいるうちに落としたり、ぶつけたりして壊しては困るので、それで遊ぶときは部屋の中でしなさいと前々から言っていました。でも、子どもは敢えて部屋の外へ持ち出そうとしたのです。後手に隠し、身をかがめ、人目を忍ぶような目つきをして、忍び足で歩いています。本人はうまくごまかしているつもりなのでしょうが、家の者の目には、丸見えです。考えることは全て顔に書いてありました。

子どもはだます術を知らないのです。ちょっと時間をくれば、私がいい方法を教えてあげるのに！

一時期、子どもは、手品のトリックに興味を持ちました。けれども、なかなかコツが飲み込めません。彼の手品を見ていれば、ものがどこに消えたのかすぐわかります。

「閉じた一手の中にあるに決っています。だまし方を知らないのです。」

子どもに匙で薬を飲ませなければならなかったときのことを思い出してみて下さい。堅く閉じられた口は岩のように動く気配はありません。いくら口を開けてと言っても知らんぷりです。そこからの親の知恵の見せどころです。「ほら、見てごらん。これはおいしいよ。一口食べてみるからね。」そう言つて、一杯すすつてみせます。とんでもなく苦い代物なのですが、そこはがまんして、あたかも豪華なディナーが始まったかのように笑みを浮かべます。これで安心した子どもは、口を開けます。そしてすぐ、大人になるということは、人に嘘をついてだますことなのだと思つてわけです。

もし、愛している人が自分をだましている、もしくは、だまそうとして何か企んでいると感じたら、私ならどう思うでしょうか？ 逆に相手がこちらをだます気はないとわかったとき、人間関係が好転するのでしょうか？ いずれにしても、人をだますことは、子どものような純真さと愛を体現したイエスさまがよしとするところではありません。

私は、子どもに話をして聞かせるのが好きです。子どもは最初のうちは少し疑つていても、すぐ、信じるようになります。「これは本当にあつた話だよ」と言えば、その通りに受け入れます。掛け値なしにものごとを受け入れることにかけては、子どもの右に出る者はいないのかもしれない。イエスさまはまさにこの子どもたちの姿で、私たちに神の国を受け入れるよう

求めたわけです。まず、問われるのは、私たちの信仰です。自ら受け入れること、神さまを知ることです。神さまについて知るはその後です。

子どもには邪心がありません。イエスさまが子どものように神の国を受け入れなければならぬと話すとき、例として、法の適用の対象となる齢に達していない人のことを引き合いに出しています。ある一定の年齢に達した後初めて子どもは社会に対する責任が問われ、法の適用を受けることになります。それまでは子どもは悪いことを考えようにも考えようがないからです。

神さまの恵みと赦しを子どものように受け取るとは、すなわち自分が子どもと同じく、今、邪心のまるでない、罪とは無縁の状態にいると認識することにほかなりません。神さまの赦しをそのように受け入れることは、決して簡単なことではありません。

私の場合、とかく、様々な規則を持ち出しては、自分を責めたり、人を糾弾する傾向があります。罪から完全に解放されたと言われてもピンとこないというのが、偽らざる心境です。

ただ、神さまに受け入れていただき、罪の赦しに預かりたいという願いはあります。自分が罪赦されること、そして子どものような無垢な心に造り変えられること。私のような牧師にももちろんこれは求められていることです。この二つのことを心から喜べたとき、初めて、人の

罪を強調したり、自分の望む方法で、人を導こうとするのでなく、心からその人のことを思い、痛みを分かち合い、仕えることで導く姿勢が身につくのだと思います。

おさがりのもの

「あなたがたの間で一番偉い人は、一番年若い者のようになりなさい。」

一番上の子どもは、総じてできのいいものです。統計的に見た場合も、彼らはものごとをそつなくこなし、人の上に立つことが多く、I Qが高いということがわかっています。また、弟や妹にくらべ、両親の愛情を絶えず受けています。早くから責任を持たされるためか、成熟の度合も早いようです。実生活でも年長の姉妹は、人の助けをほとんどあてにしません。知らず知らずのうちにそういう態度が身についているわけです。

年少の弟妹の場合、こうはいきません。まず、第一に兄や姉が自分に対し、少し大人ぶった態度をとってくるのに耐えて、うまくやっていかなければなりません。このコンプレックスは

一生つきまとうものです。また、兄や姉が大きくなって着れなくなったものを与えられ、飽きてしまったおもちゃや使わなくなった勉強道具を与えられます。つまり、持ち物の多くが、おさがりなのです。いつも兄、姉と較べられます。学校に行ってもひとり人間として見てもらえません。「ああ、君があの子の弟（妹）か」といった具合です。そして同じことをするとき、兄、姉を越えることを期待されてしまいます。彼らの人生の大半は、自分とは一体誰なのかを探るだけの長い長い旅となるのです。

年少者であることは、必然的に力や権威とは無縁の立場にいるということです。人を指導する資格がないのです。何でも自分からすすんでするのでなく、年長者がまず、最初にするのを見ていて、その後指示されるのを待つて腰を上げるといふ態度が助長されがちです。イエスマは「年の若い者」といふ言葉を使っていますが、これは今日使われているのとは違って、もっと深い意味を含んでいます。弟は概して反抗的になりがちです。自分をとりまく環境を、何とかして変えたいと思うのは、兄より弟の方です。

彼にとつて生活のあらゆるシステムが、自分を抑えつけるものと映ります。何か、大きなことをやってのけたとしても、全て自分の力でしたとは認められず、他の人の力を借りたと受けとられてしまいがちです。彼にとって、人生とはあまりおもしろいものではありません。生活

習慣は、なおさらのことです。兄は、生まれながらの権利がある上に、ことと次第によつては、一〇〇パーセント財産相続することも考えられるわけです。

これでは、どうして、弟にぐれるななどと言えるでしょうか。力が兄の側にあるのは歴然としています。身の保全を図るためのちよつとした行ないでさえ、生殺与奪の権を握る兄から「反抗的」とのレッテルを押しされてしまうことがあります。

これとは対照的に兄は今ある生活の中で、力が保障されています。生まれながらにして、当然のこととして、将来の地位が保障されています。彼らのモットーは「現状維持」（うまい具合にことが運ばれているから、下手にいじくるのはよそう）です。年長の兄、姉はいわば総督のようなものです。多くの権限が与えられます。この世の中で、最もうまみのある地位と言えるのではないのでしょうか。

しかし、イエスさまは年の若い者のようでありなさいと言っています。年長者に対しても、です。いかなる力も特権も、年下の者であるという自覚に基づいて行使されたものでなければ、イエスさまの生き方とは、相入れないものと言わざるを得ません。

今の世の中、教会も企業組織同様、年功序列が幅をきかせているわけですから、これは、現在の教会に対する神さまからの宣戦布告と考えてよいかと思います。

しんがりをつとめる

「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みななしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい。」

しんがりとなる。これはまさにしもべの生活そのものです。しかし、人間は本能的にそうした生活を拒否するものなのです。まだ、子どもが小さかった頃、夏休みには、約束どおり、家族総出で、ワゴンを運転して、野外キャンプへ繰り出すのが恒例のレジャーでした。私にとつては、仕事と余暇を兼ねたとてもいい経験となりました。

三〇〇キロほど運転すると、さすがにみな顔に疲れの色が見え始めます。そこで適当なところに車を止めて、休憩をとります。たいていは、どこにでもある近所の公園といった風情のところでした。ここで、子どもたちが飛び出すように車から降りて、我先へと公園の一台しかないブランコに向かって駆けて行って、「僕が最後、僕が最後」と叫ぶ場面を果して想像でき

るでしょうか？ ナンセンスです。実際、子どもたちは、そんなことをしませんでした。するわけがありません。人間の性として、自分が一番先になろうとするのは、当然のことです。

この年代の子どもは競争心が旺盛です。しかし、それも頑張つて勝ち取るに値するものがあり、手応えのある競争相手がいることです。ところが、相手がトップでなく、敢えてピリを目標にしているとしたら、つまり、自分が人より優れていると証明する気がまるでないとしたら、その競争は全く張り合いのないものになってしまうでしょう。

好むと好まざるとに関わらず、トップになるとは、相手を下に追いやることです。上に立つ人がいれば、必ず、踏み台にされる人がいるわけです。

ここで二つの選択が考えられます。自分中心に考え、上昇志向に徹するという選択と相手を愛し、しもべとして仕えるという選択です。聖書は、人によつては俗に言う貧乏くじを引く使命を担っており、私もそのひとりだと言っているようです。私自身は、きわめて自己中心的な人間ですから、心から、額くにはどうやら時間がかかりそうです。それにしても、神さまと議論を闘わしていると、時々、自分は何さまのつもりなのかと思うことがあります。（お恥ずかしい話ですが、自分の言動を正当化することにかけては、私の右に出る者はいないと思っています。）

兄弟同士の争い

世の中で広く受け入れられているから。それだけの理由で、実に多くの習慣が、何の疑いもなしに教会に持ち込まれてきました。

そのひとつが競争です。まだ子どものうちから私たちは人に勝つこと、一番になること、最も多く手に入れること、一等賞の山を築くこと。こういったことに価値を置く考え方に染まっています。学校は、生徒に対し、この競争意識を煽る場と化しています。本来、やりきれないほど退屈で長い人生を競争意識を植えつけることで、楽しいものにしようというわけです。確かに、動機づけの点では、理にかなったことなのかもしれません。切磋琢磨できる環境に置かれたとき、人間はものごとくに一生懸命取り組みようになるからです。しかし、キリストのからだにおける競争ということを考えた場合、そこにどういう意味があるのでしょうか？ このことを考えてみましょう。

ひとつのからだのある器官が他の器官と争っていては、からだとして生存し続けることがで

きません。からだはそれぞれの器官同士が互いに助け合うかたちで完全に機能してこそ健全なのです。また、そのように造られているわけです。競争というのは、その性格上、自己中心的な態度を強いるものです。これは、自分のことは二の次にして、人々のしもべとなったイエスキリストの生き方とは全く逆と言っていると思います。「競争」という言葉が持つ特色を二、三見ると、人間本来の姿が浮き彫りにされます。

競争が張り合いのあるものになるために、賞が必要になってきます。賞品というかたちで与えられることもあるでしょうし、また、卓越した知識があるということを証明する学位や肩書きといったかたちで与えられることもあるでしょう。

いずれにせよ、自分が一番であることの証明です。

まず、神さまの命じる通りに行動した報酬として、何らかの賞を求めるのは、聖書を誤って解釈していることになりません。聖書の教えに従った行動とは言えません。

「なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。」(ローマ一四・一七)

次に、他の人を教え、導く立場につこうとするのは、相手の益となるように、しんがりで務めなさいという教えにそむくことになります。相手の上に立つ地位を求めるのは、結局は、自

分のプライドを保ちたいからです。プライドを捨てて、砕かれた心が備えられれば、肩書きや昇進といったものは、意味のないことになるでしょう。

価値のある賞ほど、人はそれを獲得しようと夢中になります。そしてその競争が熾烈になる余り、不正がはびこりがちです。概して、競争によって優れた人間性が育まれるのは稀れで、むしろ、物質主義やおごりの虜になる方が多いように思います。

今思えば、私は大したことのない勝者でした。何か、人よりうまくできたときは、思わず、ほくそえんでいました。それがありのままの自分です。冗談を言い合う中で、ことあるごとに、自分が勝ったということをはのめかしていたのです。放っておけば、もっと嫌味な人間になっていたでしょう。

しかし、大したことのない勝者であるということは、反面、もっと大したことのない勝者、つまり、負け惜しみの強い人間だったということです。

私は、人に負けるとあらゆる手を講じて、自分を正当化しようとしてきました。偉そうに自分をやり込める人間に会うと、私の心は、嫉妬と怒りではちきれんばかりになったものです。言い負かされると、すぐさま、いつかはこの借りは返してやるとばかり、策略を練り始めました。そんなことをしているうちに、ある日、勝ったときも負けたときも自分のとってきた態度は、

イエスさまが人々と接した態度と、およそ、かけ離れたものではないかと気づいたわけです。

競争には、もうひとつの問題があります。それは、人間の行動の中で一番意味のないことに光を当て、評価の対象にしてしまっていることです。精神的な豊かさ、信仰、愛といったことに賞を与えることはできません。それを具体的なかたちで測ることができないからです。代わりに日曜学校に何人連れて来たかとか、伝道活動のためにいくら献金を募ったといったような、実際目に見える行ないを評価の対象とします。そういう活動に対して与えられる賞は、実際、行動を起こす上での格好の刺激剤となるわけです。

競争には全てルールがあります。しかし、誰がそのルールを決めているのでしょうか？ もちろん誰かしら、相手の顔色をうかがいつつ、一連のルールを提案する人がいるわけです。しかし、その提案されたルールというのは、得てしてその人にとって都合のいいルール、つまり、自分の思い描いたことが有利に運ばれるようなルールです。ひとりひとりの人生が、そんなことで決められてしまうこともあるわけですから、ずいぶんとひどい話です。

おそらく、キリストの体の健康ということを考えた場合、最大の問題は、競争が多くの敗者を産む一方で、勝者がほんの一握りではないということでしょう。永遠の命にあずかるということに関する限り、キリストにある者はみな、勝者なのです。

ひとりひとりの長所を伸ばすかわりに、負け犬意識を助長するような教会の活動は、どんなに立派な目標を掲げていようと、イエスさまの生き方とは似ても似つかぬものと言わざるをえません。

「教会に競争があってもいいじゃないですか。楽しんでやればいいし、それでみな、やる気があるのでから、何も否定される筋合いはないですよ。」人によっては、こう言い張ります。しかしひとつ、私が気づいたことがあります。勝者となることに慣れている人、それも自分で努力して成長したのではなく、生まれつき、心身ともに健康で、恵まれた人に限って、競争に固執するということです。このことが全てを物語っているのではないでしょうか。

私人としては、競争は、イエスさまによって価値のあるものに変えられると信じています。具体例を挙げてみましょう。

まず、賞を価値のないもの、あるいは、その場でだけ有効なものとして規定すること。（友だちと一緒にゲームで勝ち負けを競ったときの楽しさを想像していただければわかると思います。）これが第一段階。

運動神経の良さに価値を置かず、能力のいかにかわからず、誰もが平等な立場で楽しめるゲームを企画すること、これが第二段階。

競争心より仲間意識を育む環境作りに努めること。以上、第三段階。

そして第四段階としては、パウロがコリント入への第一の手紙一二章二二節から二五節で触れたように「比較的尊くない器官をことさらに尊ぶ」には、どういう方法をとればいいか、工夫をめぐらすことです。

このように注意していても、どこか、微妙なところで、ネジが狂って競争のための競争になってしまふことがありますから、折りに触れて状況を省み、そうならないよう努めることが必要です。「私が一番偉いから、君が最初でいいよ。私は最後にしよう。」こんなものの言い方をする人が果しているでしょうか？ 何とも嫌味たつぷりの言い方です。イエスさまが愛したのと同じように、人を愛するのなら、相手が自分を抜いてトップになり、満面に笑みを浮かべるのを見て、心から喜べるのではないのでしょうか。

相手の成功を願い、力を貸していれば、自分が一番最後になっていることにほとんど気づかないものです。

これこそ人に尽くすことを第一とした、しもべのなせる業と言っているかと思えます。「私たちクリスチャンがお互い、このように接したら、教会に何が起るでしょうか。」考えただけでもワクワクします。キリストのからだの一部分として、お互いにいたわり合うとすれば、ひ

とりひとりが、生まれ変わったように生き生きとしてくるものと考えられます。そういう雰囲気は、キリストの愛を模索している人の心に働きかけるでしょう。彼らは、何が原因で私たちがそんなにも生き生きとしているのか、知りたがるに違いありません。

人の心を捉えるのは結局は愛です。「クリスチャンは、本当にお互い愛し合っていますね！」以前は世の中の人からこう称賛されていたのです。このように評価されるのはうれしいものです。

弟子たちが、誰が、一番偉いかということで喧々囂々と言い争っているのを見て、イエスさまは、この世でなく、神の国で一番偉い者の姿を教え始めました。イエスさまに倣って、生きようとするならば、生活のひとつひとつの場面で、修正を迫られることとなります。兄弟に一泡吹かせてやろうという野心は、神さまの前に碎かれる必要があると思います。

家畜小屋の中で

「あなたがたすべての中で一番小さい者が一番偉いのです。」

しんがりの者に与えられる賞というのは思いつきません。彼らは賞がもたらすような榮譽とおよそ無縁の生き方をしています。喜んでしんがりになるのは、よほど気持ちにゆとりがあつて、相手が自分より先に行くのを余裕をもって見られるときだけです。少しでも面子を重んじるなら、何もすんでしんがりを務めようとはしません。何を置いても、人に認められたい、自分の達成したことを褒めてもらいたいという欲求がある限り、自分がしんがりになるようなことは拒むはずです。

自分が成功をおさめることに人一倍こだわるリーダーは、目下の者を自分の思い通りに動かすには、賞や名譽を人參代わりに使うのが有効であることをよく心得ています。教会の「威厳に満ちた政治家」はこれまで、自分の力が認められそうな方向へと事を運ぼうとして、臆面もなく、妥協を重ねてきました。

自己顕示欲があるからこそ競争があるわけです。ですから、ひたすら人に認められようとする意欲は、イエスさまを人々を救おうと行動へ駆り立てたエネルギーとその質において、異なると言わざるをえません。

イエスさまは、人からの榮譽を受けようとはしませんでした。名譽を追い求めたり、人から認められようと躍起になる人間の生き方が、イエスさまの生き方から大きく逸脱したものであることは明らかです。私たちはこのような生活に慣れ切ってしまったて、これ見よがしに、活動実績やこれまで受けた表彰を並べてています。企業と何ら変わるところがありません。

クリスチャン・フェスティバルや集会での教会紹介を聞いてみると、うんざりすることがあります。自分の教会を必要以上に良く印象づけようという意図が見え隠れしているからです。クリスチャン・カレッジが名誉学位をたてに、献金を募ったり、そこまで生々しくなくても、何らかの謙礼を集めたりするのは、嘆かわしいことです。大学によっては博士課程とは名ばかりで、金もうけを目的とし、学位を受けた者に対して、それを恩にさせて本を売りつけることもあります。また、教団によっては、広報担当者が、自分の教団のピラミッド型の職階制を社会的に認知してもらうことを仕事のひとつとしています。

お恥ずかしい話ですが、私自身、学位授与計画をめぐって仕事上、こういった人たちと関係

したことがあります。計画というのは、相手の弱みを利用して、自分たちの思い通りになるよう便宜を図ってもらうものでした。

私たちはなぜ聖書の警告を無視して、いつまでたっても栄誉をだしにして、人を欺こうとするのでしょうか。また、自分のこととなると人に認められた、認められなかったで、一喜一憂するのでしょうか？ この間に対する明確な答が見つかっていないことは、考えてみれば恐ろしいことだと思えます。

人目を意識して行動することについて、イエスキスは、どのような見解を示しているか、見てみましょう。

非常にはつきりとした態度をとっているのがわかります。

「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」(マタ

イ六・一・一二)

イエスキスは、施しをするときも秘かにするように命じています。また、もう少し後の節で

は、天の神さまが充分報いてくださるよう、隠れた所で祈りなさいと命じています。しかし、ここで大切なことは、報酬は人の手ではなく、神さまの手に委ねるということです。人間が人間を評価する制度に何の疑問も持たなくなってしまうと、栄誉は天の神さまから与えられるということが理解できなくなってしまうます。なぜなら、この世の制度が栄誉を与える対象としているのは、あくまでも目に見える業績であって、内面的な人間性ではないからです。

パウロはコリント人への第二の手紙一〇章一七節、一八節で、はっきりとこの区別をしています。「誇る者は、主にあつて誇りなさい。自分で自分を推薦する人でなく、主に推薦される人こそ、受け入れられる人です。」

イエスさまが明らかに人々から賞賛を浴びる場面が聖書には二箇所ありますが、これを見ても人間のいう栄誉などいかに当てにならないものかよくわかります。

ルカの福音書二章五二節にはこうあります。

「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人ともに愛された。」しかし、後に彼をあざけり、そんな人は知らないと言ひ、イエスさまをして「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と言わしめるのは、彼の成長を喜んだこの人たちなのです。マタイ福音書二一章のエルサレム入城のくだりにも記録されていますが、この後も群衆は「ホサナ」と叫びつつ、賞賛

の嵐を浴びせたのですが、イエスさまを十字架につけると声を大にして叫んだのも同じ人たちでした。どんなかたちであれ、人から受ける栄誉ほど空虚で移ろいやすいものはありません。私たちが求めるのを許されている賞がただひとつあります。この賞は人が与えるものとは違って、時間がたつと輝きを失うものではありません。それは、「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠」です。(ピリピ三・一四)

「上に召す」とは、しもべになりなさいという呼びかけにほかなりません。

宿屋が満室のときは……

一番小さい者とは、どういう人のことを言うのでしょうか。忘ける者で、実社会に適應できない何事にも無気力な人、社会的に低く見られている、そういった人たちが、気がついたときには、地下室のようなところに收容されていて茫然としている……。そんな光景を思い浮かべる人もいるかもしれません。しかし、そういうことではありません。

イエスさまの生き方では、一番小さい者に、自ら選択してなるのです。相手の幸せを心から願ひ、相手の成長のために、できる限りのことをする。そうした献身的な努力を続けるうちにたまたま気がついたときには、いちばん最後に来ているというわけです。

この世でトップの座に昇りつめることができるのは、ほんの一握りの人にすぎません。ある人は途中、決定的な傷を負い、また、ある人は、やる気を失います。しかし、仮に、みな、有能な人間だとしても、トップのポスト数は非常に少ないので、切れ者といわれている人や、本当はそのポストにふさわしい人さえも、いつのまにか淘汰されていくのが普通です。富や名声という名の宿屋は、たどり着いたと思つたらいつも満室というのが現状です。条件のいい職には応募者が殺到し、いい家の値段は目をむくほど高いものです。部屋はもうないのです。

しかし、それ相応の部屋がありそうところがありません。馬小屋と呼ばれるところです。小さくて、汚く、動物のすみかとなっていますが、神の国では一番偉いもの、しもべとしてこの世に仕えたイエスさまはここで生まれたのです。

しもべとなるのを厭わなければ、充分、部屋に空きはあるようです。先を争って馬小屋に入ろうという人はあまりいないからです。もし、人を心から愛し、仕えたいと思うなら、いつでも部屋は見つかるものです。この世の誉や数々の賞とは無縁かもしれません。しかし、多くの

部屋が用意されているのです。

マリヤは、御使いから、救い主を身籠ると聞かされたときも光栄なことと思いましたが、謙遜な態度を崩しませんでした。おそらく、そんなときも、馬小屋の持つ意味を、彼女はよく理解していたのだと思います。

マリヤは言います。

「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。

主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです。

ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。

力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。

主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力のある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、

飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。

主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。

私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」(ルカ一・四六―五五)

私たちの知るイエスキさまは、卑しい場所、馬小屋にいるイエスキさまです。貧しい人々と共にいて、しもべとなり、謙遜で、人々の模範となりました。子どものように純粋で、年の若い者のように清新で、最後の者となり、一番小さい者となりました。彼の行くところには、いつも彼に従おうとする者の姿があります。(ピリピ二・五一一)

力による支配でなく

「キリストは……神のあり方を捨てることができなとは考えなかつた。」

パウロはピリピの教会に宛てた手紙の中で、イエスキさまの人間としての姿についてかなり掘り下げて考察しています。彼は、イエスキさまの神の国についての教えで聞いたのと同じ言いまわしをいくつか使っていますが、一方で、新しい見方も提供しています。「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができなとは考えないで、

ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」（ヒリビ二・五
一七）

この節を文字通り解釈すると、イエスさまは神の右に座して当然の方であるのに、敢えて、力づくで、神の国を継ごうとはしなかった、ということです。

今日、莫大な金額が軍備につき込まれていますが、イエスさまは、人間をとても尊い者ともみなしていたので、力を行使して人をはずかしめるようなことはしませんでした。御使いの軍勢を呼んで十字架から救い出してもらい、自分もひどい目に合わせた人々に復讐するだけの力はあつたのです。

しかし、敢えてそうしませんでした。また、外を歩きまわりながら、すれちがう人の首根つこを掴み、自分の言うことを聞かないとこの世が滅びるぞと脅かすことも、しようと思えばできたわけです。しかし、そうしませんでした。つまり、イエスさまは私たちの自主性の芽を摘むようなことは、決してしなかつたということです。

マタイはイザヤ書を引用して、イエスさまがいかに寛容な方か示しています。

「これぞ、わたしの選んだ、わたしのしもべ、

わたしの心の喜ぶわたしの愛する者。

わたしは彼の上にわたしの霊を置き、

彼は異邦人に公義を宣べる。

争うこともなく、叫ぶこともせず、

大路でその声を聞く者もない。

彼はいたんだ葦を折ることもなく、

くすぶる燈心を消すこともない、

公義を勝利に導くまでは。

異邦人は彼の名に望みをかける。」(マタイ二二・一八一―二二)

いたんだ葦、くすぶる燈心というのは独特な言いまわしで、これに似たことわざのようなものはありません。

最も近い意味としては、「人が失意に打ちひしがれている時は、ますます落ち込ませるようなことをせず、かすかにほのめく、希望のともしびを探し、それを煽って大きな炎としよう。」といったところです。

ボーイスカウトにいたとき、私は、火打ち石を使ったり、木の枝をこすりに合わせて火を起すという経験をしました。「ほくち」という一握りほどの可燃性の強い材料を、火うち石が出

す火の粉のふりかかりやすいところに置きます。また、こすり合わせている枝のそばに置くこともあります。すると枝から出る熱でほくちは、くすぶり始めます。

この作業を迅速にしていると、ほくちは燃えあがります。わずかの火の粉であっても、こな少しではどうしようもないとぶつぶつ言いながら、足で踏み消してしまふ人は誰ひとりとして見たことがありません。むしろその逆で、ほくちを取り出し、手のひらを丸めて囲み、息を吹きかけ、あらたに酸素を供給し、火を燃え上がらせようとします。この光景は、イエス・キリストの私たちへの接し方を彷彿させるものです。私たちの場合、お互い、ちょうどこれと逆の姿で接しているような気がします。

大学で教えるものの常として、学生を試験やレポートの成績によって評価することは避けて通れません。学生を教える中で、これは私にとって一番気の重い仕事です。現在のシステムによれば、六五パーセント以上という評価基準に達しない学生は、継続受講できないことになっています。どこか別のクラスへ行かなければなりません。

大変残念なことです。私たちが実社会で人のことを話題にするときも、意識的にせよ、無意識的にせよ、こういった格づけが行われています。自分で勝手に規準を設けておいて、相手がそれを満たさないと見るや、つきあつていくのを拒否してしまふことがよくあります。教会

でも、そのときどきで、最低限これだけはと定めて、教義上の行動規定があつて、それを八割以上満たしていない人に対しては、匙を投げてしまふ傾向があります。

私たちは、疲れ、重荷を負つた人に対し、声に出す、出さないの差こそあれ、非難するような行動をとることが多々あります。

イエスキリストの優しい招きとは何という違いでしょうか。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

イエスキリストは、私たちの中に、ほんのわずかな炎しかないからといって、それを足で踏み消すようなことはしません。いや、私たちを引き上げ、小さな火が燃え上がって、私たちが罪清められるまで、聖霊の風を吹きつけてくださるのです。

自分のために手段を選ばなくていいのですか

キリストが神の国を捨てることができなかつた、と述べている。ピリピンへの手紙二章五節、八節には、ともすれば見過ごされがちな大切な意味が含まれています。(といても、あくまで附加的なもので、本来的な意味にとつて代わるものではありませんが……)それは、キリストが欲望のとりこになつていないということです。

目標が崇高で、永続的な価値があるときほど、それを達成するに当たつて、度を越した方法を採用しないようにするのは、難しいものです。「目標のためには手段を選ばなくてもいいのですか」という問いかけを私たちは何度耳にしたことでしょうか。

確かにイエスキスさまには、最も崇高な目標がありました。彼なら、それを達成するのに必要な手段は、どんなものでも使つてよかつたはずですが、しかし彼は、やみくもに欲望に流されるのを拒んだのです。企業での実務経験のある人なら誰でも、権謀術数の限りを尽くした熾烈な出世レースや賃金交渉でのかけ引きと無縁ではいられなかつたと思います。

昇進・昇給の陰には、誰かの犠牲があるのが普通です。教会でも、誰かしら、他の人の目標達成のための担保や踏み台にされているのです。伝道のように、クリスチャンの社会では、喜んで受け入れられるような目標の場合でも、例外ではありません。

勝者の使う方法

たいていの伝道活動は、腹をすかせたサメがやっと捕らえた獲物をむさぼり食う姿に似ています。あちこちころげ回って、血だらけになり、そうすることで数字への飢えを満たそうとしているのです。このような行動の基となっている考え方を挙げてみるとこうなります。

「大切なのは、相手に悔い改めの祈りをさせることです。それに至る過程など大した問題ではありません。とにかく言葉に出して、悔い改めるのが大事です。相手が、悔い改めの祈りとはどういうことなのか、よくわかっていなくても構いません。悔い改めてもらわないことには何も始まらないのです。」

その結果、私たちは、自分自身充分な愛のないままに、あらゆる手段を講じて、罪人に近づこうとします。私たちは、セールスマンのように、相手がその気になるまで訪問の理由を明らかにしようとはせず、相手が興味を示すやいなや、頼まれもしないのに話をまとめてしまおうとしてはいいのでしょうか。この儀式が終わると、しかるべきトラクトを残し、相手の人生から姿を消してしまつてはいませんか？ 誰かひとりを悔い改めさせて、その人が更に他の相手に働きかけたり、逆に、相手の方から、その人に興味をもって話しかけてくるという、ねずみ講のようなことをもちろんしていいのでしょうか？

今日、説教者が講壇から改心した人はいないかと問いかける光景はお馴染みのものとなりましたが、これに似た状況が聖書に一度だけ出てきます。ペンテコステの日の出来事で、ペテロの説教が終わると三千人もの人がキリストを受け入れたと記録されています。ただ、違うのは、ペテロの方からは何も呼びかけなかったが、聴いていた群衆の方からは呼びかけがあったということです。これは実に注目すべきことです。今日の教会とまるで逆です。

今日、聖書が人の心を動かすかどうかということとは、問題となっておりません。つまり私たちは、自分勝手な方法で相手を動かそうとしているわけです。伝道者たちは、最大限の人たちを講壇に導き出すための秘訣を互いに情報交換している観があります。私は、生涯の大半を教会

で過ごした関係上、人を欺く手口については、ありとあらゆるものを目にしてきた気がします。

こうしたことを挙げつらうのは、天に向かつてつばを吐くようなものですが、少し見ていただきたいと思います。今まで、その日語られたメッセージの内容とはまるで関係のない言葉が説教の最後になって出てくるのをいやというほど耳にしました。感情を高ぶらせることだけを目的にした、あらかじめ用意された臨終のための説話に続いて、例の「前に出て来てください」という呼びかけが始まります。

頭を垂れ、目を閉じる中でオルガンの優しい音色がゆるやかに響いてくる。そんな現世離れた環境に置かれれば、正常な判断力を持つことはできなくなるおそれがあります。

このようなムードたっぷりの環境に置かれると、理性的な判断力とは関係のない、心理的な力が働いて、ありのままの姿が見えなくなることが考えられます。

私は昔、ある人に福音を語ったときのことを思い出しました。そのとき、同時に、イエスさまを信じ、従うことをその人自身でよく考え、決断できるよう、自分としては、機会を与えていたつもりだったのです。しかし、彼から出た問いかけを聞いて、私は愕然としました。そして彼が今までどんな牧師、伝道者に会ってきたのか、思いをめぐらさずにはいられませんでした。彼はこう訊いてきたのです。

「もし私がノーと言ったらどうします？　それでも私を友と呼んでくれますか？」

イエスさまの教えに則った伝道は、個人の自由を否定したり、軽く見たりするものでは決してありません。その人の選択眼を奪うのではなく、養うものです。

また、イエスさまの生き方に倣った伝道は、人をだましてクリスチャンにするような方法を断固として拒否します。神は真実で、今も生きておられる方です。途中、人を言いくるめたり、嘘をついたりする必要のある伝道、秘密裡のうちにことが運ばれる伝道は、イエスさまの生き方に倣った伝道とは、対極にあると言っていると思います。

イエスさまの伝道が焦点を当てるのは、教会の教義や活動方針といった付加的なものよりもむしろキリスト御自身なのです。この伝道は、私たちひとりひとりの命が神さまによって与えられたものという認識のもとに展開されるものです。それには、私たち自身を飾らずに、すすんでさらけ出すことが求められます。たとえ、罪人に対してでも。人々を利用して何かするのではなく、贖うために来たイエスさまは、十字架につけられようという時も、やはり人々を利用しようとはしませんでした。その気になれば、悔い改めたザアカイを呼ぶこともできたわけですが、金持の若者に助けを求めることができたはずで、彼を王にしようとした、彼の養った群衆を動かすことができたはずで、いとまたやすくできたに違いありません。しかし、最も崇高な

目的に身を献げたイエスさまは、同じように最も崇高な手段に殉じました。彼を動かした力は愛と従順です。盲目的な野望ではありませんでした。

先生はね

「イエス・キリストは……ご自分を無にして……」

彼は自分自身をなき者とされました。どこまでも謙遜な方でした。名声と外見も彼にとってはどうでもよかったです。

私は父が頭を振りながら「何で今まで気がつかなかったんだ。ここに力がある。これが全てだ。」と何度も何度も繰り返してぶやいていた姿を鮮明に覚えています。たぶん、このみことばが私の脳裏に焼きついており、また、同じくらい居心地の悪い思いをしているのは、このためでしょう。居心地が悪いと言ったのは、他人からの評価と格好のよさが私にとってとても重要なことだからです。

格好のいい人とお近づきになって、格好いいところを見せて、格好よく宣伝されて、格好い

いとところに住んで、格好のいい車に乗り、格好いい服を着る。しかしイエスさまは、自分自身をなき者にしていたのです！

今日、アメリカで、イメージ作りというものが盛んにもはやされ、一大マーケットを形成しているようです。

大統領選立候補者に限らず、人から明確な支持を取りつきたい者の多くが、ただ見栄えを良くするためのために多額の金をつぎ込んでいます。

自分のところの製品を愛用しているお客さんがあなたのまわりにもいます。と、これだけのことを知らせるために企業は、莫大な額の広告、宣伝費を使い、いいイメージ作りに躍起となつていきます。消費者の側としては、そのイメージにだまされて、製品の質をよく見極めずについていってしまうというわけです。

アメリカ人にとってイメージは何よりも大事なのです。イメージや名声といったものは、人を支配し、自分にとって都合のいいように動かすための単なるひとつの手段でしかありません。イメージ作りに携わっている人は、そのからくりを知っているので、やましい気持ちにかられることが多いようです。少なくとも私のような牧師の場合、それは確かです。もし私が、「こ

んには、牧師のゲイル・アーウィンです」と切り出したとします。すると相手は、たちまち身構えてしまうものです。誰かの悪口を言っていた人は、急に口をつぐむか、話題を変えるでしょう。雑誌を読んでいた人は、あわててそれをふせるでしょう。誰でもどこかしらぎこちない態度になるのが普通です。

今言ったような自己紹介をしなくとも、黒のスーツに、白いシャツといたいでたちでいれば、それを見た人は、私が、野球の審判か、葬儀屋か、牧師のいずれかだろうと、すぐ見当をつけるにきまっています。結果は同じことです。

また、いかにも聖職者が出しそうな声で一言一句、仰々しく話したとすれば、そんな話し方をするのは、牧師くらいのものだとたちまち悟られてしまうでしょう。またしても、相手に警戒の念を起してしまうわけです。

ロサンゼルスからダラスへと向かう飛行機の中で、ある電子部品製造会社の社長とイエスキリストの福音について語る機会がありました。彼は、私の話に感銘してくれて、もう一歩でキリストを救い主として受け入れるというところまで来ました。そのとき、彼は話を止め、少し間をおいてから「ところであなたの仕事は何ですか」と尋ねたのです。私は牧師だと答えました。すると相手の頭の中の車輪が回転を始めました。自分はいったいこの牧師に何をしゃべ

ってきたんだろうと思ひ返しているわけです。

するとその話を聞きつけた、私のもう片隣の女性が「あら、牧師さんですか」とうれしそうな表情を浮かべて、話しかけてきました。彼女は前から牧師に会ってきいてみたいことがあったようなのです。実際、ピンの先にどれくらい多くの天使が座っていたのといったようなことを彼女はきいてきました。先の会社社長との話は、ここで、「正常」に戻りました。その場の気まずい空気がこの彼女の問いかけでほぐれたのです。

私はどうも理解に苦しむのは、評判の良い聖職者が、その著書の中で、牧師たる者、いつも牧師らしくしていなければならぬと奨めていることです。信者に軽く見られて慣れ慣れしく近づかれたり、気楽に会いにこられたり、ファーストネームで呼ばれることのないようにと、それはもう熱心に説いています。信者には、牧師という職務を尊敬し、天から授かった職としてそれをたたえるよう教育すべきだ。これらの本に書かれているのは、大体、こんなことです。道理で、多くの孤独で、いつもいらした牧師に、行く先々で会うわけです。

しかし神さまは、私たちがそんな生き方を望んでいません。ルカは、イエスさまもそのような生き方をしなかったと言っています。

「さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞くこうとして、みもとに近寄って来た。する

とパリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」（ルカ一五・一―二）

イエスさまは、自分の名声に優を付けるようなことを敢えてし続けました。彼は誰かと行動を共にするにあたって、人目を気にすることはなかったようです。

元売春婦は折あるごとに彼の集団についてきました。イエスさまに相手の益となることならば、どんなことでもしたのです。たとえ彼自身を割りをくうことになっても。

「さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家にはいつて食卓に着かれた。すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油のはいった石膏のつぼを持って来て、泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして香油を塗った。

イエスを招いたパリサイ人には、これを見て、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれて、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから。」と心ひそかに思っていた。（ルカ七・三六―三九）

優等生のパリサイ人は、女性が人前で自分の身体に触れることさえ拒んだでしょう。ここに

出てくるような女性についてはなおさらのことです。しかし、この場面で社会的に覚えのめ得太くない女性が、イエスさまの足に口づけします。仕事柄、こういう方法でしかできないのです。

イエスさまはそれを責めませんでした。責められたのは、人を裁こうとしたパリサイ人の方です。イエスさまは自分がその場に着いたときから一心不乱に足に口づけし、香油を塗り続けた女性を見て頷きます。彼女の心の痛みを知り、また、悔い改めていることを知っていたからです。

私のある友人は、外国の大都市に住んでいるのですが、そこでは法律で売春が認められています。売春宿では女性は客の指名に備えて、部屋で待機しています。

彼は信望の熱い牧師でしたが、神さまは敢えて、ここにいる女性と重荷を分かち合いなさいと命じられたようです。彼女たちのような職業についている人のことを誰ひとりとして気にかけないことを彼はよく知っていました。その気になれば手を貸せた人であっても、そのような場所に近づこうとはしませんでした。自分の名に傷がつくのを怖れてのことです。彼は、売春宿に入って、そこにいる女性たちと話し始めました。最初のうちこそ、気をそろうとしていた彼女たちでしたが、やがて、彼が来たのは身体めあてではないと気づきました。そして彼と

イエスさまについて、その真実の姿について話し合うようになったのです。

この牧師は、自分の名声に傷がつき、世間に対するイメージが悪くなる危険をもともしませんでした。全て、神さまから授けられた愛という重荷のゆえです。イエスさまがその場にとらややはり彼と同じことをしたと思います。人は、この世では旅人です。それならば、この世の成功を約束することに対しては、どんなものであれ、固執する必要はないはずです。名声であつても、財産であつても。

富について

パウロは、コリント人への第二の手紙八章九節で、イエスさまが自分自身をなき者としたことは、具体的にはどういうことかについて、かなり深い洞察をしています。

「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの

「貧しきによって富む者となるためです。」

「貧しきという言葉について、精神的な面での貧しきと解釈するにせよ、経済的な面での貧しきと解釈するにせよ、人間本来の姿を考えると、ここで言われていることは画期的なことです。」

イエスさまの本当の姿に関して、このように新たな見方を提供されると、なぜ彼が金持ちが神の国にはいるよりは、ラクダが針の穴を通る方がもっとやさしいなどと言ったのが、明らかになってくると思います。

イエスさまと同じように生きようとした場合、富を持つことほど障害になることはないのです。

富んだ者は、そうでない者より、捨てなければならぬものが多いからです。

イエスさまが金持ちの若者に話したときのことです。

彼は、彼なりに正しい生き方、考え方をしようとしていました。しかし、イエスさまは彼の生活が所詮は財産を軸に回っていることを見抜き、最後にこう言います。

「帰ってあなたの持ち物を売り払って、貧しい人たちに与えなさい。」といった、どれくらいの人が、(私も含めてですが)、貧しい人たちの助けになるために裕福になるのだと言いながら、富に対する欲望を正当化してきたことでしょうか？ 立派なせりふを吐くわりには、少しでも

人のために力を提供したいと申し出てきたためしがありません。そうです。イエスさまは、人の心をよくご存じでしたから、御自身についても誘惑にどう対処するのが最もいいのか、心得ていました。イエスさまは「帰って、持ち物売り払って、神に与えなさい。ただし、私のいう組織を通して」などと教えていません。また「あなたの持ち物売り払い、神である私に与えることによって、愛と献身を示しなさい。」とも言っていない。

金持ちの若者は、その他のことについては、何ひとつとして非の打ちどころがなかったようです。おそらく、人々に愛される人になるためには、ひとつだけ足りないものがあつた。それをイエスさまが教えたのだと考えられます。しかし、イエスさまは金持ちの人全員に、あの若者に言ったように、持ち物全てを売り払って、貧しい人に与えなさいと命じたわけではありません。相手の宝と心がどこにあるかということについてイエスさまは熟知していました。

彼は富について、自分の言うべきことは、相手の感情を害するのを覚悟で、はっきりと言いました。時には、弟子たちから理解されず、時にパリサイ人からは、反発にあいました。パリサイ人は、自分たちに財産があるのは、神さまに気に入られているしであつて、人々が貧しいのは、神を不快な気持ちにさせているしだと考えていたからです。イエスさまは、常に世の中の価値規準をひっくり返してみせました。

「さて、金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれます。」」
(ルカ一六・一四—一五)

人間があがめるものは、神さまの嫌うもの、私たちの社会システムに対する何とも大胆な告発です。しかし、イエスさまは、人間の墮落した姿と対極にありながら、同時にその人間を贖う方でもあるのです。イエスさまは、一見相反するような価値観についても適切なかたちで、優先順位のつけられることを教えてくれます。

「先生。私たちは、あなたが、お話しになり、お教えになることは正しく、またあなたは分け隔てなどせず、真理に基づいて神の道を教えておられることを知っています。ところで、私たちが、カイザルに税金を納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」イエスはそのたくらみを見抜いて彼らに言われた。「デナリ銀貨をわたしに見せなさい。これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。」彼らは「カイザルのです。」と言った。すると彼らに言われた。「では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」(ルカ二〇・二一—二五)

金銭は「神に我らは頼る」と刻印があろうとなかろうと、あくまで皇帝カイザルによって仕切られるものです。この世のものです。金銭を求めて人は東奔西走するのです。その意味で、人間の欲望の象徴と言ってよいかと思います。

今日、「もう少し」という欲求に駆られて親は共稼ぎをしたり、副業に精を出したりします。家庭の生活水準を少しでも上げたいという願いの表れです。

しかし、これも度を過ぎると、子どもから一番素晴らしい賜物を取り上げることになります。親自身のことです。家族のそばに、愛する人のそばにいてあげるために、あえてつましい暮らしを甘んじて受け入れる。今の世代の人には、そうなっていたいだきたいと思います。

貨幣と違って、人間は神さまの責任の範疇です。私たちには神さまの名が記されています。神さまは、思い描いた通りに私たちを創りました。ですから、私たちは、神さまに自分自身を献げるべきです。キリストが御自身を貧しくされたのは、劇的な舞台効果を演出して、私たちをあとと言わせるためではありません。また、自分は、そういうこともできるのだと力を誇示するためでもありません。そうではなく、私たちの益となるように御自身を貧しい者とされたのです。彼の貧しさによって私たちが富む者になるためです。

大きな納屋を建てる

私たちが生活の場面、場面で決断を下すとき、ともすれば優先順位を見失ってしまいがちです。ここでは、教会堂の建築を決める際のことを考えてみたいと思います。

ご存じの通り、教会の様々な建物は、初代教会にはありませんでした。それを建てることは、イエスキマが命じたことではなかったからです。建物はそこに人の魂、神さまを求める切実な思いが吹き込まれて初めて、イエス・キリストの姿と和合したものとなるわけです。

まず、どこに建てるかを決めるに当たっては、その場所に抵抗なく足を運べるのは、社会の中でどの階層に属する人かといったことを考慮に入れるのが普通です。その後、建築様式を決めにかかります。このときは、会堂内の雰囲気になじめるのはどういった人たちかといったことを考えるわけです。各々の選択で人数が絞られていきます。

また、礼拝に使う儀礼式文を選ばなければなりません。ここでも、誰と一緒に礼拝するかという点が問題とされ、決断が下されます。服装規定、指定図書、会則、規律、こういったもの

を選定していくたびに、教会に米られる人の数はますます絞られていくわけです。

イエスさまが全生涯をかけて私たちに訴えたのは、こういう制限を取り払うことではないでしょうか？ 疲れた人、重荷を負った人を両手を広げて歓迎したのは、他ならぬイエスさまでした。ですから、そうした人たちが教会に来ようとしているのに様々な規定を設けて制限してしまうとすれば、どんな理由であれ、イエスさまの生き方から遠く離れてしまうわけです。

会堂建築にあたって、いろいろなことが決められるわけですが、どうしても理解に苦しむ習慣があります。「イエスさまは最良の建物に値するお方だ」という趣旨の発言がなされることです。しかし、ここで忘れてはならないのは、イエスさまの生き方を十分理解し、それを自分の人生において実践に移して初めて、おほろげながら何が、キリストにとって最良なのかわかってくるということです。そのような姿勢がなければ、ただイエスさまに恩着せがましく、物質面での豊かさを押しつけることになってしまわないでしょうか？

イエスさまは、栄光を自分自身に帰する生き方を否定していたことを今一度思い返してみる必要があると思います。口とは裏腹に本音は「私たちこそ最良のものに値する」と言っているような気がするのですが……。

イエスさまの福音を自分に都合の良いように解釈して、教会収入の大半を、人々にではなく、

関連の施設の建物につき込む。私たちは長いことこういうことを続けてきたように思います。教会とは縁のない世の中の人が見たら、きっと、「自分勝手な偽善者」と言つて私たちのことをつるし上げるのではないでしょうか？ 私たちは、この世にあつては旅人です。そう頭ではわかつていながら、助けを必要としている人を見て見ぬふりをして、莫大な時間と労力とお金を、物質的な価値しか認められない建物につき込むのは一体なぜでしょうか？

会堂の建設計画をめぐつて、教会内で意見が割れたとき、私たちひとりひとりが自分自身に問いかけてみる必要があると思います。

会堂ができて、自分は今まで以上に人に仕える人間になれるだろうか？

人の上に立つて、あれこれと口出しすることにならないだろうか？

この会堂が立つて、自分が人に模範を示せるとすればどんなことだろうか？

見栄えのいい会堂の中に置かれても謙遜でいられるだろうか？

子どものように純粋な気持ちでキリストに従えるだろうか？

この会堂は、自分たちの強い欲望の産物ではないのか？

もし、全額自分の財布から出さなければならぬとしたら、それでも建てたいと思うだろうか？

世間の人はクリスチャンが、このような見栄えのいい建物を立てる一方で、名声を求めているなど信じるだろうか？

この会堂のためなら自分の命を投げ出す覚悟はあるのか？ また、その犠牲に見合うものなのか？

この建物を汚す人を近づけないために何をするつもりなのか？

カーペットを汚されても笑って許せるのか？ 裸足で歩く人がいても黙っていられるだろうか？

それはそうと、裸足で歩きたいと思わせるくらい心のなごむ場所なのだろうか？

キリストでなく、世の中の人を称えるような装飾品はないだろうか？

暗黙の了解のもとに、家族指定席のようなものを設けていないだろうか？

会堂の中で経済的に裕福な人とそうでない人との間に軋轢ができないためには、どうすればいいだろうか？

問いかけることは、いくらでもあります。

もし、どうしても新しい会堂を持つ必要があるなら、時代がかつた劇場のような設計は避けたい方だと思います。舞台でのパフォーマンスが何にも増して優先されるがために、座席が

全てそれを見やすい方向に向けられて作られている建物のことです。そうではなく、私たちは神さまによって創られたのですから、交わりを深め、「お互いに愛し合いなさい」という教えを實踐するのにふさわしい会堂を建てるべきなのです。集会を企画するのはいいのですが、あくまで自分たちの信仰を行動に移す場であることを認識しておくことが大切です。礼拝の中心は神さまであって、私たちの組織ではありません。

また、自分たちの教会のイベントを宣伝する新聞広告を出すのは考えた方がいいと思います。他の教会の人が流れてくるのを期待しているとすれば、それは他の皿の料理を一品失敬するのと同じで、決して感心できることではないからです。

どんなかたちの会堂を持つにせよ、毎日、有効に利用できるように気を配る必要があります。その意味で、私たちひとりひとりが、良き管理人でなければなりません。また、建物に愛着を持つのはいいのですが、それを維持するために躍起とならないことが大切かと思えます。この世のかたちあるものは、いつかは壊れる。このことを知って私たちの永遠を思う心が育まれるのですから。

ありのままの姿で

「しもべとして人に仕え

人の姿をとってこの世に來られ

人間として人々とともにいた」

かなり高い役職についている教会の指導者が、私に「あなたの書いた本を読んだが、イエス・キリストを余りにも人間的に捉えすぎている」と懸念を訴えてきたことがあります。

彼に言わせれば、私は、ほとんどヒューマニズム的な見地からキリストを論じており、危険だと言うわけです。これは的外れな指摘です。ヒューマニズムとは、人間以外にはいかなるものに対しても神性を認めない、つまり、私たちの言う神さまの存在を認めない考え方のことです。

しかし、イエスさまは、人間であり、同時に神でもあったわけです。

私と同じような喜怒哀楽の感情を持った生身の人間としての神さまという意味です。ヘブル

人への手紙にこうあります。

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。したが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」（ヘブル四・一五）

私たちと同じように試みに会われた？ 神の子が？ 信じ難いことですが、どうやら事実のようです。

ときどき、こんな誘惑を受けているのは自分くらいのものだ。イエスさまが受けたのは、もう少し違った種類の誘惑だろうと思うのですが、それは誤りです。私たちと同じような試みに会っているのです。

ヤコブは言います。「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。」（ヤコブ一・一四）

これはどういうことでしょうか。キリストも欲望を持っているという点で、人間と変わらないという意味でしょうか？ その通りです。欲望とはそういうものです。いざとなれば、ここで言うように「自分の欲に引き寄せられ」るものです。

しかし、違うのは、イエスさまが罪のない方であったということです。人間と同じく欲がありました。それが、それに流されることなく、完璧なまでに天の父に従うことができたわけです。そ

して、今、私たちを罪から解放して下さいと同時に、神に従う力も与えて下さいます。彼は人間そのものでした。

汗をかき、体臭もあった。風呂に入り、トイレにもいったということです。人間であり、神であったとは、そういうことです。

このことがわかれば、安心して謙遜になることができます。ありのままの自分を素直に認め、人前でもそれを隠そうとせず、霊の糧がなければならぬで、あるふりをせず、嘘をつかない。そうした姿勢が身につくことと思います。そして何よりの恵みは、赦し、赦されるという経験にあずかることです。

重圧から解放されて生きる

私たちの生活の中で、請求書ほど頻繁に、毎月決って、送られてくるものはありません。負債から解放されたいというのは、誰にも共通する思いですが、その重荷と無縁でいられる人は、

ほとんどいまいと書いていいかと思ひます。借金と同じように、人間、三〇歳にもなると、心ならずも言つてしまつたこと、してしまつたことが山のように積み上がつてゐるものです。あの人には、あれで迷惑をかけてしまつた、あんなことを言つて傷つけてしまつた……。そんな罪悪感を引きずりながら生きてゐる人がほとんどだと思ひます。また、三〇歳までには、逆に自分が受けた迷惑や傷もかなりの数にのぼるものです。思い返すと怒りが新たになり、ただでさえ大きな重荷がますます肩にこたえるものになります。

重荷というのは、それが経済的な負債であるにせよ、精神的に受けた傷であるにせよ、心の平安を乱し、相手との理想的な關係をだいなしにしてしまふ危険性があります。その重荷を取り除くのは赦ししかありません。

メイドとして働いた経験がある人なら、嫌な思ひをして、それをいつまでも棧に持つていては、仕事にならないことを知つています。

しもべは他者にも自由であつてほしいと願ひます。その自由は赦しを通じて与えられるものです。イエスさまは、弟子たちに、一番大切なことは人を赦すことだと教えています。

「そのとき、ペテロがみもとに来て言つた。『主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。』イエスは言われた。『七度まで、などと

はわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」(マタイ一八・二一—二二)
私の場合、たいてい三度目までは、大目に見ます。もちろん一度やられれば、用心深くなるわけですが。

しかし、ここでイエスさまが言っているのは、何とかして自分の嫌な性格を変えたいのだけれど、いつも人を傷つけてしまう。そういったことで悩んでいる人のことを心に留めなさいということですよ。

まず自分が赦すことで、赦しとはどういうことなのかを相手に示しなさいというのがイエスさまの教えです。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」とつぶやいて、弟子たちに教えたように。

私たちはむごい仕打ちで、イエスさまに精神的にも肉体的にも深い傷を与えてしまいました。それにもかかわらず、彼はまるで、天の神さまと相談して、「良いことを教えてあげよう。彼らを赦してあげよう。」と私たちに言っているかのようです。そして神さまは罪のただ中にいる人を愛せるようにしてください。と同時にその人が、その愛を知ることができるように計らってくれているのです。罪は、言うなれば、人間という、神の作品がねじ曲がった状態と考えられます。赦しはこのゆがみを元に戻す驚くべき力があります。

敏しは、また、人と人との間のへだてのかべを取り払い、お互い心と心が触れ合って、受け入れ合うことができるようにしてくれます。これは、しもべとして人に仕える行動と表裏一体のものです。

触れ合いについて

相手に受け入れられたという安心感、ぬくもりを与えてくれるという意味で、スキンシップに優るものはないように思います。小さな子どもでさえ、その大切さを知っています。

ある雷の晩、お母さんが小さい女の子の部屋に入って、あやしている場面を想像してみてください。

「大丈夫よ、イエスさまがいて下さるからね。ちゃんと守ってくれるわよ。」するとその子はこう答えるかも知れません。「わかったわ、じゃあ、ママはここでイエスさまと一緒に寝れば。私はパパのところまで寝るから。」

そうです。子どもが欲しいのは、言葉よりもぬくもりなのです。ですから、人間の姿をとってこの世にきた神さまが、人々のしもべとしての神さまであり、私たちに触れて下さり、また私たちの方から触れることができたということは、実に理にかなっているわけです。

聖書には、イエスさまが人々の身体に触れる場面が随所に出ています。彼の人々に対する愛は、きわめて大きなものなので、らい病人のような、人々から汚れた者として遠ざけられている者でさえも、彼の手のぬくもりを感じる事ができました。子どもたち、動物。彼の創ったものは全て彼のスキンシップの恩恵を受けていました。

道理で、新約聖書には、「互いに」という言いまわしが頻繁にでてくるわけです。これは、触れ合いを通して親近感を表す言いまわしと考えられます。そして、イエスさまがペテロとの交わりを深めるために足を洗うことを求めたのは、このためです。

身体に触れることで（たとえ着物のふきであっても）癒されたというのも、また、牧師の任命式で按手（頭に手を置くこと）が必要とされるのも、贈与、相続権の授与の際、手を重ねるのも、触れ合いの大切さを象徴しています。また、ヘブル人への手紙の著者は手を触れて祝福することを、最も具体的な教義として指摘しています。

以上のことは全て、触れ合いを重視したイエスさまのことを念頭に置くと、容易に理解でき

ることと思います。

ところで、イエスさまは、身体に触れることに関してはかなり敏感なところがあつたようです。彼は、復活の後、マグダラのマリヤに自分はまだ父のみもとに上っていないから、いつまでも触っていてはならないと言います。まだ肉の身体に留まっているうちは、女性の抱擁は、彼にとって余りにも刺激が強いのだと解釈するのが妥当かと思えます。

忘れてならないのは、イエスさまは、この世にあつては、肉体で包まれた愛そのものであつたということです。そして今でも、人間の姿をとつて世に現われた彼の話は語り継がれています。天の父の御名を広めるために私たちに仕えるというかたちをとつたわけです。

へブル人への手紙は、イエス・キリストが今も、私たちの弱さに同情できない方ではないと言っています。

父のように、子のように

「彼は謙遜で、従う者であった」

従順という言葉について、私はどうも額面通りに受けとることができません。この言葉を聞く度に、まわりの人から煙たがられている、口うるさい職人の親方の姿が目に見え込んでしまうのです。やりたくないこと、これはおかしいと思うことを無理やりやらされる光景。自分より身体の高い腕っぶしの強そうな人に半ば、脅かされるようにして仕方なくする光景を思い浮かべてしまいます。しかし、神さまの言う従順とは、こういうことではありません。どう違ってくるのか見てみましょう。

イエスさまは、私たちと違って従順であることを楽しんでいました。なぜならそれが神のうちに造られた者にふさわしい性質そのものであり、無理がなかったからです。アダムとイブは、敢えてそのイメージを汚してしまったというわけです。

イエスさまの生涯で特筆すべき点は、彼が父なる神に全面的に従ったということです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分から何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。」(ヨハネ五・一九―二〇)

イエスさまは、父なる神がどういう方なのか、自分の行ないを通して示したのです。ですから、ここで語られるイエスさまの性格的特徴は、そのまま、全てのものの創り主である神さまのことを言っているのだと考える必要があるわけです。

父なる神も、キリストも、しもべであり、人々の模範であり、謙遜な方でした。子どものように純真で、年若い者のようであり、みなおのしんがりとなり、一番小さい者であり、力に訴えることなく、御自身を無にされました。これら、ひとつひとつがイエスさまの愛を物語っています。この愛こそが彼の生涯を貫く行動原理であり、自ら課した戒めでもあったわけです。彼は実に死に至るまで、この生き方に忠実であり続けました。イエスさまは、ゲッセマネにいるときも、しもべとして愛をもって人に仕えました。ここに至るまでに、人々は、彼に想像を絶するほどの苦しみを与えてきたわけです。そして、この生死にかかわる最も切迫した局面においても、イエスさまは、人々を慈しみ、父なる神さまのことを教えようとしていたのです。

私は、いたって利己的な人間ですから、いつも相手のことを思いながら、ものごとを決めるという資質に欠けています。

しかし、イエスさまは、従順の奥義を知っていました。それが喜びを生み出すことです。

マタイによる福音書の中で、イエスさまは、神さまを信じるとはどういうことなのか、きわめて簡単に語っています。信仰に関するすべての記述は、これから派生するといっても過言ではありません。その意味で、物質にたとえると原子のようなものと考えてよいかと思えます。

「それから、イエスは弟子たちに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。』」(マタイ一六・二四—二五)

このイエスさまのふしぎなことを常に日々の生活の中で実行していけるなら、私がこの本で取り上げているテーマは、何も難しいものではありません。神さまがどのように働かれるのか、宇宙を統べ治めているのは何か、私の身体を支えているのは何か、何がキリストのからだをうまく機能させているのか、こうした疑問に対する答えのエッセンスが、このふしぎにはあるのです。ですから、日々の暮らしの中で、このふしぎなことを糧としていけば、頑張る特別なこと

をしなくても自ずと神さまの力が明らかにされるのです。これは決して神秘的な経験ではありません。他のみことばに比べると、ドラマチックな響きはないので、ともすれば見逃してしまいがちです。しかし、この教えほど私に大きな影響を与えたものはありません。

私の人生は、一八〇度変わりました。自己中心的な思いのゆえに、何をしても心の飢えはおさまりませんでした。そうした思いが取り払われたのは、このみことばに触れたときです。これこそ、神さまのよしとされる生き方であり、愛の心で、相手に接することができるよう私を促してくれる力の源泉でした。

カリスマ的な賜物は、実に多くの興奮を伴うものですが、それもまた、このみことばを抜きにしては語れません。

その賜物は何ひとつとして、自分本位の目的、つまり、自分の益として用いられるべきではなく、他者を益するためにあるのです。奉仕についての賜物は、他者を育成するためにあります。他者を益していない行為は不従順であり、また相手の身体を傷つけることになります。真白な布に例えられる敬虔な信仰も目を追うごとに汚れが目立ってきます。なぜ汚れるかと言うと、自己中心に傾き、相手との関わりをほとんど無視してしまっているからです。

あるクリスチャンの集まりで、二組みのカップルと言葉を交わす機会がありました。うち一

組みのカップルは、仏教徒で、私がスピーチした午後のセッションに対する感想をいろいろと聞かせてくれました。会話の途中、クリスチャンのカップルの男性が、煙草に火をつけました。「いやあ、タバコをすうのはあかしにならないから本当はやめたいんだけど、どうもねえ」と弁解するように言いました。

そのとき、仏教徒の女性が言った言葉を私は今も忘れることができません。彼女は「私たちは、クリスチャンではありませんが、もし自分と同じ仏教を信じる人がクリスチャンとなったとしたら、自分で考えた水準や信仰上の規則をよく守っているかどうかというだけで、その人の心を推し量ったりはしません。私たちが見るのは、その人の相手に対する接し方がどう変わったか。それだけです。」とつぶやくように言ったのです。

神さまが彼女を通して、私に語りかけているのではないかと思いました。パリサイ人がイエスさまのことを大食漢で大酒飲みと責めたことと聖書にあります。しかし人々に対する愛がないと責めることはしませんでした。いや、そうできなかったのです。イエスさまは、人々を愛し貫きました。その死に至るまで、父なる神さまに従順だったのです。

不思議なキャッチフレーズ

聖霊の油注ぎによって、イエスさまは、父なる神に従って生きる力を与えられますが、この油注ぎは、元々、天の神さまによって与えられたものです。

しかしこの油注ぎという言葉は、必ずしも正しく理解されていないようです。以前、私は、この言葉が、何か不思議なキャッチフレーズのように使われるのを幾度となく耳にしました。信徒に牧師が聖霊による油注ぎを感じたかどうかかわかります。なぜなら、その瞬間、行動になって表われるからです。声が大きくなります。講壇をしきりに叩くようになります。同様に、会衆の側も油注ぎを受けた牧師のことを頻繁に話題にし始めます。彼の話の内容にはおかまいなしで、関心の的は専ら説教のスタイルの変化です。

しかし、そもそも、油注ぎがイエスさまにとって、どういう意味のある出来事だったのでしようか？

まず、彼は、聖霊によって砂漠へと導かれ、そこで断食をしながら、サタンの激しい誘惑を

経験します。彼は、人間が陥いるのと同じ誘惑の力に揺さぶられるのです。そのことによって私たちの思いを身をもって知り、また、人間がいかに汚れに満ちた存在かということを知るわけです。その後、この戦いに打ち勝つと、イエスキリストは会堂へ赴きます。そこで、イザヤ書を手渡された後、ある箇所を目を止めて読みあげます。

「わたしの上に主の御霊がおられる。

主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、

わたしに油を注がれたのだから。

主はわたしを遣わされた。

捕らわれ人には赦免を、

盲人には、目の開かれることを告げるために。

しいたげられている人々を自由にし、

主の恵みの年を告げ知らせるために。」(ルカ四・一八―一九)

これが、イエスキリストに対する油注ぎの一部始終です。

この油注ぎによって、彼は自分本来の姿、つまり、従順さを全うできるようになりました。社会的あるいは、医学的な塗油とは違って、信仰上の油注ぎには、特別な意味があります。そ

れは神さまに対する献身を促し、砕かれた者として、特別の目的のために力を与えるということです。

メサイアという言葉があります。キリストという言葉と同義ですが、これが意味するのが、「油注がれた者」です。言いかえれば、イエスさまは、完璧なまでに献身的で、心砕かれていて、力を与えられていたということです。

その力は、大きな声で話したり、必要以上に雄弁になったりするために与えられたものではありません。福音を宣べ伝え、自由を告げ知らせ、盲人の目を開き、しいたげられている人々を解放するために与えられた力です。

イエスさまの生きたように生きたいと思うのであれば、個人レベルでも油注ぎがなされる必要があるわけです。

さて、聖霊の油注ぎによってイエスさまがどう変えられたかは、これでおわかりいただけだと思います。ところで、イエスさまは、この油注ぎによってどのような人々のところに遣わされたのでしょうか？ それは、貧乏な人、囚人、盲目者、社会的にしいたげられた人といった、お世辞にも魅力的とは言えない人たちでした。こういう人たちの場合、イエスさまに何かしてもらっても、しかるべきかたちでのお礼はできません。ただ受けとるだけです。従順さとは、

受けることより与えることを念頭に置くものです。神さまは私たちを灌注いで、どのような人のところへ遣わそうとしているのか、その人たちに対し、私たちはどのような言葉をかけることができるのか。考えてみる必要があるように思います。

神さまはどちらの味方？

「貧しい人への福音？ 福音を伝えるのなら、できればお金持ちの人を対象にしたいものです。見返りが期待できますから。そもそも貧しい人の場合、学のない人がほとんどですから、福音を伝えても、それをどう生かしたらいいかかわらないと思いますよ。要するに得るものがないということです。それに貧しい人は、少し優しくされるとつけあがる傾向がありますからね。まず、自分が何のために助けられているのかを理解し、感謝の気持ちで湧き起らない限り、助けてやる必要などないですよ。」

私でしたら、さしずめこんなふうに言うのではと思います。しかし、聖霊によって灌注がれ

たイエスさまが最初にうながされたのは、貧しい人へ福音を伝えるということでした。

捕らわれた人への赦免というのも、イエスさまが掲げたテーマです。私たちは刑務所に誰かを訪ねるといふことがあるでしょうか？ 知り合いが服役していると知っただけでも恥ずかしい思いをするのが普通です。私のように、「何でまた、刑務所に足を運ばなければならぬのですか？ 法の裁きを受けてそこにいるのですよ。それに、罰を受けて拘留されているのに、そこで私のような普通の市民に接触したのでは、一体何のための更生期間ですか？」と口走る人がいるとすれば、その人にとって先に挙げた聖書の油注ぎのくだりは飛ばして読みたい箇所となるのではないのでしょうか？

服役している人が皆、正当に裁かれたとは、限りません。多くの人が、裁判を進めるために弁護士をつける経済的余裕がないという理由で、軽く扱われ、拘留処分に甘んじているのが現状です。裁判で争うことのできる人のように、綿密な法の適用を受けていけば、とうの昔に釈放されていたのかもしれないのです。

ともあれ、刑務所にいる限り、誰もその人のことを思い出してはくれません。そこに限り、夢も希望もあつたものではありません。だからこそ、イエスさまはそういう、人々から忘れられた者を見つけ出し、心に留めたわけです。

確かに彼らは社会の秩序を乱し、そのつけを今払っているのかもしれませんが。しかし、私たちと同じ人間です。イエスさまは私たち人間を救うために来たのです。

ウォーターゲート事件に関与して逮捕されたチャック・コルソンの職業は弁護士でした。彼は自分が投獄されて初めて、刑務所自体が人を更生させるにはほど遠い、ひどい慣習がまかり通っているところであることを知りました。この服役経験を機に、彼の人々に対する態度は一変します。大統領補佐官の職を去って、今では、牧師となり、全国の刑務所を廻って福音を伝えていきます。

全うな暮らしを送り、将来の成功を夢見ている人にしてみれば、刑務所とは、関わりを持ちたくないと思うのは当然のことです。しかし、相手のことを愛するなら、そこに足を運ぶことができるのではないのでしょうか？ イエスさまは、そこに足を踏み入れました。捕らわれた者に自由を知らせるためです。

どうやら、刑務所という言葉が強調し過ぎてしまったようです。この言葉を文字通り受けとるのには抵抗を覚える。むしろ霊的な意味での刑務所と解釈したいという人もいます。しかし、その場合も同じことです。

この世は、人を耽溺させるものであふれています。麻薬、酒、煙草、ギャンブル、セックス、

全てそうです。これらに溺れると、決まって気持ちの上で不安定になります。

こういった中毒者を私たちはしばしば刑務所に服役している人を見るように、自分とは関係のない人と見る傾向があるように思います。口では、「キリストにあつては全ての人に自由が与えられて……」などと言うものの、それも、おりの外から、つまり、その人から距離を置いて叫んでいるだけです。決して、自分から近づいて行って、同じセリフを言うことはありません。

信仰の上で罪を犯した人も、社会で罪を犯し、刑務所に入った人も、人々から色眼鏡で見られる屈辱を味わい、悔い改めたり、社会復帰しても相手から信頼されることはまずありません。実際、伝道を始めてみてわかったのですが、そういう人たちにイエスキリストの福音をわかってもらうのは、実に多くの時間と体力が必要です。捕らわれた人への自由を知らせる前に、誰よりも自分自身が人々の友となり、神さまから油注がれる必要があるのだと思います。

私は神さまにいろいろな疑問を投げかけているのですが、そのひとつに、満足のいくほど多くの人が癒されていないということがあります。神さま側からの解答としては、私とその人のために充分祈ってもいないし、回復に向けてその人と歩みを共にしていないということになる

ようです。

癒しということについて、私はあまりよくわかりません。聖書に出てくると同じような癒しが起こるのを幾度となく見てきました。本当に不思議な体験をしたこともあります。

しかし、一方で、癒されないのは、あなたの信仰が足りないからだとする、まるで、羊をこきおろすような、今流行の神学が誤りであることも、これらの経験を通じて学びました。

イエスさまは道すがら、病人を難なく癒しました。ある土地では、病人をみな癒したこともありました。しかし、それでは、当時の群衆の方が、今の私たちよりも信仰が篤かったから癒されたのかと言うと、どうもそういうことではないようです。

イエスさまが、その人の信仰をたたえる場面は、聖書にそう多くはでてきません。しかし、彼はどこに行っても病人を癒し続けるわけです。癒しを行わなかった場所がただひとつだけあります。そこは、人々の不信仰が目にと余るところでした。

今は、心や身体に傷を負った人々がイエスさまに目を向け、教会に足を運び、どうか自分のために祈ってくださいと頼んでいます。彼らが教会に来るのは、信仰がうすいからでしょうか？ そうではありません。癒される人がいます。しかし全ての人が癒されるわけではありません。

イエスさまを信じて教会に足を運んだ人に対し、癒しが表れなかったからといって、聞こえよがしに、信仰のなさをなじり、追い返すのは、一体どういう神経をしているのか理解に苦しみます。人を責める、その声は、人々を慈しんだイエスさまの声と違うことは明らかです。

癒される人がいる一方で、そうでない人もいます。それがなぜなのか私にはわかりません。しかし、しもべとしての務めを知り尽くした方の命令を受けているのですから、ささやかながらできることとして、病の床にある人、盲目の人のために祈ることが必要かと思えます。

その後の癒しは、神さまに委ねればいいのではないのでしょうか。ところで盲人（肉体的な意味でも精神的な意味でも）が、回復の過程にあるとき、何をしてあげられるでしょうか？　まず、歩みを共にすることです。道路を横断するときもつき添って、危険から守ることです。

昔の明るさを取り戻すように励ますこと、そして、いやし主である神さまと常に一緒にいられるような状況を整えてあげることがも大切です。

そして、何とも喜ばしいことに、相手の目が開かれたときに、目に映る最初の人間になるという特権にあずかることができるわけです。

しいたげられている人々を自由にすること（ニューインターナショナルバージョン 証聖書）
傷を負った人々を自由にすること（キング・ジェームズ証聖書）

しいたげられた人は、往々にしてとっつきにくいものです。こちらから力になろうと申し出ても、当の本人はというと、表情を強張らせたまま、黙々とことを続け、たいてい、差し出した手は、はねつけられてしまっています。そういったことを何度か経験するうちに、彼らはしいたげられるべくしてしいたげられているのだと、自分の心に言いきかせるようになるわけです。

彼らがしいたげられて当然なのかどうか、という問題はさておいて、教会をひとりの人間の中からだに例えるなら、その胸の鼓動は、しいたげられた人のそれと、いつも共鳴していなければならぬと思います。

ところが、なかなかそういかないのが現状です。いや、もつと悪いことさえあります。実に忌まわしいことですが、教会の方が率先して、人をしいたげていることさえ、実際にはあるわけです。

肌の色や、置かれた立場で人を排斥したり、そういうことをする組織を教会として支援するのは、イエスさまと歩みを共にするという教会本来の使命から大きく逸脱した行為と言わざるをえません。天の神さまの語ることにばに耳を傾けるといふ姿勢がそこにはありません。聖霊の働く場を取り除いてしまっています。そういった場で、イエスさまの名が悪用されないことを切に願わずにはいられません。ここまで来ると謝ってすむ問題ではなくなってきました。

公民権運動に火のついた六〇年代、急進的な左派は、社会的に抑圧された人々の救済を旗印に、運動を展開しました。教会にいた私たちの多くが、またとないこの機会を指をくわえて見ているのです。彼らの言う弱者救済というテーマは隠れみので、実は他の目的があったとか、あまりにも過激な行動に走ったとか、私が問題にしているのは、そういうことではありません。しいたげられた人に自由をとという願いを持っていた以上、私たちは、社会的に弱者と共にいるべきだったのです。

その過激さに肩をひそめていた私たちは、弱者解放の運動に加わらない理由として、彼らにだしに使ったのではないのでしょうか？　そういうテーマを掲げる人は、誰でも大なり小なり、急進的な若者と同じように過激な行動に走るものだとか、共産主義思想に染まっている恐れがあるかと勝手に決めつけていた気がします。

イエスさまの関心は、誰がしいたげられた者の側に立つかということではありませんでした。ただ、自分は、神さまから遣わされた者として、当然のごとく、弱者の側に立った。それだけのことです。私でしたら、弱者の側に立つ前に人の目を気にしていたと思います。イエスさまのように自らを捨てて相手の側に立つことが、求められているのではないのでしょうか。

さて、次は、自分が傷を受け、しいたげられた場合のことを考えてみましょう。攻撃を受け

れば、傷を負います。そのときの痛みを覚えているものですから、私たちは自分の体を守ろうとします。もう一度傷を負わされようものなら、ますます人を警戒するようになり、ついには、自分の傷の保護だけを考えて、暮らすようになってしまいうわけです。何やらいじけた巨人を思わせます。

私自身、愛が信じられなくなったことがあります。そのときは、もう誰ともつきあいたくない、二度と人を愛するのはよそうと思つたものです。人にしいたげられ、裏切られることで受けた心の青あざ。よほど精神的に打たれ強くない限り、これが原因で、相手のことを第一に考えるライフスタイルは崩れ、自己保身に終始するようになってしまいうわけです。これは精神衛生上、非常に不健康な、抑圧された状態と言えます。私たちは、神さまからの油注ぎを通して、イエスさまに心の傷をいやしていただくのです。それで初めて、自己保身的な生き方から解放されるわけです。

「マタイの福音書（七章三節―五節）では、イエスさまは、兄弟の日から、ちりを取り除く前に、自分の目の梁を取り除きなさいと言っています。心に傷を負った人を助けるにはどうすればよいのか。このみことばはその処方箋と言つてよいかと思ひます。

私のような牧師の場合、その職権をかさに着て、つまり人の目のちりを取り除くのが務めだ

などと称して、相手に近づくのは、あつてはならないことです。そんなことをすれば、相手は警戒のあまり後ずさりするでしょう。

牧師自身、自分の目からひとつの梁を取り除かれた経験があれば、その際の痛みが心に焼きついている分、人の目に入ったちりについても慎重に対処するのではないでしょうか。自分の目に梁を二つもかかえながら患者の治療にあたっている眼科医の話など聞いたことがありませんし、そんな人が仮にいたとしても診てもらいたいとは思いません。

さて、最後に、「主の恵みの年を告げ知らせる」というみことばについて考えてみましょう。振り返ると、私が必死になって世の中の人に知ってもらおうとしていたことは、必ずしも神さまがよしとされたことではなかったという気がします。聖書に出てくる姦淫を働いた女の話にしても、もし私がその場に居合せたら、彼女を徹底的にやり込めて、石打ちの刑にしろと言っていたと思います。

若い頃、私は、姦淫がどんなに邪悪なことか語りながら、世界を廻っていました。しかし、聞く方してみれば、そんなことは言われなくてもわかっていたと思うのです。彼らは彼らなりのやり方で、姦淫の女を既にやり込めていたわけです。私がしたことといえは、言葉巧みに徹底的に非難したというだけのことです。

そのとき私は、イエスさまが「あなたは何のために聖霊によって油注がれたのですか？ 私が姦淫を犯した者の味方であることを世に宣べ伝えるためではないのですか？」と語りかけるのが聞こえました。

私を含め、多くのクリスチャンは、自分は神さまの側に立っていると自負しています。では、私のメッセージが神さまのメッセージと同じかと言うと、まるで違うわけです。世の中の人は、その私のメッセージを聞くとうとしているのです。

イエスさまに油注がれた聖霊の働きは、イエスさまの生き方、父なる神さまの姿と切り離して考えることはできません。それがもたらすものは、献身と従順でした。自分を捨てて、相手に尽くす生き方でした。人間に対しても同様です。私の場合だけ、油注ぎが何の結果もたらさないなどということはないわけです。

羊のために命を捨てる

「キリストは自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持つてはいません。」

(ヨハネ一五・一二)

これは、言い換えれば、その人に本当の愛があるかどうかの試金石と考えられるわけです。

私の場合、そこまで相手のために尽くせる自信はありません。ここで注目すべきことは、イエスさまは人から強制されていのちを捨てたのではないということです。無理強いされて、人を愛するようになったという話など聞いたことがありません。奴隷にされるといふことと自らしもべになるというのとは、全く別のことです。愛とは、自らしもべになるということです。ですから、死でさえも、イエスさまが自ら行った愛の選択でした。

「わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それ

で、狼は羊を奪い、また散らすのです。それは、彼が雇い人であつて、羊のことを心にかけないからです。

わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してくださいます。だれも、わたしからのちを取った者はいません。わたしが自分からのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」(ヨハネ一〇・一一―一八)

最初から自分を捨てることができるわけではありません。神さまがどんな方であるかを知り、その語りかけを耳にしたとき初めて、力が与えられるのです。ここで求められている応答は、羊である私たちが、羊飼である神さまの声を聞き、何を言っておられるのかを理解し、人々のしもべになりなさいという呼びかけを心に留めることです。神さまに対する従順がどうい

ことなのか、本当に理解できれば、自己中心的な態度で人を傷つけるようなこともなくなるはずです。イエスさまは、死が終わりではなく、新しい世界の始まりであることを知っていました。

ようやくわかった！

「それゆえ神は彼を高く上げた。」

イエスさまのことを深く知ると、時々不安が頭をよぎることがあります。というのは、彼のことをいくら深く知ったところで、それで海千山千の世の中の人と渡り合えるわけではない。にもかかわらず福音を伝えるために全世界に出て行きなさいと命じられているからです。

しかし、自分のような普通の市民が危険な地域に入り込んだ時、身を守る手立てもなく、かといってさしたる金もなしに福音を伝えるなどということが本当に可能なのでしょうか？

自分のことは忘れて相手に仕えると、言葉で言うのは簡単ですが、それで果たして伝道が成

功するのでしょうか？

神さまが、イエスさまがどんな方かを端的に明らかにしている箇所が聖書にはあります。神さまはそこで自分の関心がどこにあるか、知らせようとしたのだと考えられます。

ピリピ人への手紙で、パウロは、神さまが、自分に対する服従を旨として生きたイエスさまに最後は応えることを書いています。

「それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」(ピリピ二・九―一一)

そうです。神さまに倣って生きれば、神さまは、それに応えて下さるのです。私たちは、いくら頑張ってみたところで、自分の力だけで世に打ち勝つことはできません。だからこそ、神さまが私たちに、代わって力を行使して下さいよう、心を備える必要があるわけです。そうすることで、歩みを進めることができます。

私は、様々な集会を通して、信仰で勝利を得た」と公言する人たちと話す機会がありました。では、彼らがイエスさまと同じように生きて、勝利したのかというところ、それに背を向け

た生き方をしていることが話しているうちに見えてくるわけです。

彼らが吹聴する勝利も、イエスさまに従って生きたときに得られたであろう勝利に比べれば、ちっぽけなものです。人間は、自分の力でものごとを成功に導くことはできません。しかし、それはあくまで、人間の能力の範囲内での成功でしかありません。私たちの人生には、人知を越えた問題が何らかのかたちで課せられているはずで、それを自分の力だけで完全に解決することは不可能でしょう。

しかし、イエスさまの生き方に従って生きるとき、私たちの成功は、自分の能力からでなく、神さまの能力から来る成功という意味に転化するわけです。

この世のものの考え方からすれば、どうもしっくりしないかもしれませんが、しかし、私たちの信仰に照らして考えてみれば、むしろ当然のことだと思えます。求められているのは、神さまに信頼を寄せることです。心配することはありません。これをひとつの契約とみるならば、神さまは確かに自分の約束したことについては必ず守って下さいます。

「わたしはもはや、あなたがたをしもべと呼びません。しもべは主人のことを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」(ヨハネ一五・一五)

何とすばらしい恵みでしょう。

どう祈ればいいのか。どう愛したらいいのか。力の源はどこにあるのか。その力をどう使ったらいいのか。今まで悩んでいたのが嘘のようです。

力の仲介者

イエスは父がすべてのものを統べ治められていることを知っていた。

テレビをつけると、ボディビルコンテストをやっていて、参加者がインタビュを受けていました。彼らは、ステージに上がると、オイルを塗りたくった皮膚で覆われた隆々とした筋肉をビクビクと断続的に動かします。まるで無数の小さな動物が駆け廻る様を想像させられました。

彼らの力を誇示する姿は、ひとことと言って、無気味でした。司会者が「あなたはそんなに力をつけて一体何をするつもりですか」とたずねると、彼らは、また違ったポーズをとって筋

肉を動かします。どうやらそれが答代わりのようです。司会者が更に同じことを尋ねると、また、別のポーズをとる、その繰り返しです。もし読者のみなさんが、こんな力を持つていたら、何をするでしょうか？ 四半世紀にわたって、スーパーマンは、アメリカ人の心を捉えてきました。最初、漫画で登場したスーパーマンは、テレビで連続ドラマ化され、今や制作費をふんだんにつぎ込んだ映画にもなり、そこでもシリーズ化されています。

弾よりも速く、機関車よりも力強く、高いビルもひとつ跳びといたアイデアに人は引きつけられているようです。人間は元来、力に魅力を感じます。スーパーマンは、人間の心の奥底に潜む力への渴望を、完璧なまでに満たしてくれるヒーローと考えられます。しかし、自分にその力があつたら何をするでしょうか？

イエスさまはどうするのでしょうか？

「ヨハネによる福音書一三章を見ると、彼は、「自分の時が来たことを知られた。」とあります。イエスさまは「その愛を残るところなく示される」備えをします。彼は自分が父のみもとから来て、父のみもとに帰ること、父なる神さまが全てのことを統べ治めていることを知っていました。

さて、私たちはこれから何が起こると期待すればよいのでしょうか？ 花火ですか？ それ

ともあのグロテスクなボディビルコンテスト？

イエスさまが弟子たちと共に食事を取りながら、ゆるやかな衣の下で力こぶをつくっている姿を一体想像できるでしょうか？

悪の手先が日毎、力を増し、ついにはイエスさまを殺さんとしている。でも心配無用。彼の身体には、今まで溜めてきた力が脈打っている。想像を絶する悪の力に取り囲まれる中、彼は、今立ち上がり、弟子たちのところへゆっくりと歩き出し、その信じられないような力で……そんな馬鹿な！

「彼は夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って……」これがイエスさまが自分の力を用いて行ったことの一部始終です。彼は弟子の足を洗ったのです。

人の足を洗う。これに似た習慣は、少なくとも私たちの社会にはないように思えます。当時は、来訪者を歓迎する気持ちのしるしとして、足を洗っていたわけです。実際に洗うのは、奴隷の役目で、奴隷を雇う余裕のない家に限って、主人が洗っていたようです。それは、少しでも名の知られた人ならとてもできない、卑しい行動とみられていました。もしそんなことをすれば、名声はあつというまに失墜してしまうからです。合衆国の大統領がホワイトハウスの応

接間をそうじしたり、一国の王が道路をほうきで掃いているようなものです。

人の足を洗うのが好きで仕方がないというなら話は別ですが、よほどの物好きでない限り、自分から、世間の失笑を買うのを承知でそんな卑しい仕事に就く人はいないわけです。

イエスさまは、自分に課せられた使命を知っていたので、面子にこだわりませんでした。彼には人々から最も蔑まれた仕事にも抵抗がなかったのです。

私だったらどうなっていたでしょう？ 少しいらついた調子で咳払いしながら、片方の足を弟子たちを意識して、軽く上げてみせ、「何か大切なことを忘れていないかい」とほのめかす様子は、想像に難くありません。要するに、自分はそんな仕事をするほど卑しい人間ではないと自負していたわけです。

ペテロは、威厳に満ちた自分の先生が、人の足を洗うなんてとんでもないと思っていました。彼は、そのようなことをされても、自分は何も返すことができないと思っただのかもしれない。足を洗わせてほしいというイエスさまの申し出を一度は拒みます。そのときイエスさまがペテロに言った言葉こそが、私たちと神さまとのあるべき関係、クリスチャン同士のあるべき関係、そしてイエスさまの人となりを実に物語っています。

「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」私たちはこのイエ

ささまの本当の姿を知り、それを受け入れられない限り、彼のことを十分理解することはできないのです。関係のないままで、終わってしまう可能性があります。

私たちは、イエスさまを責任者とするクラブの会員と言えるのかもしれませんが。言葉の面では、とても巧みにつきあっていることでしょう。しかし、その責任者に面倒を見てもらわないと、本当の意味でのかかわりは持てないままではないでしょうか。

ペテロの反応は、私たちの間でも見られる典型的なものです。「私の本当の姿を見られては困ります。足は自分で洗いますから。かたちだけゆすいでいただければ結構です。」というように言い訳するのが普通だと思います。

おそらく、イエスさまに足を洗っていただくかなければ、彼との関係が、断たれてしまうのと同じように、相手の足を洗いなさいという彼の戒めに耳を傾けなければ、人との関係も断たれてしまうのだと考えられます。

私たちは、ひとりひとりが相手の足を洗う洗い手になることが求められているように思えます。この世にあって旅人の私たちは、そうして日々の汚れを落としながら最後に主と同じ食卓につく光榮にあずかる恵みが与えられているのではないのでしょうか。

「イエスは、彼らの足を洗い終わり、上着を着けて、再び席に着いて、彼らに言われた。『わ

たしがあなたがたに何をしたか、わかりますか。あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。

それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。

わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。しもべはその主人にまさらず、遣わされた者は、遣わした者にまさるものではありません。』(ヨハネ一三・一二—一六)

人によつては、この箇所をイエスさまが洗足という新しい儀式形態を取り入れたと解釈しているようです。それはそれで正しい見方なのかもしれませんが。私自身、何度もこの儀式にあずかる機会がありました。何ともいえない高揚感に満たされ、一時を過ごしたのを覚えています。しかしひとつ気になることがあります。

その儀式で汚れた足を相手に差しだした人を見たことがないのです。人目にさらし、臭いがかがれ、牧師に触れてもらう前に、丹念に自分で洗っておくというのが真相です。

私個人としては、イエスさまが新しい典礼を導入したという考え方にはどこか無理があると

いうのが偽らざる気持ちです。むしろここでは、どのようにして私たちがお互いの信頼関係を育んでいけばよいのかということをお教えているのではないのでしょうか。ですから、文字どおり足を洗うということができない場合は、何かほかにできることがありますかと訊けばよいのだと思います。

例えば「神さまの食卓にあずかるのによりふさわしくなれるようお互いにもっと清い生き方がしたいものですが、そのために、私に何かできることがありますか？」と言うように、誰かが忙しい時間をさいて、自分の話を親身になって聴いてくれたとしたら、足を洗ってもらったのと同じような気持ちになります。人にほめられたときも、人と喜びを分かち合えたときも同様です。

また、誰かが私を信頼してくれて、プライベートな悩みを打ち明けてくれたとすれば、その相手の足を洗わせてもらったようなものです。この様に私たちの人生には、いくつもの洗足の儀式があるわけです。そもそも何がきっかけで汚れ始めたのか、このことさえ、十分反省できればそれでいいのだと思います。あとは、相手に洗剤を渡して、汚れを落してもらうことです。

このことがわかったとき、私の日曜日の説教に対する考え方は変わりました。身だしなみを

整えて、行儀よく、席に座っている人の心の中が、見た目ほど整っていると張りなないと気づき始めたのはこの頃です。

クリスチャンといっても、ほとんどの人が普段は、キリスト教に全く関心のない人に交じて、仕事をしているわけです。中には、教会を冒瀆するようなことを言ってくる人もいます。ようし、かなりきわどい性的な話をしてくる人もいます。礼拝に出席している女性の多くが職場で男性から性的な誘いを受けています。家族に相談しても、不愉快な話を聞かされたばかり、むっとして、とりあつてくれません。罪の意識に苛まれ、心の奥底に不安を抱えたままに礼拝に来ているのかもしれない。

そういう人たちに前にして私は何を言えばよいのでしょうか？ 世の中の神さまのことを省みない人たちが非難するのが果して適当でしょうか？ 世間の人とは一線を画して、クリスチャンらしい生活をしなさいと言ふべきなのでしょうか？ 更に落ち込ませるようなことを言っているのでしょうか？ いいえ、そこにいる人もまた、私と同じように足を洗ってもらうことが必要なのです。

クリスチャン同士、互いに相手の足を洗うことができたとき、初めて、そこに真の意味での信頼の絆ができ上がるということです。

「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです。」(ヨハネ一三・一七)

甘くて苦いもの

地図を開けて行き先を確認するときは、まず、その前に現在地を確認しておく必要があります。

これまで、私たちはイエスさまと自分たちとの対照的な姿を見てきましたので、少なくとも自分が今どこに置かれているのかということについては、わかっていると思います。

明らかなのは、私たちは、この世にあっては旅人で、実に長い時間歩いて行かなければならないのですが、最後は、約束の地に到達するということです。

神さまから啓示を受けた後、エゼキエルは、聖書に記された言葉を飲み込むように言われます。が、それは口には甘いものの、胃には苦い言葉でした。

これまで、取り上げてきたみことばにも、これとよく似たものがあつたかと思ひます。ちょっと見には、おもしろいように思えるのに、いざ、食べてみると消化しきれないということはいくつあることです。それは、私たちがそれを消化できるような状態にはないからです。

救いがこの私のために提供されたと考えると、恐れ、身体の震えが止まらなくなることがあります。しかし、ありがたいことに、私たちには助け手があります。

私たちは今、キリストのからだに目を注ぎ、神さまが私たちひとりひとりの成長に密接に関与する様を見ているので、救いの業をしつかりと味わうことができます。

神さまからの招待状には必ず「ご返事をお待ちしています。」と書かれています。

足首と足の関係

「神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が

苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであつて、ひとりひとは各器官なのです。」(第一コリント二二・二四・二七)

神さまはここで、身体を例にとって私たちの結びつきについて説明しています。大変わかりやすい表現です。私たちの身体は、実に組織的に創られていて、柔軟性に富んでおり、日々成長していくものです。それが健康な状態で持ちこたえていけるのは、実は、ちょうどイエスキリストの生き方のように身体が機能しているからです。身体の中の部分をとってみてもそれだけが独自で存在するということは、ありません。人間の身体の器官はどれも他の器官の働きをサポートできるように、意図的にしかるべき場所に配置されています。

ひとつの器官が他のことはお構いなしに、自分のためだけに機能し始めた状態が、いわゆる「がん」と呼ばれるものです。各々の器官が他の器官をサポートしているときに限って生きていくことができる。この点において、人間の肉の身体とキリストのからだは同じであると言えるわけです。

この身体の例えは論理的に見て筋の通ったものですから、そこから多くのことを学ぶことができます。

身体には、何かひとつ大きなことをしてやろうなどと考えている器官はありません。

足の指が「最近、まじめに働いているから、たまには少し上の方に行きたいんだけど、そうだなあ、膝とか肘とか、鼻でもいいよ。」などと言うはずがありません。

足の指は、一生のほとんども暗やみの中で過ごすわけです。まず人に見られることはありません。足の指は、一生のほとんども暗やみの中で過ごすわけです。まず人に見られることはありません。全身重がずしりとのしかかり、お世辞にもいい環境とは言えない。そんなところで働いています。でも、足の指は一度もアイスクリームにありついたことがないとか、顔のように注目を浴びたことがないなどと言って、こぼすことはありません。また、「それくらいしか評価してくれないのなら、誰か他の人に鞍替えしちゃうぞ」などと言ったためしもありません。

足をくじいて、足首が、上からのしかかってくる重みに耐えきれなくなったりも、身体は足首に向かって「そんなことなら切りとってしまうぞ」と脅かすことは考えられません。そんなことをすれば身体全体が麻痺してしまうからです。

傷を負った器官は、回復するまで、同じ身体の他の器官にいたわってもらうのが普通です。いたわる方としても、それが当然と思っているわけです。

右手にかなづちを持って釘を打っているとき、違う釘（私の左の親指）を打ってしまったとします。このとき、傷を負った左手が、かなづちをひたたくって、「これであいこだ」と言わ

んばかりに右手の親指を打ってくるのでしょうか？

また、右手が左手に向かって「なんで、お前は俺と違って力が弱くて不器用なんだ」といじめるでしょうか？

ひげを刺ると表皮の一番外側がこすり落とされますが、赤血球の働きでこれは再生されます。毎日この営みが繰り返されているわけです。赤血球は一度として「自分の言うことを聞いて、顔を痛めつけるのを止めないと、もうなおしてやらないぞ」とは言っていないわけです。

胃が痛むからといって、おなかを拳で殴られたり、日焼けしすぎて、ひりひりするからといって、顔をなぐられていたのでは、私たちの身体はいくつあっても足りません。実際私たちがするのは、全く逆のことです。私の身体は、それはそれは慎重に自分を守るようになってきています。眼に危険を感じると、本能的に手で顔を覆いますが、このとき、手が危ないとは考えていないのです。

時折、私の身体のある器官は、オーパーワークになったとき「かんべんしてよ」というシグナルを送ってくるようなことがあります。しかし、いろいろな器官から「もうこんな仕事嫌だ」という不満が噴出してくることはないわけです。

これでおわかりいただけだと思います。私たちがキリストのからだの器官とされたというこ

とは、お互いにサポートし合うということです。でなければ、キリストにあって生きることが不可能なのです。

歴史の囚人

私たちは個人レベルで、イエスキリストの姿を反映するような生き方が求められているのだとすれば、当然、個人が作る教団、教派といった組織でもまた、同じことが求められているはずで
す。しかし、ここ数年のうちになたてられた、キリスト教団体をみてみると、ほとんど言っ
ていいほど、一般の企業のような顔を持っているような気がします。肩書きがものを言う組織の
ように、教会関係の組織もまた、ピラミッド型をしています。

ここにも企業のように作業能率を最優先する人がいるわけです。教会をキリストのからだや
霊の賜物といった観点から見るのではなく、腕を張って人に紹介できるほど、うまく機能して
いるかどうかということばかり気にしているようです。

教会の中で縁者びいきがまかり通っています。彼らの意識は内へ内へと向けられ、信者が何を考えているか、関心を持つとうしません。組織の統一見解は、得てして、その構成員ひとりひとりの見解と大きく異なっているものです。

教会の役員会で多くの人と個人的に話をする機会がありますが、概して彼らは教会員のことを気にかけ、既存の教義も鵜呑みにするのでなく、自分なりの考えを持って検討しています。自分自身の教会内での役割についても現状に満足することなく、反省を重ねています。では、役員会の場でそういった個性が発揮されて、斬新な結論が出てくるかというところでなく、むしろ役員個人の考え方は、正反対の決議がなされることの方が多いわけです。

一度組織に組み込まれると個性は発揮してはならないという無言の圧力でも受けているのでしょうか？ これでは世間の組織と変わりありません。ひとりひとりが神さまの声に耳を傾け、決断を下す力が備えられています。教会の組織上の問題が原因で、この力が奪われたり、損なわれているとすれば、何かが間違っているのだと思います。イエスさまが、そのようなことを認めているとは思えません。

自分を投げうって人に尽くしたのがイエスさまの生きざまだとすれば、人のことは二の次で、自分の身の保全に没頭しているのが、今の教会の姿、という印象を受けます。

自分中心に生きるのは、イエスキリストの教えを踏みにじることです。

「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」(ルカ

一七・二三)

時間がたつにつれ、組織は部分的に硬直してくるものですが、役員やリーダーたちは本来仕えるべき人々のことを忘れ、無益な議論を闊わせているだけのよう気がします。

ギリシア神話に出てくるプロクルステスの話は、この状況に実によく似ています。

プロクルステスは、大きな二つの都市のちょうど中間地点に家を持っていました。どちらの都市からも歩いて一日かかるくらいの距離のところでした。このため旅人は頻繁に寝泊まりの場として彼の家を利用させてもらっていました。

旅人はプロクルステスの家で今まで味わったことのないような歓迎を受けました。豪華な食事とゆったりとした間取りの部屋。それでいて彼はお金を受けとろうとしません。プロクルステスはここにいる間は、好きなことをしていい、この家には特に決まりはないから心配する必要はないと言って旅人を安心させます。

しかし、ただひとつだけ、夜の間、課せられた条件がありました。旅人の喜びが頂点に達したころ、それが明らかにされます。

そこに泊まった人の身体のサイズがベッドのサイズと合っていないなければならない。それがその条件でした。背の低過ぎる人は身体を無理やりひき伸ばされ、逆に高過ぎる人は、足を切断されてしまいます。

たいていの人は、ベッドにぴったり合ったものだから、ぐっすり寝ることができました。行く先々の街で知り合いにプロクルステスの家で受けたもてなしを絶賛し、旅行の際には是非泊めてもらうよう勧めて廻りました。

しかし、彼の家で命を落とした人もまた多勢いたわけです。彼らの運命については誰も知るよしがありません。

教団や他のクリスチャンのグループがかたちとして整ってくると、必然的にその教義や組織構造は、融通のきかないものとなってきます。新しいものの見方をする人、預言的な言葉を語る人は忌み嫌われて、やがて、そのグループのエルサレム（本部）から追放されてしまいます。決められたパターンに適應できる人だけが生き残れるわけです。また、役員やリーダーを選ぶシステムが企業の人事に似てくるものですから、牧師、長老のおぼえがめでたい人だけが、受け入れられることとなります。

霊的な意味でのリーダーシップは看過され、政治家のように組織を厳しく切り盛りしていく

力を持った人が、幅を効かすようになります。新しい運動が始まると最初のうちは、際立ったリーダーシップをとる人がいて、注目を浴びます。そういった人たちは、ただ、目立つからというだけの理由でリーダーに選ばれるのが普通です。しかし、その運動も最初の頃の勢いを失っていくと、かつては組織に活力を与えたリーダーシップも官僚主義的な構造に飲み込まれてしまうものです。

私は何度か、将来牧師を志している人に、本人としては、誰に教会で靈的リーダーシップをとって欲しいと思っているのか訊いてみたことがあります。すると、どの教会でも、既に選ばれている役員クラスの人の名は挙がらなかったのです。

真の意味でのリーダーを選ぶ機会が、教会内のつまらない争いの中で、いつの間にか失われてしまっているということを、このことは、凶らずも証明しているわけです。

それでは、このような失敗を未然に防ぐために教会には何ができるのでしようか？ 基本的には、何もできません。私たちが肉の部分に留まっている限り、こうなるのは、目に見えています。何とかしようとするれば、この肉の思いが取り除かれなければならないわけです。ひとつ、画期的な提案をしましょう。

全ての教会が、その会則の第一条に改正不可能な条項として、五〇年後には解散するという

規定を盛り込むことです。教会によつては、一五年後とした方が、よいところもあるでしょう。これによつて、信徒は、今まで以上に頻繁に神さまと触れ合えるようになり、また、リバイバルの期待に心を開いていられるようになります。

教会は、富や名声を求める姿勢から解放されるでしょう。蓄えた資金は人々のために当てられることになります。そうすることで、キリスト教とは名ばかりの、イエスさまの生き方に背を向けた教会は、自然に消えてしまいますから、残った教会としても、教義の違いをめぐって、人々が混乱するのではないかと、いうあらぬ心配をする必要がなくなるわけです。

このアプローチの狙いはきわめて単純です。すなわち、教会の中で聖霊が十分に働く状況をつくるということです。古い教会は、高慢となり、新しい動きを封じ込めようとするものです。が、聖霊は、活力に満ち、神さまに従つていこうとする新しい教会に働きかけてくれます。その新しい組織もまた、飛ぶ鳥を落とす勢いで成長した後は、しばらくすると、以前自分たちが駆逐した教会と同じくらい肥大化、硬直化してしまうものです。そのうちに、より一層聖霊に満たされ、交わりを深めた教会が現れ、これに取つて替わる。この新しい教会はかつては硬直し、解散したものの、再生し、活気を取り戻した教会というケースもあるわけです。

こうして聖霊と共に歩みながら、自分たちの組織に取って終わりの時を設け、小麦種のように

に次から次へと生まれ変わってみるのはいかがでしょうか。

イエスさまは謙遜な方でしたから、それに従って生きる私たちも自分自身について嘘をついていないことが求められるわけです。しかし、自分の身の保全を考えている教会は、外に對する宣伝になるような都合のいいことしか言いません。そうやって人々に引き続いて支持してくれるよう呼びかけるのです。

宣伝のお陰で、教会が、素晴らしいものに見えても、実はとうの昔に中身は朽ち果てているということもあります。

イエスさまが生きたように生きるということには、高い地位に昇りつめたい、脚光を浴びたいという誘惑を拒否することです。自分の持てるものを無償で与えたい、なぜなら相手に仕えることが自分の喜びでもあるのだから。そういう人が差し出す助けのみ、イエスさまに受け入れられるということです。

自分の教会の宣伝を始めたたん、その教会はイエスさまの生き方を放棄したことになるわけです。死の杯に口をつけたのと等しいことです。

教会を初めとするキリスト教団体はその資金量に上限を設けるべきだと思います。資金が増えれば、それだけ聖霊の働きに期待することもなくなり、人々のしもべとなるという意識も稀

薄になるからです。

教会の付属組織といえども、さびが腐食し、盗人が容易に押し入って来るようなところに宝を積むのは避けた方が賢明です。

イエスさまが、十字架で死なれたのは、私たちがこの世で大金を蓄えるためではありません。不自然なくらい巨額の資金量を誇る教会は、いつかは不祥事が発覚するものです。教会が自分の教会の益になると言って信者に献品や献金を要求することがありますが、これは是非やめるべきです。イエスさまはそんなことを求めています。神の国を構成するのは、自分の意志で行動する人だけです。奴隷として、子どものように純粋な気持ちで自らを低くして働く人が、果たして相手に何か要求するなどと考えられるでしょうか？ そういうことをする教会自体、人には言えない事情で追いつめられており、所詮は、消滅してしまうものと思われず。

どの教会も互いに愛し合いなさいというイエスさまの戒めを遂行できるような関係作りを最優先事項として掲げるべきだと思います。愛と一致というテーマをなおざりにして権威、牧師、役員への服従を求める教会は、本来あってはならないのです。権威をかさに着て、信徒との交わりに一線を画するような人がいてはなりません。また、役職についているというだけの理由で、過度の裁量権を与えろというのは避けた方が賢明です。全ての権威は神さまが選んだ人に

帰せられるべきだからです。また、その選ばれた人も自分の生き様や能力が承認されない限り、どんな役職についていようが、自分は神さまから権威を与えられたなどと言うべきではありません。組織における権威に決して神さまが選んだ権威に取って替わるものではありません。

また、選挙と聞くと民主的なイメージがありますが、これも、ひとつの家の中で分裂をもたらずものにはかならないのではないのでしょうか。そのような制度に頼る前に、まず、隠しごとをせずに互いにいたわり合うような交わりを通じて絆を強めることです。そしてこの絆を基にものごとを決める、そのプロセスこそが大切だと思います。

求められているのは、野心の虜になつたリーダーが下す決断ではなく、ひとりひとりの構成員を十分に顧みた上で下す決断です。

聖職者を、叙階を通して、普通の人にはない権限を授けられた特別の集団と考えるのは、そろそろやめた方がいいと思います。役割も、例えば牧師という肩書がついているにすぎません。人々に仕えるという点において、牧師も普通の信徒も変わりはないわけです。

ウィリアム・ストリングフェローは、「世の中の組織は皆、悪魔的だ。なぜなら、サタンと同じように人々を扱っているから」と言いました。なかなか鋭い、説得力のある発言です。

イエスさまは人々と共に歩みました。人々が集うシナゴグ、社会の最下層に属する集まり

を除いて、当時の宗教組織には、一切関与しなかったのです。

今日の教会の関係者は、この事実が何を教えているのか、一度考えてみる必要があると思います。イエスキリストの生涯を振り返ってみると、柵手が何を望んでいるのか省みず、人に対する思いやりを欠いた自己中心的な組織にとっぴり浸かってしまった人に対しては、非常に厳しい態度をとっていることがわかります。

モーセの十戒、例えば「安息日を覚えてこれを聖とせよ」という戒めについても、組織に都合のいいように解釈されていました。これをイエスキリストは本来の枠組で見直すわけです。「安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません。」（マルコ二・二七）

キリストの愛は、人を救うことを目的としています。人間の行動や生活のあら捜しをするためにあるわけではありません。私たちに真実を告げ知らせ、解放するためにあるわけです。まず、愛があり、それが成就するよう補うかたちで律法があるというのが本来の姿だと考えられます。相手を蔑んだり、無視したりして、その要求に耳を傾けようとしないうる人や組織に対し、イエスキリストは毅然とした態度をとっています。

「忌まわしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、はっか、いのんど、

クミンなどの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、すなわち正義もあわれみも誠実もおろそかにしているのです。

おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。

だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ちし、町から町へと迫害して行くのです。」

(マタイ三章より抜粋)

パリサイ人は、自分たちの、がちがちの組織に骨の髄まで浸たってしまつて、律法を持ち出して人をやり込めることしかできなくなつてしまつていたということです。

ここでは非覚えておいていただきたいのは、このイエスさまの言葉は、パリサイ人にだけ向けられたものではないということです。今日の教会の問題でもあるわけです。

企業を初めとするこの世の組織と、そこで採用されている管理システムは、キリストのからだと全く関係がありません。ところが、これが、これが、いつの世も人間はなかなか理解できないようです。ですから、どんなに素晴らしいかたちで機能している組織といえども、この世のものである以上、それをそっくり教会がまねるのは誤りだということです。

最後にもう一方所聖書を引用したいと思います。イエスさまが当時の組織（宗教的、世俗的双方の組織）とどのような関わりを持ちながら生きたのか、本当に理解しているでしょうか？ そのことを確認する上で是非心に留めておいていただきたいみことばです。今後の人生にどう生かしていくかは、読者のみなさんと聖霊の働きに任せるより他ありません。

「動物の血は、罪のための供え物として、大祭司によって聖所の中まで持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるからです。

ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。」（ヘブル一三・一一―一四）

一致

教団、教派を問わず、クリスチャンなら誰もが、頷くことをひとつ挙げるとすれば、「イエス・キリストは主」ということです。

細かい教義上の相違、あるいは、個々人の野心が原因で、今日、実に多くの教派に割れてしまっています。

仮にイエスさまが祈り求めたような一致がもたらされるとすれば、この世においてイエスさまが共にいるところに訪れるはずです。それ以外のところでは考えられません。

カトリックのシスターの集まりに出る機会がありました。私は、出席した数少ないプロテスタントの牧師のひとりでした。そこで私は、エキュメニズム（世界教会主義）に対する今後の展望と、教会が多くの教団、教派に分裂している現状について意見を求められました。他の出席者は、知識が豊富で弁が立つ方ばかりで教会の歴史や伝統の変遷といったテーマで議論を闘わせていましたので、私は、少しばつの悪い思いがしてきました。私の意見はいたって単純だ

ったからです。

指名されたとき、私はこう言いました。「私は、まだ生まれて間もない教団の一員です。こんな新しい教団ですが、いつの間にか多くのしきたりのようなものができて、更に分裂を余儀なくされました。私は今日ここで、その経緯について話すつもりはありませんし、みなさんも、そういったことは聞きたくないでしょう。みなさんは私たちに較べ多くの由緒ある伝統に育まれた、歴史のある教団に属しておられます。伝統という点において、私たちは、足元にも及ばないと思います。」

しかし、教会の歴史を巡って、いろいろ議論してみても、ことが解決するでしょうか？ 一度分裂した教会がまた元に戻るでしょうか？ そうは思いません。ですから、私としては、みなさんの意見に対し、何も申し上げることはありません。しかし、心を合わせてイエスさまのことについて語るといふのであれば、私は喜んで議論の輪に加えていただくつもりです。」

そう言い終わって腰を下ろしました。

この会合が終わって帰路につこうとすると、多勢の人に引き止められ、是非、自分の教会の付属学校に来て、同じことを話してほしいと言われました。

数年前、シンガポールで開かれたある会議に出席したときの事です。そこでの話し合いの

テーマは、教会統合の可能性を探り、神さまが私たちに何を呼びかけているのかを聞くということでした。四〇もの教派から四〇〇人が出席しました。一週間にわたる活発な意見の交換のあとで、全ての出席者が迷うことなく、署名した声明は、「イエス・キリストは主」というものです。

おそらく、組織的にみても非の打ちどころのない、世界教会など存在しないと思います。もしあるとすれば、素晴らしいというより気味が悪いという気がします。その様な一致は、現実離れしているからです。

しかし、実生活の上での一致は可能です。なぜなら、父なる神がイエスさまの祈りに応えられるからです。

「聖なる父。あなたがわたしにくださっているあなたの御名の中に、彼らを保ってください。それは彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたことを、この世が知るためです。」(ヨハネ一七・一一、一三)

私は教会の統合と呼んでさしつかえない場に立ち合ってきました。そのような統合が起った教会では、決まって人々はイエスさまのように人のしもべとなる生き方をみなが実践して

いました。一方で私は実に多くの教会が分裂するのも見てきています。この経験を通し、よくわかったことがあります。誰がしもべになるのか。誰が一番低い者となるか、誰がしんがりになるのか。誰が社会的評判を捨てるのか、そして誰が一番権力のない者になるか。二つのグループがこんなことを言い争ううちに分裂してしまったことなどただの一度としてないことです。

一致。それは、イエスさまが私たちを愛したように、私たちもお互いに愛し合うところから生まれるものです。そのために、イエスさまの生き様が聖書に克明に記録されているのだと考えられます。それを通して、私たちはいかに神さまに愛されていたかを知り、私たちもまた互いに愛し合うことができ、教会に一致がもたらされることを知るわけです。

スモール・グループ

みなさんがイエスさまのように人に仕える生き方をする心の準備が整っているなら、私は喜んで、その指針を提供させていただくつもりです。何も他の人とは変わった特別なことが求め

られるわけではありませんが、人に献身的な態度で尽くそうとすれば、当然の成りゆきとして、今まで以上に深い交わりがなければならぬわけです。

そこでこの章では、そういう交わりの一例として、スモール・グループを取り上げてみたいと思います。

初代教会は家庭こそ皆さまの働きを味わう理想的な場と考えました。そこでは、堅苦しい様式の入り込む余地がありません。大きさからして、全員が話しに加わることができる、きわめて自然な環境と言えます。

お互いのことがよくわかるよう、隠したてのない関係を持つことが何よりも重視されています。その中で祈り合い、福音を分かち合ったわけです。また、対話を通して、聖書が学ばれ、日々の暮らしの中でその教えが実践されました。

イエスさまは、福音を宣べ伝えるに当たって十二人の弟子を選びました。イエスさまの生き方の特徴づけるのは愛です。愛は、人と人との交わりを通して育まれるものです。

グループが大きければ、人々は交わりは稀薄になり、相手に仕えるのは、それだけ難しくなります。ですから、イエスさまと同じように生きようとすれば小さなグループが理想的と考えられます。

次にスモール・グループでのリーダーシップのあり方について考えてみましょう。リーダーは黒子役に徹して、なるべく他の人が自由に話せるような雰囲気を作ることです。相手に福音を伝えようとするなら、まず、相手の話に耳を傾けて何を求めているのかを知ることです。自分が経験したこともないことを相手に求めたり、自分は、明確な答ができない質問を、相手に投げかけるのは、考えものです。相手の言うことをよく聴き、肯定的に受け止め、自分の意見を率直に述べる必要があります。

リーダーは、謙遜な態度を崩さずに、自分の本当の気持ちをわかってもらうこと、そして必要とあらば、愛をもって反論することが求められます。幼な子のようにあるべきです。相手の言うことを額面通りに受け止めて、あれこれ詮索せず、共に喜び、共に泣くことです。誉れを求めない者であるべきです。自分の失敗を隠そうとせず、誠実な姿勢でものごとに取り組むことです。若者のようにあるべきです。弱者が虐げられることを察知し、彼らの味方になることです。

これは、私の経験上言えることですが、的確なリーダーシップをとる人のいるスモール・グループでは、例外なく、ひとりひとりがイエスさまの生き方に従って生きています。その意味で、このリーダーシップこそがスモール・グループを充実させる上での鍵と言っているかと思

います。次に、スモール・グループで交わりを深めるには、参加者ひとりひとりが具体的にはどうすればよいのか、考えてみましょう。

本当の自分を伝える

合衆国憲法第五修正箇条は、プライバシーの保護について触れています。ところが、これを全面的に信奉したのために、教会までプライバシーの保護を求める人の群れになってしまったようです。そこでは、かたちの上では絆があるように見えますが、実際は、ひとりひとりが自分の殻に閉じ込められているのが現状です。この殻を破るために私たちは偽ることなく、本当の自分の姿を相手に伝えなければならぬのだと思います。外見や第三者からの情報で、ある人のことを知るには、限界があります。本当に理解するには、相手が何を考え、何で悩んでいるのかを直接本人の口から聞く必要があるのではないのでしょうか。

自分の経験を人に話すこと、弱みを隠そうとしないことは、しもべとして生きようとするれば、

当然求められることと思われまます。

光の中を歩もう

人間は、ひとりひとりがキリストにつながれているということを理解していない人たちを前にして、自分の心情を打ち明けても、反論され、やり込められるのがおちです。言い返す方もそれでカタルシスを得るわけです。

しかし、教会は本来、そのような場ではありません。心に不安を持った人については、力になつてあげるのが、キリストにつながれた者としての努めです。人が悩みを打ち明けてきたときは、その話を真摯に受け止めるべきだと思います。

キリストのからだの全貌とその働きについては、コリント人への手紙一二章七節のパウロの言葉を読めば、一目瞭然です。パウロは、御霊の賜物は精神面での向上、善を求めるためにおのおのに与えられている、と言っています。

また、コリント人への第二の手紙五章一六節から一七節を見ると、パウロは、きわめて強い口調で、私たちがお互いにどのような目で相手を見ればよいのか、教えています。

「ですから、私たちは今後、人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのよくな知り方はしません。だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

クリスチャンは、お互いを新しく造られた者と見なければならぬわけです。その意味で、人と接するときには、神さまがその人に与えられた恵み、賜物に目を留める必要があります。

「あなたはいい人なんですけどね。でも……」と言って、欠点をこきおろしかかるのは、もうやめなさいということです。相手がどのような状況にいても、神さまの子どもとして、認めることが求められています。

ときどき、相手のいい面に目をむけようとする、そのような態度に反対を唱える人がいます。「そんなこと言ったって、欠点を指摘してやらなければ相手は、それをどう改めたらよいのか、わからないじゃないですか」

答えは至って簡単です。イエスキリストはこう言っています。

「私はあなたがたがすでに自責の念に駆られているのを知っている。だから私は、あなたのこと

とを責めるために来たのではない。豊かな人生を提供しに来たのだ――

紙を渡されて、自分の性格で嫌な部分を五つ書いて下さいと言われたら、あつと言う間に書き終えてしまうでしょう。その後で紙を裏返されて、「では、自分の性格で気に入っていることを五つ書いて下さい」と言われたら、どうでしょうか？ かなり時間がかかるはずですよ。

私たちは自分の至らない部分については、痛いほどわかっているものです。

「北風と太陽」の話は、このことを如実に物語っています。（多くの童話は、何らかのかたちで私たちにインスピレーションを与えてくれるものです）

北風と太陽が厚手のオーバーコートを着て歩いていく男の人を見ていました。やがてどちらかが、彼のコートを脱がすことができるか勝負しようじゃないか、ということになります。まず北風の番です。

北風は男の人を吹き飛ばさんばかりの突風を起こしますが、風が強くなればなるほど、男の人は、コートをしっかりと体に押しつけ、少しでも寒さを防ごうとします。そこで太陽が「よし、俺の番だ」とでてきました。太陽は、ぼかぼかと暖かい光を男に降りそそぎました。すると男はコートを脱いで、陽の光を浴びて気持ちよさそうに歩いて行ったという話です。

私たちにもこの太陽のような気持ちがあれば、何も特別なことをしなくても、相手は自分か

ら心を開いて、外敵から身を守るためにまもっていた不必要な重いよろいを取り払うはずで、自分の身の上を相手に話すことは、かけがえのない自分自身を相手に委ねるといふことです。その相手の信頼に真摯な気持ちで応えたとき、お互いの絆は、一層深まるものと思われれます。「あの人を信じてよかった。また、相談にのってもらおう」と思えるとき、真の交わりとなるわけです。

交わりがもたらす恵み

今までにはなかった信頼関係がきずかれると、「下手にかかるとひどい目にあうかもしれない、かえって逆効果だからよそう」と引込み思案になっていた昔と違って、気兼ねなく、つきあえるようになるものです。

この生まれ変わった交わりがもたらす、第一の恵みは、「告白」です。ヤコブの手紙にこうあります。「ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。い

やされるためです。」(五章一六節)

お互いの信頼関係がなければ、人は自分の罪というよりは、相手の罪を告白してしまうものです。さもなければ、まわりの人から、額いてもらえるような当たり障りのない罪の告白になるのが普通です。例えば「私は信仰も祈りも足りないと思います。」といった具合です。

しかし、相手を信じていけば、悩みを打ちあけて、癒されるように祈ってもらえるはずで

告白は、いわば、身体の老廃物を排泄する日々の営みのようなものと考えるとわかりやすいかと思えます。告白することで、私たちは、余分な老廃物なしにすっきりとした気分で日々の暮らしを送ることができるようになります。

この告白を怠っていると、本来排泄されてしかるべきストレスが知らず知らずのうちにたまっていきます。

また、告白することは、自分自身の訓練にもなります。告白を通して、相手の祈りに自分を委ね、ひいては、自分自身を見つめ直すことになるからです。

そのように冷静な気持ちで折りに触れ、自分を見つめ直していく姿勢は、悲しいかな、今の教会に最も欠けている気がします。結果、人間不信に陥ってしまっているのです。

次に新しい交わりの第二の恵みを見てみましょう。それは、聖書を実践的に学んでいくこと、

つまり、みことばを実生活に当てはめて考えるということが出来る点にあります。

実践的に聖書を学ぼうとすれば、告白は、避けて通ることができなくなってきました。なぜなら、次の二つの問いに常に答えていく必要があるからです。

「聖書は、私に何を言っているでしょうか？」「それに対し、私は今何をしようとしているのでしょうか？」

問われているのは、この二つです。

聖霊に促されて、自分の信じていることを告白することが、すなわち、これらの問いに答えるということになります。

イエスさまとヤコブは、このような実践的な学びを奨励しています。

「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることが出来ます。」(マタイ七・二四)

「また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってはけません。」(ヤコブ一・二二)

交わりを通して得られる第三の恵みは、相手のことを思って、敢えて、反対することです。

人間は、一度相手に心を許してしまうと、ともしれば馴れ合いの関係になってしまう、長い

日で見れば、お互いのためにならないことを見過ごしてしまいう傾向があります。

しかし、その問題に対処しない限り、本当に実のある信頼関係を育むことは、不可能です。信頼の絆を深めるとは、本来、誤ったことについては、お互いに指摘し合うということであるはずで

この点については、前に述べたので、ここでは、詳述は避けたいと思います。

第四の恵みは、親密さです。新約聖書は、コイノニアと呼んでいます。

私たちの関係は、教会というバスにたまたま一緒に乗り合わせた見知らぬ乗客同士の関係ではありません。生涯を通じて心と心の通じた交わりを深めていく仲間です。

私たちの夢、将来の展望。これらが所有しているものと同じく、お互いの財産となるわけです。

—お互いの絆をつくることをあきらめてはなりません。

また、この段階まで来ると、お互いにしもべとなるという言葉の意味が、身をもってわかると思います。

お互いがしもべとして尽くす愛。それは、時には与え、時には与えられる。この繰り返しです。無意識のうちに、ある器官が他の器官の働きをサポートしている人間の身体と同じことで

す。

スモール・グループについて考えた前の章の中でも触れましたが、キリストのからだは、ちょうど私たち自身の身体のように、ゆっくりと穏やかに、しかし、確実に成長していきます。この本で私が申し上げた過激な提案に直直しても、その営みが狂うことはありません。

年期の入った酒袋を使って、丹念にワインをつくっているときは、ひとつひとつの工程に時間がかけれられ、細心の注意が払われるものです。

こうしてできあがったワインは、貴重で、保存する価値のあるものと言っていると思います。

痛みを分かち合う

私には、何人か同じ牧師の知り合いがいるのですが、彼らとはかつて、イエスキリストのしもべとしての生涯を共に学び、自分たちもその様に生きようと誓い合った仲間です。久しぶりに彼らから修養会に来ないかと誘われ、参加しました。ディスカッションが始まるにあたって、ひと

りが「アーウィンさん。あなたは厳しいこと言うねえ。本当にこたえますよ」と切り出してきました。私は「それは、それは。でも悪気はなかったんですよ。どうか、たわごとだと思って忘れてください。」と答えました。

すると彼らは「とんでもない！」と言いました。

彼らに言わせると、胸にこたえるにも、その痛みの質が変わったということです。

以前は、自分中心の生活からくる欲求不満が原因で、痛み自体も何かもやもやしてはつきりわからなかった。しかし、相手と共に歩むということに重きを置き始めると、その痛みが自覚症状として現れてきたとのことでした。

確かに痛みの度合いという点では、今の方が辛いけれど、決して元の生活には戻りたくないというわけです。

誰もが辛いと思う痛みは、心身の健全な営みが阻害されることによって引き起こされます。事故による怪我、病氣、失望。しかし、このような痛みが全て、神さまの愛によって取り除かれるとは限りません。

パウロは、ピリピ人への手紙で、「私はキリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って……」（三・一〇）と述べています。

キリストの復活の力を知りたいという切実な願いは、クリスチャンなら誰もが持っているのではないでしょうか？

へブル人への手紙には、イエスさまが自分が受けた苦しみによって従順を学んだとあります。

(五・八)

聖書を読む度に気づかされることは、イエスさまが私たちに代わって苦しみを受けたこと、もし私たちの身代わりとなっていなければ、その痛みは普通の人の味わう痛みと何ら変わらなかったであろうということです。

イエスさまが「あなたがたも私と同じような扱いを受けるでしょう」と言っています。ですからイエスさまと同じように生きるならば、自分以外の人の痛みを負うことになるというのは、極めて当然のことと考えられます。

聖書の一貫性について

イエスさまが死に至るまで、人々と共に歩み、そのしもべとなったことを理解し、この世の様々な出来事をイエスさまと同じ視点に立って見始めると、今まで曇ってよく見えなかった聖書のみことばが驚くほど鮮明に見えることとと思います。

ここでは、聖書を読み、理解する上でのポイントについて考えてみたいと思います。聖書を通読し、その内容をひと通り理解したと感じたら、次に、一歩進んで、聖書の言葉がイエスさまの生涯と矛盾していないかどうか確認してみるとよいと思います。

聖書の言葉は実に最初から最後まで矛盾するところがありません。ですから、神さまがどのような方か、身をもって示したイエスさまの生き方が生涯変わることがなかったわけです。

したがって聖書をどう理解するにせよ、イエスさまの生き方と一致しない解釈を加えてはならないと思います。

しもべであり、人々の模範であり、謙遜で、子どものように純粹で、年若い者、自分を最後

の者、いちばん低い者とし、名声や力といったものを求めなかった、その生き様を常に念頭に置いて、聖書を理解することが、求められています。

あるみことばを自分なりに解釈し、それがイエスさまの生き方とどうも矛盾するように感じた場合、無理に解釈しようとしないことです。後々、疑問が解けることもあるわけですから、時には、待つことも必要と考えられます。

ただ、今の自分の見方がイエスさまのありのままの姿に合致しないがために、自信を持って人に言えるような理解ができていない。この事実を自覚しておくことは必要だと思います。

今まで、教会の年次目標や自分の生活の指針として取り上げてきたみことばをもう一度理解しようとする、どうもイエスさまの生き方とうまく重ならないと感じることがあるものです。これは裏を返せば、今までそのみことばを誤って理解していたということです。

まず、三位一体の神があつて、聖書はそれを補足する第四の存在と考えるのは誤りです。

聖書は、神さまの啓示に他なりません。書物というかたちをとっているというだけのことです。

聖書についてどのような解釈を加えるにせよ、それが啓示された神さまの姿と違っては論外です。

イエスさまといつも共に

今世紀のリバイバルについては、ペンテコステ的要素やカリスマ的要素を抜きに語ることはできません。

ペンテコステ派は、聖霊の賜物の再発見に中心的役割を演じ、その圧倒的なパワーも手伝って、終わりの時は近づいていると信じ、宣べ伝えていきます。

彼らは、もはや聖書に再発見の余地はない、みことばは我々のために全て語り尽くされたと感じたのです。それ故、カリスマ的事象は、究極の姿、つまり、リバイバルの中のリバイバルを表していたというわけです。

聖霊の力は長い間、人々から一顧だにされず、失われたに等しい状態でした。教会にその力の重要性を再認識させたという点において、ペンテコステ派の役割は確かに大きなものがあります。

しかし、教会に一致の実をもたらすことにはできませんでした。実は、それこそ人々が求めていた究極の姿だと私は思います。

イエスさまを中心にした熱気あふれる礼拝があるにもかかわらず、私はどうも彼らが大切にしているのは、イエスさまを深く知ることよりも聖霊のバプテスマを受けることではないかと思えて仕方がないのです。実際、ペンテコステ派と言えば、聖霊のバプテスマを連想する人がほとんどかと思えます。

キリストを知るより異言を語るのが先決という印象は拭えません。このことは中心がキリスト論的でないことを表しています。とはいえペンテコステ派にしてもカリスマ派にしても、キリストとのつながりの強さ、という点では問題はないのでしょうか。おそらく、神さまの偉大な計画が成就する時が近づいているのでしょう。この点については、私も異論はありません。聖霊は今、教会とこの世に幅広く働きかけ、神学上の論争、私たちのイエスさまに対する感傷的な思い入れを一掃して、預言された本来の大きな使命を果たそうとしているのだと考えられます。その使命とは、主の栄光を現わすということです。

福音書で、ヨハネは、これから来られるお方のこと、聖霊の働きについて、語っています。「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、

わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてください。」

「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」

「その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。」

「御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。」

(ヨハネ一四・二六、一五・二六、一六・一三、一六・一四)

以上のみことばから明らかなのは、聖霊には、イエスさまの本当の姿を明らかにし、私たちが神さまの前では罪人だということを悟らせるという大切な使命があるということです。

ですから、聖霊だけを取り上げて大騒ぎするリバイバルは、実は聖霊の働きを妨害していることになるわけです。なぜなら聖霊が私たちにイエス・キリストという方のことを語ろうとするのに耳を傾けていないからです。

私自身は、世界の最後にして最大のリバイバルは聖霊でなくイエスご自身、その生き様に焦点を当てたりバイバルになると思います。

この世は、今だかつて、イエスさまの力に優る力に出会ったことはありませんでした。また、教会で愛の交わりを深めると言っても、自分のいのちさえも捨てたイエスさまの愛を越えるこ

とはできないわけです。

「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」(ヨハネ二〇・二二)

このイエスさまが教会に宛てたメッセージの持つ深い意味をもう一度考えてみる必要があると思います。

天の神さまがイエスさまを遣わしたように、私たちも部分的にはあるけれども、また、遣わされる。このことを掛け値なしに信じることは、なかなか難しいでしょう。

私たちは、イエスさまによって、遣わされるのですから、当然、イエスさまと同じように生きることが求められ、イエスさまが神さまから命じられたのと同じことが命じられるわけです。霊の賜物の働きかけによって、私たちは互いに愛し合えるようになり、主と同じ姿に変えられるのです。

「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に隳する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。」(エペソ四・一二)

成熟するとは、自分もキリストになるということです。奉仕とは、相手がキリストのように成熟するよう、手を貸すということです。キリストのようになるには、イエスさまと同じ心を

持ち、その生き様を自分の心に焼きつけておく必要があります。

この本の中で、私は、イエスさまの生き方について、いろいろなことを語ってきました。もし、それが正しいなら、私の語ったことがみなさんの聖書理解の助けとなるように、そして実生活でみなさんなりに行動に移していけるように聖霊が働いてくださると思います。

また、聖書を学ぶ上でのヒントも挙げてきたわけですが、これらは全て、聖霊が私の実生活に働きかけて下さった経験を基にしています。

この本がみなさんの信仰を変え手がかりになるとはかぎりませんし、またその必要もありません。ただ、私の考え方に賛成する、しないにかかわらず、自分なりに神さまからの呼びかけに応えていく必要があると思います。イエスさまのように生きなさい。十字架を心に留めなさい。その苦しみを共に担い、その死をも甘んじて受けなさいという呼びかけにです。

この本を読み終えたみなさんが、罪悪感に捕らわれないように、イエスさまのように成熟した、非のうちどころのない人間になるのは、到底無理だと落ち込まないように、聖書の言葉をここで分かちあいたいと思います。

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」(ペリピ二・一三)

「私たちは神の作品であつて、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」(エペソ一・一〇)

私は一時期、会社勤めをしていたことがあるのですが、火曜日と木曜日は昼休みに通りの向こう側にある体育館に同僚と一緒に行ってバスケットボールをしていました。私はこのスポーツは、どうも苦手です。組分けするとき、「うちが、この前はゲイル・アーウィンを入れたから、今度はそっちだよ」と話す声が、いやでも耳に入ってくるからです。

こんな具合ですから、私の場合、バスケットボールと言つても、試合を楽しむと言うよりは、ただ身体を動かして汗をかいていただけです。

ところが、デーブという二メートル以上もある同僚がいました。彼と同じチームになると楽でした。試合をする前から勝ちが決つたようなものです。私がすることといえば、ボールをデーブに廻すことだけ、あとは彼がシュートしてくれます。

私はパスを受けると気持ちだけドリブルして、デーブに廻し、彼がダンクを決める。こうして着々と得点を重ねていったわけです。

「どうだい。俺たちすごいだろう。」

私は、自分のことを自慢するように言ったものです。これは、私たちとイエスさまの関係に
実によく似ています。イエスさまは、私たちの内に働いています。つまり、イエスさまと同じ
ように生きようと私たちが決心できるのも、イエスさまが働いておられるからです。そしてそ
の教えを実践するときにますます力を与えて下さるわけです。

私たちは、イエスさまの作品です。ですから、今の私たちの姿に対し、イエスさまは一〇〇
パーセント責任を負っており、またその責任を快く引き受けて下さっています。

私たちのすべきことは、イエスさまと同じチームに留まり、不安という名のボールを彼にパ
スして、サタンのデイフェンスを破って、シュートをしてもらうことです。

「あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。」

(Iヨハネ四・四)

ですから、いつも神さまに用いてもらえるよう心の準備しておくことが大切です。聖霊の
働きに身を委ねて、キリストに自分のことを覚えてもらうことです。

イエスさまに倣い、自分を捨てて、主にあつて成長していきましょう！

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分
の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもとめせずに十字架を忍び、神の御座の右に着

座されました。」(ヘブル二二・二)

訳者あとがき

ゲイル・アーウィン師の名著「ジーザス・スタイル」を紹介できることを本当にうれしく思っています。

一九九三年四月に私は数人の若い牧師たちと一緒にゲイル・アーウィン師を日本に迎え、研修の時を持ち、大きなチャレンジを受けました。

ゲイル・アーウィン師は長い間の牧会経験の後、ことにアメリカのカルバリ・チャペルを中心にセミナー講師として広く用いられ、とくに英語圏においては屈指の「聖書教師」として注目されています。

彼の伝達方法は、まさに「聖書を魅せる」「聖書を見せる」というもので、実際的であり、同時に聖書にしっかり根を下ろした福音的なものです。

しかも、彼の生き方、考え方の中らにじみ出てくる「キリストの香り」は言葉の形容を越えて魅力的です。

「ジーザス・スタイル」という本は、ゲイル・アーウィン師に会う前から友人にすすめられて

持っていたのですが、彼に直接会ってからそれまで以上に、とにかく翻訳して日本のみなさんに知っていただきたいという動機づけが与えられました。

翻訳に関しては、私たちの教会の仲間で、当時通訳の勉強をしていた為本雅之さんが「力だめし」ということで喜んで大半を訳して下さいました。私の力不足を彼がすべて補なってくれました。

細かいニュアンス等についても、彼が直接アーウィンさんにあつて確認してくれました。私は最初の部分を訳して日本語の文体の流れを指示し、用語のチェックなどをさせていただきました。

為本さんとの共同作業は、彼が訳している文そのものから彼自身が大きな励ましやチャレンジを受けていることをそのつど教えられ、牧師として信徒の成長をこの本の翻訳作業を通してまざまざと見させていただきました。この本を世に送り出す「裏づけ」としてこれ以上のものはないと考えています。しかし、未熟な訳者ですから、まだまだ原文の持っているインパクトに遠いものがあるような気がしてなりません。

共同訳者の為本さんにとつても、私にとつてもこの「ジーザス・スタイル」が最初の訳本となりました。心から感謝しています。

「ジーザス・スタイル」を生きるお互いでありたいものです。

感謝を込めて 関根一夫